1/3
3/2

著昂重賀志

軍圍攻順旅

地理調査會

東京 東京堂 發行

ج

42-319

旅順攻圍軍

45. 3. 7
内交

旅順攻圍軍ノ發行ニ就テ

曩ニ予ノ日露大戰役ノ始終ヲ見聞スルヤ、小筆モテ其日々々ニ志シタルモノ累々篇ヲ成セリ、以爲ク後世ニ至リ歴史家將タ畫家ガ選擇ノ資料ニ供スルニ足ランカト、依テ出版ヲ謀ル、原稿厚サ四尺七寸、地圖寫眞約四百、而モ**大役小志**ナル書名ヲ固執シ、其他ノ命題ヲ斷乎斥ケタルヲ以テ、東京市中ノ書肆克ク出版ヲ斷ズル者ナシ。獨リ東京堂主人大橋省吾君然諾シテ曰ク、損得ノ如キハ打算以外ナリト。校正三年、其間主人病ヲ得テ起ツ能ハズ、鎌倉ニ孤臥スルヤ、會、**大役小志**刻成リ、江湖ノ批評スル者、「不朽ノ業、不朽ノ書」、「後世ニ傳フベキモノ」ノ語ヲ以テス、主人枕上ニ視、欣然笑ヲ含ムコト數次、尋デ白玉樓中ノ人ト爲レリ。

大役小志固ト浩瀚、故ニ批評セシ者往々**旅順攻圍軍**ノ一卷ヲ別本ニセンコトヲ勸メ、且ツ書ヲ著者ニ寄セテ此事ヲ需ムル者少カラズ、而モ此ノ如キハ東京堂故主人ノ志ニ非ザルヲ以テ敢テセザリキ。今茲ニ予ノ**地理調査費**ノ寄附ヲ謀リ、其ノ未ダ不足ナルヲ知ルヤ、東京堂新主人來リテ曰ク、今ニシテ**旅順攻圍軍**ヲ別本トナシ、其收益ノ全部ヲ**地理調査費**ニ寄附スルヲ得バ、故主人ノ志ヲ成スモノナリト、是レ此書ヲ發行スル所因ナリトス。

志賀重昂誌ス

地理調査費ノ主意

方今西洋列國ニ於テハ貿易販路ノ探究上、人口增加ノ處分上、相競ヒテ世界ノ地理ヲ攻究シ、調査シ、今ヤ殆ド之ヲ以テ國家ノ生命トナスノ勢アリ。飜テ本邦ノ情態ヲ察スルニ、地理ノ攻究及調査ノ風尙未ダ熱熾ナラズ、動モスレバ輙チ第二十世紀前半ノ氣運ニ後レヲ取ラズヤト、吾人ノ只管杞憂ニ堪ヘザル所トナス。因テ玆ニ地理調査費ナルモノヲ置キ、聊カ以テ之レガ用途ニ充テンコトヲ期ス。然ルニ百事多端ノ今日、四方ノ義捐ヲ仰グガ如キハ固ヨリ忍ビザル所、卽チ左ノ方法ニ依リ、金若干圓ヲ寄附シ、而シテ此事業ハ寄附者ト一切分離シ、全然特立ノモノタラシメントス、幸ニ微志ノ存スル所ヲ諒トセラレ、仰ギ希クハ諸君子ノ庇蔭ニ依リ、以テ本邦人須務ノ事業ヲ大成セシメラレンコトヲ。

地理調査費寄附ノ方法

寄附金　若干圓

右ハ卑著旅順攻圍軍（大役小志中ノ一卷）、世界山水圖說、世界窟眞圖說三書ノ收入ヲ以テ充ツ

（甲）旅順攻圍軍收入　一冊定價金七拾錢、出版者東京堂主ハ此事業ニ同情ヲ表シ純益ノ全部ヲ供提スベシト契約セリ

（乙）世界山水圖說收入　一冊定價金壹圓、出版者坂本嘉治馬（富山房主）ハ此事業ニ同情ヲ表シ純益ノ全部ヲ供提スベシト契約セリ

（丙）世界窟眞圖說收入　雪、月、花等逐次ニ發行ス、一冊定價金貳圓、出版者川田佐門次（明治製版所主）ハ此事業ニ同情ヲ表シ純益ノ全部ヲ供提スベシト契約セリ

地理調査費ニ關スル委員

地理調査費ニ關スル左ノ委員ヲ囑託ス

（甲）學術委員　（乙）會計監督

（甲）學術委員

本邦ノ學界ニ重望アル人士ニ委員ヲ囑託ス

委員ハ如何ニ地理調査費ヲ使用スベキヤ等ニ關シ議決スルモノトス

（乙）會計監督

本邦ノ財界ニ重望アル人士ニ會計監督ヲ囑託ス

各出版者ハ各書賣上純益金ヲ會計監督ニ納付スベキモノトス

地理調査費ハ明治四十四年七月發表セシモノ、而シテ出資高豫定ノ三分ノ二ニ上リタルハ感激ニ堪ヘズ、然レドモ尚三分ノ一ノ不足アリ、卽チ本書ノ收益ヲ以テ補充セントス

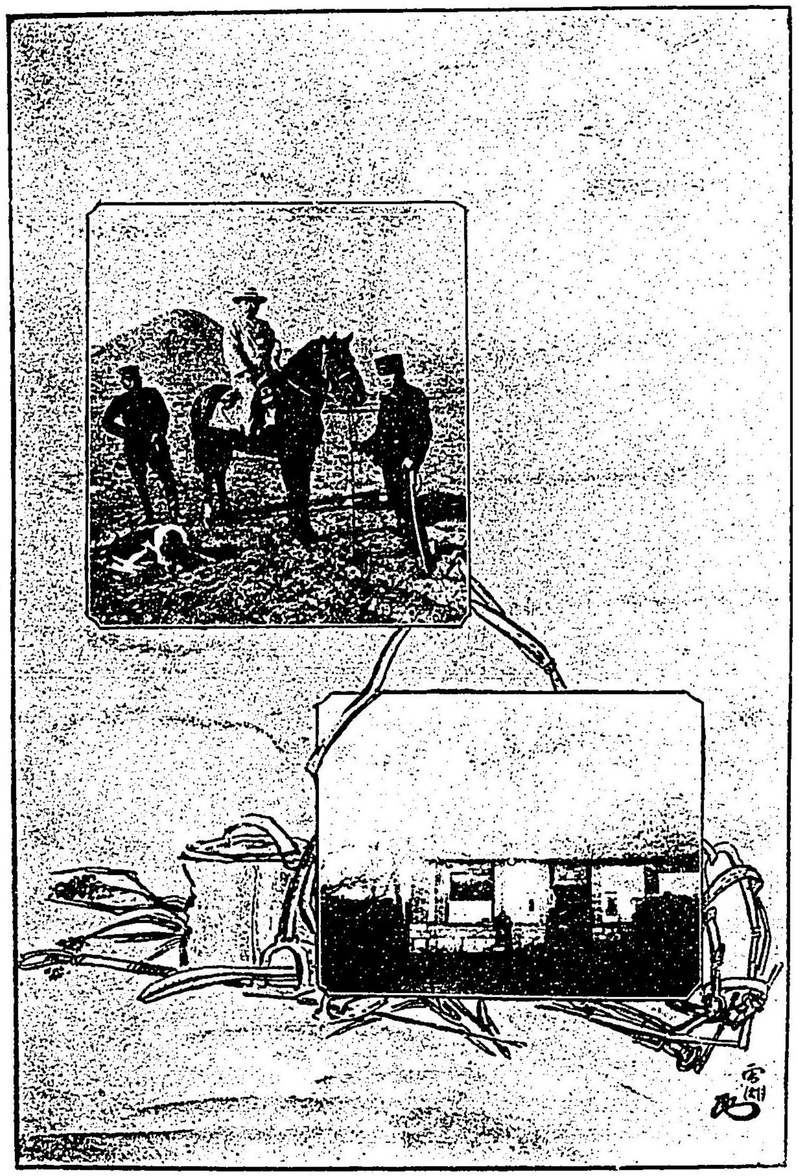
寄附者ハ以上各書ノ賣行ヲ促ス爲メ紳士タル品位ヲ毀損セザル限リニ於テ有ラユル手段ヲ實行スベシ、例ヘバ三書ノ何レナリ又ハ三書ヲ合併シテナリ一百册一時ニ購求スル方面ヘハ無報酬ニテ講演ニ行クコト、三書ノ何レナリ又ハ三書ヲ合併シテナリ五百册一時ニ購求スル方面ヘハ無報酬ニテ五日間以内ノ組織的講習會ニ行クコト、購求者ガ紀念ノ爲メ該書ニ著者ノ自署ヲ求メ來レバ無報酬ニテ揮毫落款スルコトノ類

東京市赤坂區靈南坂町三十四三十五番地　志賀方
假事務所
電話芝二二四

加奈陀マニュファクチュラース生命保險會社ハ在來著者ト何等ノ關係ナキモノ、而シテ地理調査費ニ出資シ、且ツ此計畫ニ後援センコトヲ提言シタルハ、是レ亦タ感謝スル所トス

ナガラ上ノ人ハ
ヨロヨロ
ト
ソノ人ハ
ホ食ヲ
ソノ
米袋ヲ
ソノ
ソノ
ソノ

戰地に於ける著者



露國捕獲馬月號に跨れる著者・右に立てる森獸醫
左は馬場騎兵中尉・犬は露軍より鹵獲せしミシカ(米國リカルトン翁撮影)

旅順攻圍軍司令部に於ける著者の宿舍(伊集院子爵撮影)

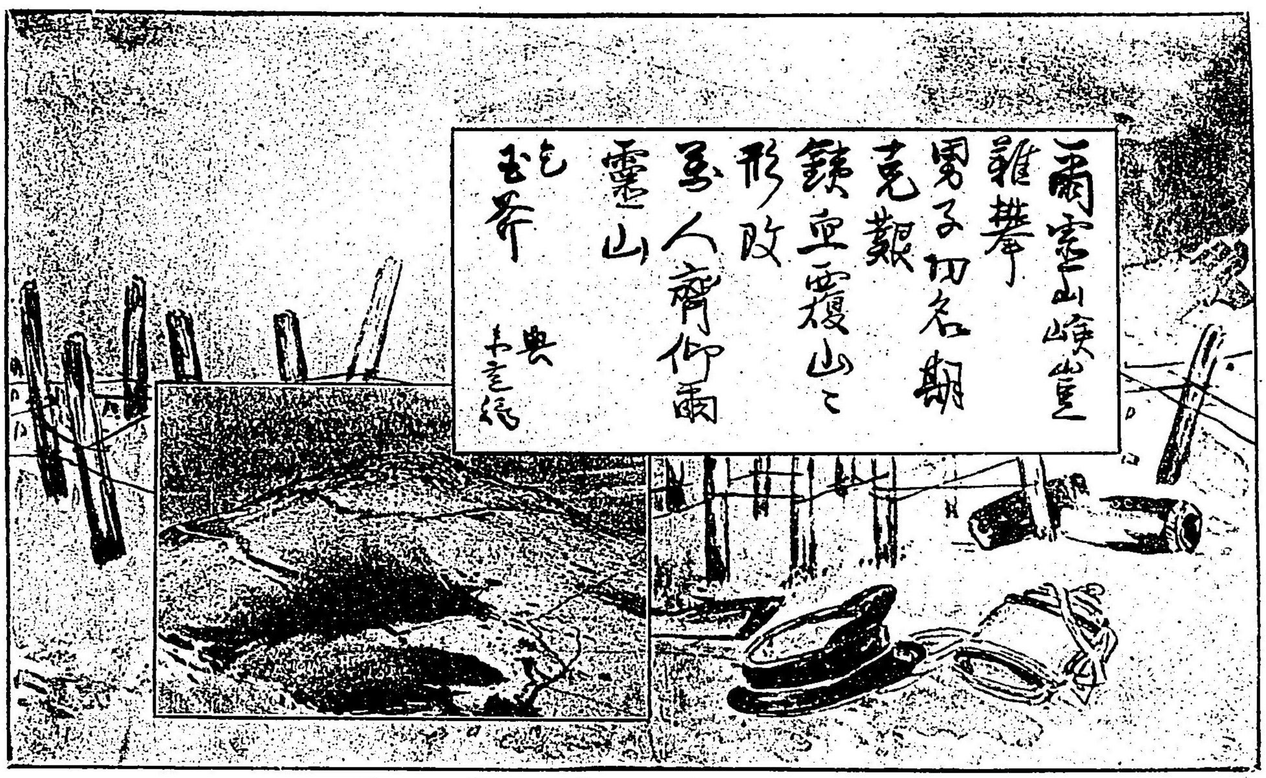
《一〇二頁參照》

日露兩軍屍體の交換

高き赤十字旗の左に立てるは露國赤十字社醫長パラシコフッフ（宮中顧問官）・右は著者

（露國將校の撮影せしもの）

《一八五頁參照》



乃木大將筆蹟

（開雄山奪取の時、著者に示されたるもの）

《一九七頁參照》

ステッセル將軍夫妻

ステッセル將軍の書面

（のもるたり贈に方本日、後城開口順旅）

《照參頁五六二》

旅順攻圍軍　目次

旅順行日記……一頁
初めての戰線廻り……八
二發の引……二二
砲彈中の花……二五
秋三日……二八
漢文と西洋文……四四
戰前の雨〔ゲロパトキン砲塞等奪取の役〕……五〇
戰後の月〔ゲロパトキン砲塞等奪取の役〕……五三
十日日記……五六
陣中生活一斑……八〇
營中雜筆……八五
旅順口の水產……九一
鳳凰山頂の西洋奇人……九五
風一日、雨一夜……一〇四頁
佳兒（カルル）敗後正百九十五年の音樂〔第二回總攻擊〕……一一九
一代の名文……一二六
軍中の送別……一三四
攻圍軍の天長節……一四四
喜劇一齣……一五一
七爆聲歌〔松樹山砲臺爆發所見〕……一五三
十一月二十三日……一五七
陸軍步兵中尉島野多多志君碑銘……一六二
滿洲及關東半島の開發……一六四
悲喜劇三齣……一七六
悲劇一齣、喜劇一齣〔死屍の交換〕……一八〇

三段の經過（二〇三高地の戰鬪）……一八頁
陸軍歩兵少佐肯木八郎君碑銘……一九四
爾靈山……一九六
東鶏冠山北砲臺占領の戰を觀る
（敵の永久砲臺占領の嗚矢）……一九九
歳晩雅懷……二〇四
陣中の歳晩……二一三
辰年の掉尾（二龍山砲臺の占領）……二一五
攻圍軍の大晦日……二二〇
歳末年頭の禮に代ふ（郷里に送る）……二二六
新年山（旅順富士の辯）……二二七
新年山（郷人に寄す）……二三三
新年山（關東半島の三山）……二三五
南山……二三六
熊岳……二三七
盤龍山……二三九
新年山……二四五頁
攻圍軍の元旦……二四八
旅順口の開城……二五三
盃酒英雄君與レ操（乃木ステッセル二將軍の會見）……二六〇
旅順口の一日（始めて旅順口に入る）……二六六
長嶺子（ステッセル將軍の出發）……二七二
旅順口の三大式……二七六
入城式……二七六
招魂祭……二八二
祝捷會……二八三
歸途日誌……二八七
「海軍陸戰重砲隊」跋……二九四

目次終

旅順行日記。

明治三十七年八月二十一日（日曜）

午後四時半、汽車新橋驛發▲六時半、藤澤驛下車、相州片瀬なる假寓に到り、海水に浴す、潮滿ち月湧き、身は金龍の背に怨するに似たり▲海水浴の後、江副氏の三兒及び家族親戚と共に江ノ島に到り、月を岩本樓に賞す、時に旅順口要塞陷落の報、横濱の外字新聞社より江ノ島滯在の外客の許に達す、滿島の人民歡喜、各樓の球燈點々、天上の月光と相映發す▲十一時、進工學博士を訪ひ、旅行券交附に關する取計を托す▲十二時、歸寓。

八月二十二日（月曜）

早起、海水に浴す、富士の嶽影、倒に涵して人は嶽頂に上るに似たり▲家僕長吉、例に依て朝網を片瀬川に投じ、鰡十一尾を獲來る、炙りて下物とし、門出の行色を壯にす▲井關辯護士、惡筆を需めらる、

將之旅順口書ノ感。

王師渡ノ海伐ニ冥頑。三箭先看定ニ玉關。畢竟詞人何好事。一杯欲ノ酹老退山。

と書し送る▲八時、汽車藤澤驛發▲九時、國府津驛着、伊太利侯爵ダッダ氏の歸京するに會ふ、

去月滿州丸にて同航せし人、手を握りて曰ふ、君復た旅順口に行くか、我れ同行すべからざるを憾むと▲同車室には舊知白戸造船技師あるのみ、故に談笑縱横、夜に入り京都にて相別る、別るゝに臨み、君曰ふ、歸來の節は必らず大阪まで電報せよ、今日の快話放論を續けんと▲八時、大阪驛着、片瀨の假寓より旅行劵交附の電報入手▲十時半、神戸驛着▲十一時半、神戸驛發、月明昼の如く、蟲聲滿地。

露艦リゥーリックの俘虜。

八月二十三日（水曜日）

早起、初日紅を播磨灘より潑ね來り、天氣清澄▲十時、廣島驛着、會〻露艦リゥーリックの浮虜數百名來着、此羅當時皆な裸體にして海中に投ず、故に我が水兵の舊衣を着く、體大にして衣小、其風自から奇なり、彼等姫路に收容さるゝ者、卽ち東西に相別る▲十時半、宇品着▲午後、村山大佐（陸軍大臣副官）及び進博士より旅行劵交附濟の二電報入手、而かも其の郵着を待つの要あるを以て本邦の地を離るゝを得ず、宇品の旅館にありて無聊甚し、會〻鄕人花井畠三郎氏隣室にあり、二人奇遇を喜ぶ、曰ふ其の所有汽船の豫て御用船となれるもの、病院船に改められたるを以て之れが用務を辨せん爲め來れりと▲晚餐後、小舟を賃して凉を宇品灣上に納る、煙波萬頃、長空一色、月光千里。

八月二十四日（水曜日）

旅行劵郵着、卽ち軍用旅劵を得、劵を得て直ちに船に搭す、會〻同船の一將校、新聞紙號外を示さる、曰く我兵既に旅順市街に突入せりと、前の江ノ島に於ける報知と云ひ、此の號外と云ひ、內地にありては旅順口既に陷落せるものとなすなり▲一曹長來り揖して曰く、生は早稻田大學にありて先日まで先生の敎授を受け居りし者、今や召集せられて遠征すと、予曰ふ、筆を投じて軍に從ふ、感懷如何と、曰ふ、我隊の行途中、沿道の停車場に到るや、母に負はれたる小兒すら肩上にありて萬歲と叫び、縣知事等の夫人令孃出でゝ我々の汗に汚れたる手拭を湯に洗ひて渡さる、國民の我々を待つ至れり盡くせり、生等の意全く決せり、復た生還して先生の敎を受くる期なきを如何と、予聞き了りて覺えず泫然たり。

國民の知遇。

八月二十五日（木曜日）

將校及び下士頻りに惡筆を需めらる、時に風到り浪高く、船體動搖し、墨痕淋漓、惡筆狼藉▲正午、船體の動搖甚しきを以て、船を內地に返へし、長門の沖島を過ぐ、回〻頭海山暮色紫、英雄壓〻魂在二此裏一、作〻歌憑吊夜意動、北斗星低天連〻水（吊三須知中佐）▲同航の兵士多く舟に慣れず、此日船體の動搖殊に甚しきを以て、三食共に喫せざる者あり、會〻甲板を過ぐ、一兵士横に臥して獨語すらく、コー云ふ時に酸いものあればナーと、予卽ち携ふる所の夏蜜柑、林檎等を檢するに、一顆を數片に分てば多數に配附すべし、依て隊長を經て各員に分贈す▲

風、馬に及ぶ。

此夕十五夜、皎月皎々、光、水の如く、水、光に似たり。

八月二十六日（金曜日）

船復た進行す▲一將校の食卓を同くする者、自己に供せられたる鷄卵を一回だに食はず、必らず携へ去りて乘馬に與ふるあり、馬、卵を啜りて喜び、鬣を振ひて長へに嘶く、馬の戰場にありて其主の爲めに盡くさんとする宜べなり、將の恩愛是に至る、日本兵の百戰百勝する偶然にあらず。

八月二十七日（土曜日）

炎熱燃ゆるが如く蒸すに似たり、兵士下甲板にあり魚貫して枕籍す、其狀殊に憐むべし、予や無用の文人、風通り好き室を供せられ、浴湯を供せられ、氷を供せられ、平野水を供せられ、自から顧みて慚愧に堪えず、而かも何の爲す所なきを以て、クリミア戰爭の際、倫敦タイムス新聞從軍記者が本國に書送せし通信の一節を記憶中より呼び起して飜譯す、曰く、

嗚呼此の敵し難き氣候は、如何に異鄕の義士をして苦痛に泣かしむるかと思はゝ、枕を高くして安臥せる故鄕の諸君は、之れを聞きて如何なる同情の涙を注ぎ玉ふならん。

一兵士、予の入浴せる身體を見て曰く、貴君は何者かと、予曰ふ、角力取りなりと、曰ふ否、角力取りは髯なし、我が縣廳の養蠶技師、君と同風采の人ありと、曰ふ當らずと雖も遠からず、一般兵士の無邪氣にして天眞の爛熳なる實に此の如し、而かも報國の念に至ては其の胸宇に溢る、何等愛すべきの人ぞや。

山家集中の歌趣。

八月二十八日（日曜日）

此夕、ブープに上る、海洋島（日清の役黃海々戰の處）を過ぐ、時に夕陽倒射、地平線上錦を布くに似たり、一下士和歌を示す、曰く、

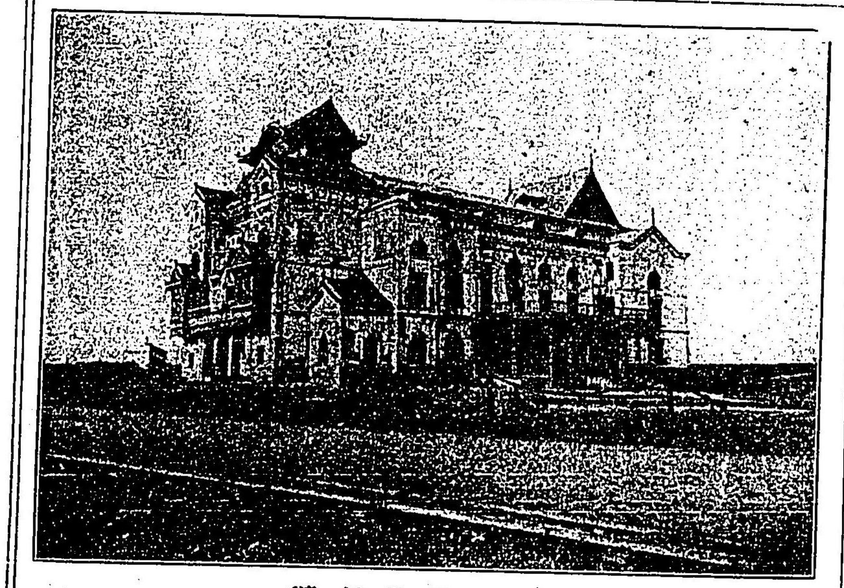
海原に錦とまこふ一筋は照す夕日の光なりけり

と、其の扇を出して惡筆を需む、依て筆に任かせて書すらく、

一條錦繡是斜陽。　數句欽君錦繡腸。　此處他年須記取。　海洋島外海洋洋。

と。既にして氷輪海より浮び出で、千里皎々、爽涼氷に似たり、一兵士の獨り山家集を見る者あり、萬里の遠征、明日の命をも知らで西行法師の歌を誦んず、何等の風流、西行をして地下に呼び起せば、噫眞に我を知る者と云はん、予曰ふ、山家集に句あらん、『曇りなき山にて海の月見れは島そ氷の絕間なりける』と、若し山をブープと改めなば正に目前の境景なりと、其兵曰く、眞に然りと、此の如きの詩趣、此の如きの情致、抑露國の兵士中にありや否や、ペトロパウロフスク艦の轟沈と共に斃れたる壽人ベレスチャギンは頗る事を解せし人、我レ彼を九泉より起して此の詩趣、此の情致を壽かしめざるを憾む。

青泥窪。



清人の劇場（大連）

八月二十九日（月曜）晴。

正午、青泥窪（グルニー）着岸、諸君子に別れ上陸す▲二時、青泥窪兵站司令部將校寄宿舍に投ず▲四時、兵站監部病院を慰問す、傷病者七千人を收容中なりと、內地より携帶せし新聞紙數十葉を傷兵に贈る▲五時、青泥窪公園に遊ぶ、露人の經營せし處、涼を明石（アカシヤ）屋樹蔭に納れ、且つ有名なる猛虎を見る▲寄宿舍外を往來する傷病兵に一々新聞紙を贈る▲七時、第三軍兵站監部參謀長藤井少佐の晩餐の招に赴く。

八月三十日（火曜）晴。

青泥窪の市街を散歩す▲市內の小公園に遊び、綠蔭に傷病兵を慰め且つ相語るこ

と數時▲夜、支那芝居を見物す。

八月三十一日（水曜）晴。

八時、青窪泥第二停車場より軍用汽車に搭す、石井兵站司令部副官見送らる▲十二時、長嶺子驛下車（七月二十八日、第一師團第十五聯隊占領）、是より先、青泥窪なる兵站監部より予の行程を電報しありたるを以て、驛長歡待し、酒保よりもラムネなど供し、人をして戰亂中に旅行するを忘れしむ▲一時、長嶺子兵站司令部に午餐す▲二時、長嶺子兵站司令官林少佐、其の乘馬を貸し、一兵卒をして手荷物を車に曳かしめ、予を第三軍司令部まで送り屆けらる、好情感謝するに足る▲三時半、柳樹房着（七月三十日、第九師團第三十六聯隊占領）、直ちに第三軍司令部に到り、初めて第三軍司令官乃木大將、同參謀長伊知地少將に謁す▲四時半、第三軍司令部の隣なる一支那屋を以て予の宿舍に充てらる、時に砲聲殷々。

青泥窪公園の虎
（當時日本婦人を喰ひたりとの噂あり）

長嶺子。

柳樹房。第三軍司令部。

初めての戰線廻ぐり

九月四日（日曜）晴。

朝、第三軍司令部にありて起きると、從卒が馬の水呑バケツの內に水を一杯汲んで來て呉れた、其水は例の如く薄灰色に濁つて居る、これで口を嗽ぎ身體一面を拭ひたるに、心持チは淸々として誠に爽かとなつた。折柄天氣は澄み渡つて、關東半島の諸山は洋青色に染まり、其上に眞綿の如き白雲はフワリ〳〵と浮いて居る、大小の砲聲は例の如く間斷なく聞える。そこで今日は最先の戰線を一廻ぐりして各將軍を巡訪せんと、單騎にて出掛けた。秋の初風は雪の如き蕎麥の花に戰ぐ、半ば黃ばみ掛つた高粱の葉に戰ぐ、鵲の聲もする、味方の砲車は引きも切らず往來する、輸卒は絶えず輜重を運んで居る、糧秣を前方に送る縱列は始終通る、負傷者を野戰病院に送る擔架は來る、彈藥を運ぶ砲兵の縱列も行く、支那人の苦仂は騾馬を驅りて兵器を運ぶ、驢馬が一種云ふべからざる聲をして嘶く、すると予の騎り居る軍馬も嘶く、此際鞭を揚げて躍らし行くと、是れ亦た一種云ふべからざる感がした。かくて行くと、絶えつ流れつする溪水の處に來た、卽ち龍頭である、溪の兩岸は少し開けて、紅色、黃色、白色の石英や又は硅岩や粘板岩や長石などの礫が累なつて河原を作くり、二三間位づゝを距てゝ楊柳の高サ二丈もあるものが生え、葉が重なり〳〵て厚き蔭を交えて居り、此邊に稀なる淸涼の景趣を感じた。溪水に沿ひ、一二町溯り行くと、天幕の舍營が相續き、將校兵卒は其間に往來し、又た數名の炊事當番は溪水にて頻りと葱を洗つて居る。やがて棗の樹蔭に師團司令部の記號なる紅白の旗がチラ〳〵と見える、此所にて馬を下り第十一師團長土屋中將を訪れた、將軍は曰く、獨リカネ、馬にて餘りヘンな處へ乘り込むと狙擊せらるゝことがあるから氣を付け玉へと、予曰ふ、ハイ、然かし卑怯者ですからソンナ危險な所へ行く氣遣は御座りませんと。時に將軍は司令部を進轉する故、同行しては如何と言はれた、ソコで予は將軍及び參謀長石田大佐、中村副官と傳騎とに連れて進發した。一行は南進すること一里、大孤山の下に至りて馬を下り、露營に就き、一休ミせし後、將軍と副官と予と三人にて山に登り、砲戰を望み見た、予は盲目蛇に怯ぢずの諺の如く、バナマの夏帽子の儘にて山の上に全身を露はした、すると將軍はソンナ危ないことをとて喊ばれた、中村副官は先日此所で同僚二名が戰死しました、氣を御付けなさいとて、アンペラ莚に血痕の狼藉たるものを示して予を戒められた。山を下るや、處々に戰死者を埋めた處がある、將軍は一々脫帽して敬しく禮拜された、予も禮拜して無限の感を起した。將軍の露營にて午餐を

土屋中將

龍頭。

第十一師團司令部の進轉。

大孤山。

共にしたるに、麥酒、牛肉、雞肉などを供せられたれば、予は中々御馳走がありますナーと言つた、すると將軍は笑つて、今日は珍客が來られた故に管理部にて特別に御馳走を作つたのだ、農學者の戰鬪實視と云ふ古來未曾有の珍客だもの、此位の御馳走はあるサと、聞いて予は覺えず吹き出した。

午餐後、幕舍と露營との附近を散歩した。將校と兵卒とは打ち絶えず往來する、補充の隊は到着する、野戰郵便の配達人は來る、通譯は支那人の野菜賣りと談判して居る、工兵は新に舍營を作つて居る、兵卒は飯盒の内にて罐詰メの牛肉と葱とを煮て居る、其間に砲車、大八車、支那車、自轉車は擦れ違ひに通る、軍馬、支那馬、驢馬、騾馬は往つたり來たりする。左の方なる溪間と支那人の家のある處との二ヶ所には砲彈が絶えず落下して煙と砂とが盛んに揚がる、其傍なる溪水にて四名の兵卒が快げに水を浴び悠々と手拭を絞つて居る。其下に水の少しく深くなつて澱んで居る處に、恰かも好し三株の楊柳と一株の菩提樹とが枝を交えて蔭を作つて居るより、七名の負傷兵は療養の慰みにとて釣を垂れて居る、砲聲の殷々たる間にて釣とは流石に風流の極致かなと感嘆の餘り、何にか釣れるかネと問ふた、一兵卒は少しは釣れますと答へて、バケッを示したが、ハ

石田大佐

何等の餌料。

エの如き小魚が五六疋捕れて居つた、鈎は如何したのかと問ふと、金線を曲げて作りましたと答へた、眼前には砲彈が落ちる、此處では餘念なく釣をして居る、誠に面白い反映だ、此の如き景趣も餌料も西洋にはあるまい、若し予に畫が書けたなら何卒して寫し置きたいものだと思つた。

黄昏の頃、石田參謀長には女郎花、風鈴草、我毛香、藤袴、野菊、水引の花を折り、敵兵の打ちたる七珊半の砲彈を拾ひ來られ、これを花瓶に代へて生けられた、黄色、紫色、蔫色、紅色打ち雜りて一入秋の風情を添へた、予は好き御趣向ですと賞讃したるに、參謀長には紀念の爲めとて此の砲彈の花瓶を贈られた、別に敵兵の落し行きたる軍隊手帖二冊を贈られ、曰く日本の軍隊にては軍隊手帖を落すを以て耻辱とし、兵は決して身より離さぬ、然るに敵兵はイクラモ落して行つた、又我が軍隊手帖には開卷に　天皇陛下より軍隊に賜はりたる御勅諭を掲げ、次に軍人の服膺すべき件々を掲げあれども、彼の軍隊手帖には何等此の如きものを掲げず、開卷より卷末まで少しだに精神上の教育を授くるものなし、教育家をして彼我の軍隊手帖を比較せしむれば、種々面白き材料を發見することならんと、因て他の一冊を特に小柳津要人氏（東京書籍商組合頭取、丸善株式會社長）に贈られんことを求められた。小柳津氏は將軍も參謀長も予も三人共に最と善く識れる間柄なれば、そこで小柳津氏の話が初つた、

日露軍隊手帖の差異。

成程故福澤先生が元祿武士の魂を以て大阪商人の腕ある者、卽ち西洋のマーチャント（商人）の風ある者は小柳津要人だと評された通り、明治維新の際、微々たる岡崎藩の同志を語ひて脱走し、日本國中にある舊幕府恩顧の面々に率先して初めて德川氏の爲めに兵を擧げ、孤軍苦鬪五十餘戰、箱根の關所破リより蝦夷まで轉戰し、刀折れ彈盡きて止み、遂に節を折りて西洋書を習ひ、丸善商社を起し、日本隨一の洋書店となし、所謂敎科書賄賂事件にも氏の姓名のみは露だにも新聞紙上に現はれず、今回日露の開戰となり、全國の書肆は武裝々々と唱へて力めて際物を出版し、而かも之れが爲めに何れも損耗せしに拘はらず、氏のみは恤兵、國債應募、軍人遺族の救濟等には盡力し、且つ書籍組合より其の還曆の祝にとて贈りたる金時計の代金もて直ちに軍隊に献納せし程なるも、而かも書籍の所謂武裝なるものを敢てせず、一も際物を出版せざるより却て何等の損耗だにせざりし事など、三人交もゝ打ち語つた、參謀長が所謂敎育家に贈らずして、特に一冊を小柳津氏に贈り呉れよと賴まれたる精神も善く判つた。晩餐は三人にて共にしたるが、韮が供へられた、韮は九州又は鄕國三河などにては下痢や熱病を治療するに最も妙なりと言ひ傳へ、旅行中にて韮を喰へば傳染疫を豫防することは實際である。此事を話すと、將軍は夫れ故に供へたのだと言はれた、參謀長が傍より勝男節をかきて添へられた。

戰場の夜景。

戰場の晨景。

夜九時後、副官と共に復た山に登りて濠に入り、掩蓋の下より敵の戰線を望んだ。折柄星月夜にて露は既に下り、敵の砲聲は澄み渡つて聞え、一帶の銀河は黃金山砲臺の上より二龍山砲臺の上を横絶して鳳凰山砲臺の下に落ち、砲火は各砲臺に閃めき、探照燈は半空より落ちて、滿地雪を欺き、氣象豪宕、覺えず毛髮をして躍らしめた。望むこと半時間許りにして露營に返へり、水を浴びて終日の汗を拭ひ、毛布を被つて寢に就き、芭蕉の『蚤虱馬の溺する枕元』の句の妙趣を悟り、且つは露に咽びて切れ〴〵なる蟲の音を聞きつ何時となく眠つた。

九月五日（月曜）

朝、起きると隣に寢られたる高級副官の西村少佐が、貴君の昨夜の鼾聲には驚きましたと言はれた、將軍はこれを聞かれて、嘸迷惑なりしならんと笑はれた。口を嗽ぎ顏を洗ひ、眼前を眺めると、誠に善い氣持ちだ、露營の右には、硅岩と砂岩とより成る孤劍空を削づる如き大孤山が起ち、當面には高粱の畑を隔てゝ岡陵が起伏し、朝霧が絕えなんとする間より、遙山の紫翠が現はれ來る處などが、信州淺間の裾野の景色に似て居る、高級副官は、信州出身のことゝて、成程淺間の裾野に似て居りますと言はれた。朝餉の後、山中神尾二少將が土屋將軍の許に來られたる故、予は山中少將に向ひ、閣下の御留守中に貴營まで訪問致しますと叙べ、土屋將軍に別レを告げ、昨日來の好情を謝して營を出でた。西村高級副官には、途中

に二百メートル許り敵の狙撃する處がありますから、傳騎をして送らしめんと、一騎を附せられたれば、重々の好意を謝して出でた。

第十一師團司令部を去り、傳騎の後に隨て行くと、少し廣い溪水の河原に出た。此處は敵の砲臺（鷄冠山砲臺）の當面に露出して居る、成程此處が高級副官の注意されたる二百メートルの處なりと思ひける折柄、傳騎は敵に見られぬ樣に頭を縮め身體を横にして馬を早めた、予もこれに習つた、然かし予の大きな身體で頭を縮め身體を横にして馬にコワバリ着いてコワ〳〵走らして行つた狀は如何に滑稽なりしぞ、活動寫眞を撮る者が居らざりしは何よりの幸福であつた。程なく行くと、山の崖を處々に切り割つて天幕の舍營を連ねたる處に來た、歩兵第十旅團司令部である。旅團長山中少將には、今朝既に第十一師團司令部にて面謁し、不在の事を知りたれば、唯だ副官のみを訪れた、すると副官は隣の幕舍が廣い故に彼處に御出で下されと申された、隣と云へば近い樣だが、彼處まで行くには崖道を渉つて行くのだ。副官は茶を供せられながら、當面の溪間を指し、アレが糧食を運ぶ道ですが、始終砲彈が落ちて五人六人と死傷が絶えませぬ、そこで夜の十二時後に飯を運ばすことに致しましたが、朝飯と昼飯とを前夜の中に一度に運びますから、暑い日には昼飯が腐つて困ります、先日あたりは大きな箱の内の飯が悉く腐つて居て、兵が一食も致さなかつた事もありましたと、其の困

歩兵第十旅團司令部。

糧食運搬の困難。

苦の狀察するに餘りあり。

第十旅團司令部を辭して、だん〳〵行くと、白地に赤十字を畫ける旗が飜へり、天幕が連つて居る、即ち繃帶所である。木の棒や竹の棒を杖にして歩き居れる病兵が見える、血だらけのズボンを履ける兵卒が見える、軍醫は頻りと負傷者に繃帶して居る、看護卒は忙しげに立ち働いて居る、輸卒は負傷者を後方に輸送して居る、或は腮を打ち貫かれたる者もある、或は一腕を落したる者もある、或は硝煙にて顏一面を燒かれたるものもある、或は病人もある、予は負傷兵に向ひ、善く奮發して呉れたナー、これも全く國の御爲だと言ふや、一兵士が出立の際、色々歡迎されましたから不具ぐらゐにならなければ、國に歸つて人に顏を合はすことが出來ませぬと答へた、予は實に此言に感激した、日本兵は如何にも强い者だと悟つた。

繃帶所を去り、小流を辿り〳〵つ騎り行くと、山の崖をば壁にして露營が一ッある、其傍に天幕が幾個も張つてある、此處は五家房にて、第九師團司令部である。馬を下りて崖を上り、黄色なる蜿豆の花が咲き亂れたる間を通り、掩蓋の下にて師團長大島中將に謁した。將軍は雙眼鏡にて敵の砲臺を望み居られしが、藤田副官の案内に連れ、予の來りしを見、御奮發ですナーと言はれ、雙眼鏡を貸し、これは實に遠く見える目鏡ですと言はれたれば、一禮してこれより望み見たるに、如何にも敵の人馬の往來、作業の有樣、砲の所在、鐵條網な

五家房、第九師團司令部。

旅順口要塞の天險と人工。

どが眼前に見える、各砲臺の構造の堅固なること、防備の周到なることは實に人力即ち文明力の有らん限りを盡くしたるものなることが判つた。予は是に至て旅順口要塞の事に關し一つ申すことがある。內地にては旅順口の要塞などは容易に陷落するものと思つて居る、予が東京を發するや、汽車內にて一客が『東京の新聞社も旅順陷落の公報を早く得んとて昨夜より陸軍省に宿直する』と打ち語り、廣島にては大阪の一新報が『椅子山占領、日本兵旅順口の市街に突入せり』との號外を發した、又た各停車場にて新聞紙を購讀したるに、各地方いづれも思ひ〳〵に旅順口陷落の祝意を表せんと夫れ〴〵頻りに準備中なることが掲載してあつた。此の如く國民が非常なる熱心を以て旅順口の陷落を待ち居るは、全く忠愛の氣の溢るゝ所で、誠に優しきことである、國民の熱心は實に同感に堪へざれども、然ればとて旅順口が然までに容易に陷落すべしと思へるは誤りである。關東半島は地形幅狹きが上に、半島の上には硅岩や大理石化せる各種の石灰岩や砂岩や石英など堅き岩より組成する夥多の岡陵が起伏して居る、此の夥多の岡陵には一々敵國が多年の間に砲臺を築いて居つたのである。然れば我兵は百難を冒して一々此等の砲臺より敵兵を打ち拂ひ、遂に半島の極端まで追ひ詰めたる所で、さて此處に至て天然に於て既に大要塞なるが上に、搗てゝ加へて人力即ち文明力の有らん限りを應用し、防禦の極致を盡したる要塞が屏風を立て列ねたるが如くに海門（即ち旅

露西亞兵に向ふに非ず鐵と石とに向ふ。

順口市街のある處）を取り圍んで居る。此の如く旅順口の要塞は、天然と人力と相待ちたる世界有數の要害である、此の世界有數の要害が左程容易に陷落さるゝ筈は無い。成程露西亞兵即ち人間と云ふ動物に向ふのなれば、日本兵の勇武なること露西亞兵を破るの困難ならざるは、前度來の各戰鬪の實驗で明かに判つて居る。然るに露西亞兵と云ふ動物に向ふにあらず、石と鐵（鐵壁、鐵條網等）と云ふ無機物に向ふのである。然れば野戰の如く、敵即ち當面の動物に向ふにあらずして、無機物たる石と鐵とに向ふことなれば、興味も殊に活動せざるが上に、困難の度に於ても野戰に數倍する。又た野戰と異り味方を掩蔽する地積が少い故に、已むことを得ず衞生上許すべからざる地點に病院などが設けてある、此の如き事情は予の如き素人にも能く判かる。若し此の如き世界一の難塞が人々の思ふが如くに容易に陷落し得らるるものとすれば、世界の歷史は今日より一變せねばならぬ、何となれば要塞なるものは將來全く無用となり、歷史上に要塞戰爭は無くなることゝなり、一國の防備上に一大變化を與へ、所謂國防を根本的に一變せざるべからざればなり。固より旅順口の運命は迫り居れば、國民が大快報を得て祝勝の大運動を行ふ日も期すべしと雖も、然りとて國民が熱心の

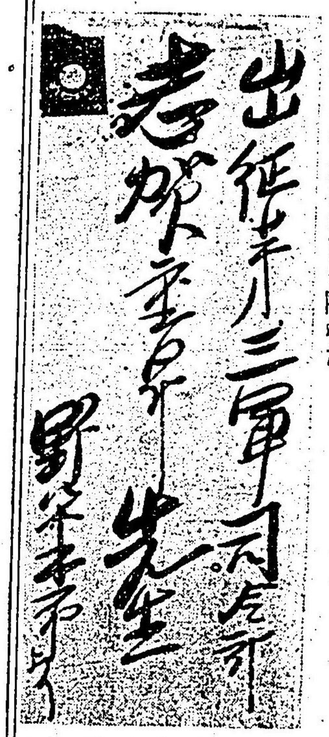
藤田少佐

餘りに旅順口陷落の期日を餘りに早く數へ居るは誤りである。却説大島將軍には砲戰せる處を案内されたる後、小道に捨てある竹の棒を取られ、アノ砲車は昨日敵の砲彈の爲めに壞されたのですと予に示されける刹那、一銃丸はビューンと鳴つて將軍と予との間を飛んだ、すると將軍は、此の通り丸に中るも中らぬも全く運ですよ、先日も此處で私と共に七人が居りますと、丸が落ちて内五人は負傷しましたが、私と今一人の將校には中りませなかつた、そこで私は一同に向ひ、中るも中らぬも皆な運だ、運が惡ければ地震に會つても雷に會つても殺ろされることがあると諭しましたと言はれた。やがて露營に歸へり、自から紅茶を作つて與へられ、戰中の御馳走はコンナものですよと言はれ、敵の藥筴の内に秋の花の咲きたるを亂れ挿したるを指し、何んと好い花ではありませぬかと言はれ、マー御膳でも一所にお上りなさいと、豚汁と酒とを供せられた。時に予は失禮ながら私の馬にも何にか食はして遣つて下されと賴むと、傍なる高級副官藤田少佐は笑つて、軍馬は甚飯は食はないものですと言はれ、成程然るものかと始めて悟つた。食卓の傍に砲彈の裂けたるが落ちあれば、これを問ふと、將軍には昨日落ちたものです、然かし誰れも怪我はありませなかつたと言はれた。そこで予は、先刻地震にても雷にても殺さるゝことがあるとの御話シでしたが、先日東京にて大雷があり、市内にて二十餘人の死傷がありました、其時陸軍士官學校の構内に落雷して一名の士官候補生が卽死し、此の候補生より禮を受け居たる中尉は一旦氣絶し、蘇生は致しましたが、爾來腦に異狀が生じ未だ回復せぬとのことでありますと言ふと、將軍には夫れは初めて聞きました、誠に氣の毒な事であつた、然かし夫れも全く運ですよと言はれ、それより話がだんだん精神論に移ると、參謀長須永大佐が、先日此の前を第十一師團の負傷兵が通りました、其狀を見ると如何にも疲勞極まつて居ましたより、私は貴樣は如何にも疲れて居る樣だから、擔架で先方に送り屆けて遣る待てと言ふや、すると件の兵は直ちに倒れ、最早一足も歩けなくなりました、人間は安心すると張り詰めて居つた氣が一時に失せて、此くなるものであることを初めて悟りましたと。

午餐後、予は大島將軍に歡待を謝しつゝ、此營を辭し去らんとしたるに、將軍には紀念の爲めにとて露兵の落し行きたる砲彈の尺帽を盃にでもなされよとて贈られ、藤田副官は露兵の信管を文鎭にせられよとて贈られた。須永參謀長は、危險なる所があるとて傳騎を附して予を送られた。鐵道の橋の處まで來ると、砲彈が前後に落ちた、又是より前に落ちたる砲彈が幾何も見へる、すると一彈が予の馬の五間ばかり前に落ちて少しく砂を浴びた、馬上に今まで意張り切つて居たる予はビク付いた、然るに馬は流石にビクともせぬ、蠅でも飛んで來たかと云ふ樣な風でそれなりズン〳〵と歩いて行く、人間なる予は畜生なる馬に對して誠に恥入つ

た。然かし悟つた、馬だつてこれだもの、成程彈丸落下の傍にて兵卒が悠々と釣をして居る所因も明かであることを。やがて砲丸落下の範圍の外に出でたれば、氣も落ち着き、秋晴の朗かなるまゝ、目を展べて當面の山色を眺め、山の濃淡高低を飽くまで數へつゝ、夕陽の漸く臙脂なす色を作す頃、第三軍司令部に歸つた。

第三軍司令部に歸ると、齋藤少佐が、ドーですか、彈丸雨注の下に旅行は今回が始めてデショーと云はれた。予は始めてです、然かし彈丸雨注とは未だ云はれませぬ、彈丸點々とでも申しますかと答へたるに、少佐もモー少し日を御待ちなさい、今に彈丸雨注を御覽になりますからと。予は其の彈丸雨注の後には、旅順口陷落、　天皇陛下萬歲の聲が山岳を震動するデショーと言つたら、少佐は莞爾として居られた。時に夕陽は莊嚴なる黃金色を放ちて、多望なる明日を期するが如くに于大山の西に隱れた。



ヨチ・ノグチ

二龍の引。

九月六日（火曜）

釋迦、慈悲と云ひ、基督、愛と唱ふ、語唯だ異れりと雖も、無礙の淨信に至ては卽ち一のみ、而も一は五陰三毒を解脫せしめ、一切衆生に慈悲を施さん爲めとならば、所謂戰爭を本覺せざるにあらず、曰ふ般若の鉾、金剛の焰、天魔の膽を落却し、法雷を震ひ、法鼓を擊ち、（而して後）慈雲を布き、甘露を洒がんと、一は惡魔に處を得さする勿れ（以弗所書第四章二十七節）と、愛の敵たる惡魔を拂はん爲めには、曰ふ地に泰平を出さん爲めに我來れりと思ふ勿れ、泰平を出さんとにあらず、刄を出さん爲めに來れり（馬太傳第十章三十四節）と、語唯だ異れりと雖も、慈悲の爲め愛の爲めには、刄を振ひて進み戰ふべしと敎ふるに至ては、卽ち一のみ。然れども素と慈悲の爲め愛の爲めに戰ふもの、卽ち平等性中自他の形相なく、爾曹の敵を愛み、爾曹を詛ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇迫害ものゝ爲めに祈禱するの宿願を弘誓せざるべからず、既に慈悲の爲め愛の爲に戰を始む、慈悲の爲め愛の爲めに又た戰を終るべきは固より然り。今茲に　天皇、東洋の衆生を苦厄より濟度し、引きて世界の衆生を苦厄より濟度せん爲め、戰を露西亞に宣べ玉ひ、綸言一下、桓々たる貔貅海を渡りて旅順口を攻む、旅順口圍ミを受くる數

月、糧盡き彈竭き、命脈方さに迫る、天皇無辜の生靈の圍中にあるを愍み玉ひ、特に詔して婦人、小兒、僧侶等を圍中より避け出さしむ。明治三十七年八月十六日、我軍特に使者（第三軍參謀山岡少佐）を遣りて聖旨を敵に傳ふ、使者敵中に入り、其の前哨の二將校を見る、二將校共に尋常兵卒の服を着け、白色染まりて鼠色となり、處々に敝れ綻び、一人は我兵死する者の革帶を拾ひて佩ぎ、唯だ袖章に依りて僅かに其の士官たるを知り得、我が使者穿つ所の合羽を地に布き共に座せんとす、彼レ之れを止め、其の敝れたる合羽を布き、共に相座して上長官の應接に來るを待つ。待つこと數時、我が使者携ふる所の旅行用ブランデー酒を酌みて二將校に觴す、彼レ莞然觴を傾むくること三、乾麵包（ビスケット）を與ふ、彼レ亦た莞然之れを受け、即ち曰ふ、我レ嘗て浦潮斯德にあるの日、福島（少將）、萩野（中佐）と相識る、兩君健在なりや否やと、彼我の意氣融然、復た敵たるを相忘るゝもの〻如し（矧川云、此處何等の詩趣、又何等の畫趣、眞に詩すべく、畫くべし）。羅馬書に曰ふ、爾の仇若し飢なば之に食はせ、若し渴せば之に飲せよと、我の爲す所卽ち是れのみ。天皇旣に慈悲と愛との爲めに戰ひ玉ふ、我が將士も亦た聖意を酌みて敵を待つこと此の如し、咄々何物か黃禍論を唱へ、黃禍を畫く者ぞ。旣にして彼の上長官三頭の馬車を驅り、盛裝して來り、我が軍使に應接す、式了りて彼我各〻相握手して別る。彼の一將校、手冊を出して曰ふ、請ふ姓名、此處、此月日を記載せられよ、平和克復の日、相笑て復た手を握るの時の紀念とせんと、我が將士卽ち書し了りて莞然彼に與ふ、彼レ亦た莞然たり、正に是れ眞如界內生佛の假名を絕つ景。

明治三十七年九月五日、矧川子、戰線を一巡して牙營に返へる。偶〻千頭庸哉氏（一年志願兵陸軍曹長、東京美術學校敎員）、我が軍使一行の聖旨を奉じて敵騎の赴く所を圖し、畫方さに成る、即ち此圖と往年歐洲に喧傳したる黃禍の圖（歐羅巴が佛敎的黃色人種の侵入を防禦する圖）とを幷べ見、揣摩數回、無限の感懷あり、爲めに感懷を寫して二畫の引に代ふ。

附言、小生も不相變候に付御放念被下度、兩三日來單騎にて最先の戰線を巡訪致候處、各將軍には孰れも珍敷思はれ、或は連騎して當面の戰狀を案內せられ、或は山頂に案內して一々指點せられ、或は天幕中にて出來る丈ケの饗應を盡くされ、或は紀念の爲めにとて敵の打ちたる彈丸（花瓶に適する樣なる）、銅帶、尺帽、敵兵の落し行きたる軍隊手帳などを贈られ候、卽ち此文を草したる節、風吹き候まゝ文陳（ぶんちん）に用ひたる金屬は大島中將より贈られたる敵の信管に有之候、彈丸雨注など大層なる事は敢て不申上候へ共、途上にては處々に砲丸も銃丸も落下致候、大島將軍が敵彈に依りて破壞されたる一砲車を竹の棒にて指し示され候刹那、此の棒先に銃丸飛び行けるに、「ネー此の通りに丸（たま）に中るも中らざるも運ですよ、運が惡るければ地震に會つても雷に會つても殺されることがある云々」

と神色自若と致居られ候、我が軍隊には此の如き將軍あり、且つ小心翼々たる一文人の小生如き者すら彈丸の下を騎り歩く情況を御思召に相成候へば、我が軍隊の士氣の方さに旺盛にして雲を衝くの概あるは御想像有之度候、又處々の露營にて時を得顏に咲き亂れ候女郎花、野菊、我毛香、水引花など、敵彈を瓶として挿しあるには誠に優しき樣感じ候（虛子君の一句を煩はす所に有之候）。

小生の東京を出發するや、先づ相州江島にて旅順口陷落の大なる揭示を認め、汽車中は旅順口陷落の話のみに有之候、乍然若し大要害なる旅順口要塞が左程容易に陷落するものとすれば、國民は戰爭なるものを以て極めて容易なるものと輕視し、唯だ御祭り騷ぎのみを以て戰爭を待つ樣と相成り候ては、國民の性情は擧げて投機的となり、國民敎育の上に容易ならざる惡感化を與ふることなるべしと存候、亞細亞大陸北東の一角、關東半島の極端に當り天然の地質斷面圖を見る如き堅硬なる岩は旣に絕險の砲臺に有之候處、更に人力の有らん限りを盡くして堅く建築し防備せし要塞が左程容易に陷落すべしと待ち望くるは少々以て早計なるかと被存候、乍然出征將士の無盡の勇氣と施設とに依りて大快報の國民の耳朶に入るは遠からざる義と存候に付此段申上置候、匆々拜具。

砲彈中の花。

九月七日（水曜）晴。

謹啓、先日第十一師團參謀長石田大佐より七珊半の敵彈を花瓶の代用にまでとて贈られ候に付、唯今柳樹房なる第三軍司令部の後なる丘に登り、我毛香、女郎花、風鈴草、野菊の咲き居れるを露の儘折り來り、右の敵彈に亂れ挿し致候處、丹靑雜點染、紅紫自低昂の觀有之、一入の眺を感じ候に付、早速丹靑家東條君に托し、有りの儘を寫して我兄まで御贈り申上候、此花の年々歲々相同じく季節を違へずして秋に開くを見、さて窓を推して旅順口の敵塞を眺め候へば、聖典中の

凡て我この言を聽て行はざる者を沙の上に家を建てたる愚なる人に譬へん、雨ふり大水出で風ふきて其家を撞ば終には倒れてその倒覆おほいなり

野の百合花は如何して長かを思へ、勞めず紡がざる也、われ爾曹に告ん、ソロモンの榮華の極の時だにも、其裝この花の一に及ざりき

の警戒を回想致候。

畫中の手帖は日露兵卒の携帶する軍隊手帖を寫したるものに有之、大なるは露兵の物にて同

じく石田參謀長より贈られたるものに有之、小なるは日本兵の物に有之候、乍然日本兵の手帖には開卷第一に『洵ニ汝等ヲ以テ朕カ股肱ト頼メハナリ』と云ふ難有き　勅諭を載せあれども、露兵の手帖には何等此の如きものを掲げず、到頭より姓名、本貫、住所、宗教、家族、賞罰、育兒料、生計費を記し置くものに有之候間、軍隊

手帖の一事にても彼我兵卒の素養に大差あり、隨て我が連戰連勝の偶然ならざる所因を御承知有之度候。

又嚢中の帶の如きものは敵彈の銅帶に有之候、西洋諸國にては大戰勝の後、上等社會の婦人は此の銅帶を割きて襟止メを製し交際場裡に出入するを以て最も名譽とする由に有之候、元來銅帶は砲彈に固着し居りて中々取り脫れ難きものに有之候處、幸に工兵が取り脫し呉れ候に付、御入用に候へば歸京の節一條は可差上候。

嚢中銅帶の傍なる敵彈の尺帽は大島中將より盃にしては如何かとて贈られたるものに有之候儲又此頃は砲聲と砲彈の落下とは耳に慣れ目に慣れ候上、頑健は舊に倍し候に付、聊か御放念の程奉願候、匆々拜具。

秋三日。

九月十日（土曜）

忙着ニ征衣ニ快着レ鞭、轉レ頭月掛ニ柳梢邊ニ（高皇帝）とは、快濶と清爽と景趣との三を兼ねたる句である、而かも如何に平生より愛誦する句なればとて、總じて其の句中の境涯に入ることは困難である、更に現實に其の句中の人となることなどゝは、殆ど出來得ざるまでに困難である。然るに柳樹房なる第三軍司令部にありて、今日しも朝早く起き、ツト窓を開くと、ゆくりなく此句を想ひ起した、此の句中の人となるには今日此頃ほど好き機會は復たと無いと感じた。

そこで忙しく征衣を著け、快く鞭を着けて頭を轉ずれば、此邊は太やかなる楊柳の多き所とて、陰暦七月末なる殘の月は籠んもりせる柳の梢に掛つて、全く句中の人となつた。時に鈴蟲は露けき草叢の中に切れ〳〵に鳴い居る、前夜より打ち續ける敵の砲聲は時々聞ゆる、普通の早行には殘夢とか殘月とか云ふ熟語を用ふれども、戰爭中の早行には殘砲と云ふ新熟語を要することを知つた、即ち朝霧が全く晴れもせず、然ればとて沈みも遣らず、淡き部分と濃き部分とがありて、淡き部分より山の鞍部が仄かに見ゆる處、砲彈が會、此處に落ちて煙を揚げ、淡き部分と濃き部分とを參せ合したり、又は濃き部分に入て益、濃き部分を濃くすると見れば、殘砲も正しく一種の韵致がある。

篦麻と苧子とを植えたる畑を衝きて直通せる比較的大道をだん〳〵行くと、五間幅もある溪水の右側、楊柳と白楊との樹影に五六十戸許りの支那村がある、周家屯と呼び、いづれの家も四方には赤色の石英岩を疊みて墻を作つて居り、其傍には鳳仙花と向日葵とが咲いて居る。鳳仙花は紅色が過ぎて仇ッぽき洋紅色をなし、向日葵は藤黃色をなし居れるより、日本人の趣味には餘り適せない、然るに支那人は鳳仙花を『家桃花』と呼び做してこれを愛翫し、向日葵をも亦た愛翫する、日本人と支那人と趣味の違ふことはこれにても善く判る、予等には此等の花よりも墻の外に顧みられずに咲き亂れ居る紫茉莉の花が寧ろ優かしく感ずる。此等の家は大概第九師團野戰病院の病室に充てられて居る、然し此頃は負傷兵は少いし、病患者は內地に後送さるゝし、又兵士は病氣とでも名が附くと直ちに入院を命ぜられ、これが爲めに戰鬪に出られない、戰死せし友達の仇が打てないとて、病氣を自ら秘し匿くして戰線に就いて居る、一般の士氣が此の如き有樣なれば、入院者とては少く、流石の野戰病院も寂寥として居る。然し此邊の人馬の往來とては頻繁にして實に多忙を極めて居る、凡そ兵と云ふ兵の種類、馬と云ふ馬の種類、車と云ふ車の種類は悉く通行する、砲兵の縱列が重き車を泥濘なる

處に曳き、泥水が一二間もピシャ〳〵と飛ぶと、六人の支那の兒童が面白そうに見て居る、一疋の犬も亦た兒童等と共に面白そうに見て居る、何の國にても七八歳位の兒童は全くの無心にて此通りであると思つた。

それより愈〻行くと、道側に傑出せる一山がある、蒲團著て寢たる姿や東山の如く甚だ溫容なれども、東山などよりは高い、然かしこれを東山としたるなれば、夫の長樂寺のある邊に一個の天幕が張つてある、これ後甲子南方高地なる海軍陸戰隊々長の筒井海軍大尉が居る處である、隊長は予の名刺を見て、貴君は木村の御親類だソーデスナと云ひたれば、予はイーエ、彼レは子供の頃から私の家と緣故があるのです、然かし親類ではありませぬと答へ、それより大尉と觀測所主任の中川海軍少尉とが種々打ち解けて物語りせられ、山頂の掩蓋の内より大望遠鏡に依て敵の砲臺を手に取る如く示し、一々細かに說明せられ、やがて鷄でも占めますから晝飯を召上つて御出でなさいとて、三人會食した。晝餉の後、一支那人を案内者として前方まで行かんとしけるに、件の支那人はロシヤ、トン〳〵我不好（露西亞の砲彈が來る、我れ行くを欲せずと云ふ意なり）とて中〳〵に動かず、依て三人交も〳〵那個、日兵多々有、不穀本（嫌〳〵引き合はぬ）と連りに呼びて如何にするとも承諾せぬ。そこで此處より前方に行くことを止め、兩君に歡待を感謝して山を下つた。

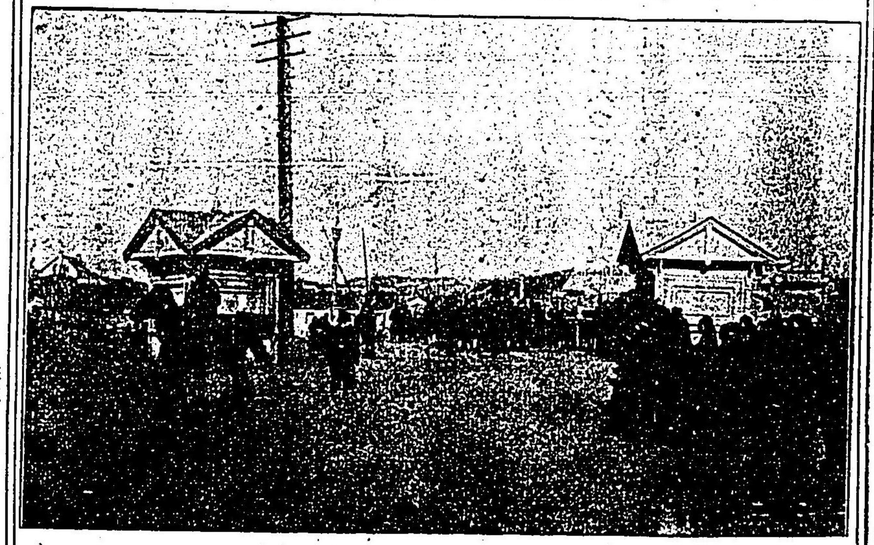
山を下ると、海軍陸戰隊指揮官黑井海軍中佐が巡回して來りたりと聞きたれば、一の天幕に入つて名刺を通ずると、指揮官には、好い所で御目に懸りました、これから御一所に行て、私の隊の工事を御覽に入れませうとて、轡を駢べ連騎して行つた。すると指揮官は鞭にて右方の零落せる支那村落を指し、已見松柏摧作レ薪との句がありますが、松柏の摧けて薪となる所か、露兵はアノ通り支那人の家屋までも大概摧いて薪に用ひてしまいましたと言はれた。然るに其の摧けたる家屋の間に、支那人が幾何も居るを見たるより、予は然かし支那人は未だ住んで居る樣です、隨分危險な所に能く居るものですナと言ふや、指揮官には、サー生命と財產と申して、財產より生命を重んずるが普通の人情でありますが、支那人はこれと違ひます、自分の家屋に住んでさへ居れば、如何な亂暴なる狼籍者も家具器財等を持ち行く者は無い、然かし若し家屋を棄てゝ逃げ行つたなれば、人無きまゝに、家具器財等を持ち去らるゝより、自己の財產の惜しき餘りに、此の如き砲火の間にも危險を冒かして、自分の家に居座はつて居るのであります、卽ち支那人の頭腦より見れば、財產は生命と同一なりと致すものにて、彼等が財產と生命との價値に輕重を置かざることが判りますと言はれた。予は指揮官の說明を聞いて、成程然りと解した。

夫より程經て、指揮官の部下が作業せる砲臺工事の處に來た。指揮官は一々詳しく説明された。予は此の工事の規模の誠に壯絶快絶なるに覺ゑず愉快なりと絶叫したるが、然かし敵の砲火の下にありて此の如き壯絶快絶の大工事を敢てする勇氣と細心と機根との三事には、愉快を感じたる後に、寧ろ限り無き畏敬の念を生じた。

此處を去つて更に小山に登ると、處々に廣サ三間深サ四尺位の底に水の溜れる小池が點在して居る、何にかと問へば、皆な敵の打ちたる彈砲の痕なりと。夫れよりダン〳〵行くと、土が全體に堀り返へしたる樣なつて居る處に來た、何にかと問へば、皆な敵の砲彈の痕なりと。指揮官には鞭を揚げて、先日乃木軍司令官が御出デになり、宮中より御差遣の應司侍從武官に依り　陛下に御土產話として、五十米突内に落下せし敵彈の痕を數へる樣にと申されたれども、コレ此の御覽の通り、畑を堀り起した樣になつて、彈痕は何百あるか判かりませぬから、此由を申上げたるに、乃木軍司令官にも實際を御覽になつて、實にも然らんと申されたりと言はれた、成程予も札幌農學校にて四年間耕作法の講義を聽きたるが、砲彈にて土地を開墾すといへるは今日初めて實際に見聞した。

此の砲彈の開墾畑は四五町も續き居たるが、指揮官には忽ち馬を下られた。其處は墓らしける故に、予も馬を下りたるに、柳の幹を削りて海軍少佐高崎元彦戰死紀念碑と墨黑々と書

いてあつた、四方には繩を張り、傍に敵彈の破片が大小幾十百となく積んであつた、指揮官は敬しく禮拜した、予も亦た禮拜して、傍なる砲彈の破片と彈の銅帶とを拾ひて鞍嚢に納めた、これは歸京の後、此の少佐の父君男爵正風翁に紀念にとて贈る爲めである、さて父君は、誰レも知れる我國有名の歌人であるが、若し此の砲彈の開墾畑に來られて、柳の幹の墓標の下に立ち、敵彈の累積せる處を見られたるなれば、一には老の身の杖柱と力賴ミせし我兒の此處に失せたるかと云ふ觀念と、一には陛下の御爲め國の爲めに勇戰して能くも死んで呉れたなと云ふ觀念と、悲



初めて旅順口に入らんとする海軍陸戰隊
（騎馬の指揮官は黑井海軍中佐）

歡交も〳〵來つて感激の極致を盡くされることならんと、父君の情を酌んで云ふべからざる感激を催した。すると指揮官には、高崎少佐も惜しいことを致しました、アンナポリスの海軍兵學校にも入り、未だ年も若かつたですが、何分にも御覽の通りの此處の激戰でしたから、頭腦は粉碎して卽死されましたと言はれた。

砲彈の開墾畑を去り、横道より火石岑子東方の一山頂に登り、地圖を擴げて敵の砲臺を指點した、すると指揮官には白い物を擴げますと敵の氣が付いて狙擊しますから、御止めなさいと注意された。此の山頂には、米國武官フォーテスキュー大尉が恰かも觀戰して居られた、大尉は現大統領ルースベルト氏の甥にして、先日來滿州丸にて長らく同航したる人である、予を見て手を握り、私は大變痩せましたらふと言はれたるより、予は、イーエ、然かし好く日に御燒けになりました、本國の御夫人には御目に懸け度ありませぬと答ふるや、大尉は手を顏に當て、大に笑はれた。指揮官は、私の天幕の內に入つて天下の大勢でも御察しなさいとて伴はれた。成程天幕の前より目を縱にすれば、高原瀰望、其上より二三十の峯巒が青螺の如くに起り、青螺と青螺との間には露營と幕舍とが連り、將士は東西に往來し、旌旗は秋風に映發し、萬馬は長へに嘶き、高原を超えて海開け、海上の島嶼は遠く低れ、島影なる我が軍艦の煙縷は細くして無からんとする、予は此の氣象の豪宕なるを見て、覺えず『鼓鼓震ノ天連ニ海岳ニ、旌旗帶ノ日捲ニ煙雲ニ兩家勝負須臾見、百二興亡咫尺分』と口吟した。すると指揮官は、アノ下の寺は長春庵と呼びます、何んと詩にする樣な風雅な名ではありませぬかと言はれた、予は如何にも詩にすると好い名です、然かし惜いことには、三字共に平字のみ重つて居ますと答ふるや、指揮官は、アー左樣でした、然らばアノ鳳凰山は如何です、アノ鳳凰山ですか、仄一字平二字で、且つ唐詩選の閨怨の部に好くある名と同一ですから妙ですと答へた、予は先刻より指揮官との談話にて其の武事一邊の人でなく、亦た風雅の士であることを悟つた、然かしこれが日本將校の眞面目にて、露西亞の將校と異つて居る重もなる點と信ずる。

天幕に入ると、口が渴きたるならんと、西洋杏の罐詰を開きて供せられ、參謀の石川海軍少佐は、能く横道からコンナ山に御登りになりましたナと云ふや、指揮官は笑つて、僕が後醍醐天皇を船上山に御連れ申す樣な風で引つ張つて來たのだと言はれた。各將校には晩餐を共にすべしと言はれ、餐し了ると、指揮官には今夜は津留海軍少尉の薩摩琵琶を聽かせるからとて、是非に一泊せよと勸められた。予は貴君等の御仲間には筑波艦、高千穗艦、滿州丸で御厄介になり、今又た御厄介になるのですかとて、遂に宿泊することゝした。津留少尉は又た蠅捕りに勸能なりとて、蟬を捕る袋の如きものにて僅か二三分の間に蠅を四合ほど取つた、我が遠征軍の將士は百萬の敵にも恐れずと雖も、此くまでに夥しく蠅が群れ居ること丶て五

月蠅の餘、蠅を恐るゝこと甚しきは無理と思ふべからず。やがて夜は冴え渡り、銀河は半空に流れ、敵の砲聲も薄らぐや、少尉は先づ『武藏野』を歌ひぬ、白露は滿山の秋の七草に浸む頃しもこれを聞く、秋は人の腸にも浸む心地。

武夫の憐を示して故さら優しかりき。最後に『王昭君』を歌ひぬ、胡地にあらねど此處萬里の遠征、天幕の内に千秋の玉骨が胡沙に老ゆる處を歌ふ、歌ふ者聞く者、皆な曲中の人となりしは非なるか。琵琶了るや、少尉は自分の單衣とスゴキとを出して予に著せしめ、參謀は自分の衣物を卷きて枕を作つて呉れられ、指揮官は新しき美しき西洋蚊帳を釣つて、これは乃木軍司令官から特に贈られたのだ、私等は客分だと思つて、軍司令官は此の通り懇篤に注意さるゝのだ、實に感激に餘る次第だ、今夜は貴君此の蚊帳の内にゆつくりと御休みなさいと、此の一つの蚊帳の内に指揮官と予とが全身を入れ、參謀は首丈ケを入れて寢ると、予が立派な蚊帳だ、内に居ると同じ心持ちがすると言ふと、指揮官はナンダ内に居ると間違へて夜中に私の手でも握つては困りますせと言はれたれば、誰レがソンナ毛だらけの手を握るものかと、一同大笑ひとなつた。予は軍人と云ふ者は、快活で、淡白で、親切な者だと思ひつ快く眠に就いた。

九月十一日（日曜）晴

朝起きると、秋は露にて滿山を打ち染め、得も言はれぬ風情である、紅色には撫子がある、白色には男郎花と尾花とがある、紫色には風鈴草と鴨跖草とがある、紅紫色には萩と鼠尾草とがある、蒼色には我毛香がある、黄色には女郎花と黄野菊とがある、薄紫色には野菊がある、いづれも時を得顔に咲いて居る。此等の花の上より敵の要塞を眺れば、『皷角悲三荒塞、星河落二曉山一』の感がある。午餐には牛肉を供せれた、これは先日旅順口の敵塞に送らんとせし支那人の戎船四十餘隻を我が驅逐艦にて捕獲せしに、船内には洋酒、牛、鶏、玉子等の食糧を滿載して居つた、即ち其時の分捕リ品の一分なりとのことである。分捕リの牛肉にて飽くまで腹を滿たしたれば、イザこれより此處を辭し去り、此處より二里、第一師團司令部に松村陸軍中將を訪れんと云ひけるに、三村海軍中尉には、部下の水兵を其處に遣はす用事がありますから、御案内旁、遣りませうとて、予は件の水兵と共に海軍陸戰隊司令部を出でた。

本道より行けば然まで遠くは無いのであるが、何分敵壘の面前を過ぐるのであるより、誰レも畫の間は通らない。然れば敵に露出せぬ樣に溪間を辿り〳〵て行くのであるが、それでも敵に見られる處が三ケ所ある、其處は馬を驅けさせて過ぐるのである。さて此の溪間は、雨餘の急湍が粘板岩を浸蝕せしより起生せしものとて、上リ下リが多く、兩側には雀ノ蜿豆が咲

第一司團司令部。

き揃ひ居り、岩蔭には田鳴と水鷄とがチ■コ〳〵して居る。白鷺も一疋佇立で居つたが、多分魚を窺つて居るらしい。溪間を出で丶高粱、玉蜀黍、枝豆、茄子など植えたる畑を過ぐると、香家甸である、此邊にも我兵は一抔居る。それより又た畑を過ぐると小流がある、此の地方の例に依て流の畔には楊柳と白楊とが青々と生えて居る、樹影には我が軍馬と輜重の馱馬とが群を作して居る、栴檀の樹の上より赤十字の旗が見える、問はずして野戰病院たるを知る。粟畑の間を過ぐると、敵彈が三分間づ丶を經て三發落ちた、落ちたる痕は深く地を鑿ちて底には水が湧き、煙硝の臭氣が紛々として居る、案内の水兵がコワー今日は劍呑ドと叫んだるより、予は御前は薩摩人だナと云ふと、ハイ、ドーして判かりましたと問ふ、コレはとかコリャーと云ふことをコワーと薩摩辯を丸出シにしたから直ぐに判かると答へた。粟は此頃善く實つて溢れると見へ、此邊には鶉がいくらも見える。それより海鴉と千鳥が見えるより、ダン〳〵海邊に近くなつたと思ふと、果して山の缺くる處より一天俄かに開け、鋭の如き海面が眼前に現はれた、雙島灣である。此灣に注ぎ入る一水を遡り行くと、碾盤溝南西高地の腹部を削つて建て列ねたる天幕がある、卽ち第一師團司令部である。名刺を通ずると、星野參謀長と伊豆參謀とは、くさ〴〵の事を懇切に說明せられたる後、予の脚の傍に横はれる一巨彈を指し、昨日此彈が此の天幕の内に落ちました、然かし誰レも皆な山上に觀測に行つて留守でした故、器具が毀れたるのみにて、怪我人はありませなかつたと云はれた。

露兵の詐欺事件。

それより又た話さる丶には、昨日敵兵の一詐欺事件がありました。それは敵兵が六十人許り支那人の服を着けて來ました、日頃は五十人や六十人の支那苦仂は使用して居りますから、誰レしも其れだと思つて居りますと、突然其の支那人が我兵に向ひ發砲致しました、我レも怪しと、彼レに向ひ發砲して三人を斃しますと、彼レは散り〳〵になつて逃げて行きました、後にて三人の屍體を檢視しますると、全く露兵でありました、此の如き詐欺的の行動を致しても可なりや否やは公法上の一問題と存じます、今其の衣服類を御目に懸けませうとて、從卒をして持ち來らしめたるに、新しき水色の支那服に血痕が狼籍として居り、靴は支那靴なれども、帽は露西亞のものなり、小銃は固より露西亞のものなれども、巾着は支那のものにて、其内に少量の刻ミ煙草が入れてあつた。

高崎山。

やがて高崎山（八月十三、十四、十五日、第一師團第十五聯隊奪取）に案内せられ、三人塹壕の内に頭を縮め身を屈して觀測したるに、敵の要塞は眼前に連り、味方の隊伍は數里に亘り、劍氣秋に横はりて、一世の壯觀を極めた。會、一敵彈が左側の平野に落ちたりと見ると、星野參謀長には、アー惡い處に落ちたとて起ち去り行かれた。觀測し了つて山を下ると、予は普通の編上靴を履いて居り、且つ身體が大きいより、降るのには甚だ困つた、すると伊豆參謀

には老人でも勞はる樣に手を取つて呉れられた、予は流石に今日は文人の本色を現はしました、弱いことですと言ふや、參謀には文人の本色とは面白いとて、大に笑はれた。

天幕の内に歸へると、參謀長には先刻落ちた彈は果して〇死者一名、重傷者一名を出しました、唯今報告がありましたと云はれた。それより松村師團長に面謁すると、御奮發で御座りますナと云はれた、先日第九師團司令部に大島中將に謁したる節にも、大島將軍は御奮發で御座りますナと云はれた、そこで文人が戰鬪線へでも入つて來ると餘程の奮發とでも考へらるゝのかと思つた。松村將軍は諸施設の著々と進行する事、士氣の旺盛なる事、手は斷たれ脚は斷たれたれども尙ほ且つ目の黑き内は起つて敵に當らんと意氣込める兵士のある事、兵士の給養は目下重燒麵麭と鰹の鑵詰がある故に十分なる事などを打ち語られ、それより予がバナマの帽子を被れるを見、敵は四十七ミリと五十二ミリの砲を備へて居りますから、狙撃せらるゝ危險がある故、注意に注意あるべしと親切に云はれた。そこで考へた、將軍の話を長く聽いて、そりより拙な騎リ方にて上下する溪間を暗夜に通ると、夜半でなければ第三軍司令部まで歸へられない、それよりは敵の探照燈に照らされぬ内（敵の探照燈は毎夜九時半より照らす）に敵壘の面前なる

松村中將。

本街道の善き途を早馬にて驅けて行くの優れるにはと。因て將軍に暇を告げたるに、將軍には然らば馬の上にて御あがりなさいとて、重燒麵麭を二袋贈られた。

松村將軍の露營を辭し、馬上にて麵麭を噛りつゝ行きたるが、又たダン〳〵と飢を訴へて來た、幸に碾盤溝なる海軍陸戰隊の天幕の前に出た、名刺を此處の隊長に出すと、隊長油谷海軍大尉にはそれは御困りでせう、然かじ茶漬の外には何にもありませぬ、マーこれで御耐えなさいと云はれ、茶漬二碗をかき込み、一禮して馬に飛び騎り、低き岡と溪と畑とを唯だ眞一文字に横切り、本街道に出でたれば、鞭を揚げて躍らし行き、驀て味方の軍隊の露營せる處まで來りたれば、此處より徐々と行くと、螢は點々と我を掠めて飛び、夜の景色も亦た捨て難き所がある、大小の砲聲は最早慣れて却て他の聲が耳に入る、蟋蟀は隱元豆の花の下で鳴いて居る、松蟲らしき聲が露に咽ぶのも聞ゆる、鳥の聲の聞ゆるは蓋に見たる田鳴か水鷄か鷺か、然らずんば白頭翁なるべしと思つた、そよ〳〵と吹く風の送り來るは味方の軍歌の聲である。

第三軍司令部に歸へりたるは十時である、筑紫砲兵、岩村海軍の兩中佐は、予が昨日より歸へらざる故、若し途中にて榴彈にでも中りはしなかつたろうかとて、心配し居つたと云はれた。

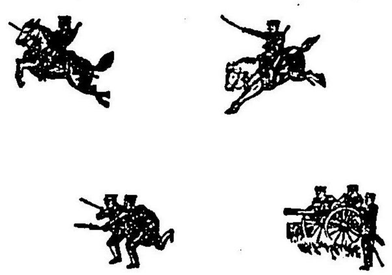
寢に就くと、砧の聲が聞ゆる、日本にては砧は餘り聞かぬが、支那にては女が杵にて頻りと衣を敲く風がある、其のコッツンコ〳〵とする音も亦た一種の詩趣がある。

支那人の衰弱、露西亞兵の墮落、日本兵の精英の宿因。

九月十二日（月曜）

さて今日は第三軍司令部に在つて何處へも行なかつた。そこで予が築紫中佐と共に先日より宿泊し居れる支那人の家を今日は十二分に見た。此家には天井、壁、柱の嫌ヒなく、紅唐紙に文字を書けるものを貼り詰めてある、何にか好句でもあるかと點檢すると、驚いた、何れもかも金錢に關係の無いものとては一として無い、『本日生財』、『初春搖錢樹』、『發福生財』、『入歳首銀錢有存黄金』、『一入新春好諸事皆湊巧毎年有餘積剰數大元寶堆金積玉門財神把咀』などの類にて、聯すら『櫃存金銀穴、内藏玉寶珠』と書いてある。さて又た閑暇なるまゝに先日第十一師團參謀長石田大佐が贈られたる露兵の軍隊手帖をも仔細に點檢したるに、育兒料とか生計費など云ふものさへ掲げありて、我兵の軍隊手帖とは全く違ふ、我兵より其の軍隊手帖を數冊出さしめ、敵兵のものと比較すると、我が軍隊手帖には開卷第一に『洵ニ汝等ヲ以テ朕カ股肱ト頼メハナリ』と云ふ有難き　敕諭が載つて居る、次に『汝等皆其職ヲ守リ朕ト一心ニナリテ力ヲ國家ノ保護ニ盡サハ我國ノ蒼生ハ永ク太平ノ福ヲ受ケ我國ノ威烈ハ大ニ世界ノ光華トモナリヌヘシ』と云ふ感涙に咽ぶが如き　勅諭が載つて居る、次に　勅諭讀法と誓文とが載つて居り、次に在郷軍人の心得が掲げてある、それからして本人の姓名、本貫、住所、履歴、賞罰、出戰務、給與を掲ぐのである。然るに露兵の手帖は、開卷第一より

本人の姓名、本貫、住所、宗教、家族、賞罰、給與、育兒料、生計費を掲ぐるのであるより、軍隊手帖の一事にても我兵と根本的に違ふ。一昨日來、我が各隊を巡訪して、其陣の堂々、其旗の正々、軍に私掠なく、秋毫も犯す所なく、而かも將士に餘裕あり、風雅の存する所を察し、茲に支那人の貼リ紙と露兵の軍隊手帖とを合せ見、支那人の衰弱、露西亞兵の墮落、日本軍隊の精英、此の三ッの物に各、一々深遠なる原因あり宿緣あることを感悟し、即ち感悟せし所を以て我兄に此く書送す。



漢文と西洋文。

九月十三日（火曜）晴。

鳳凰山を下ると、西下する溪水の右側に一草庵がある、長春庵と呼び、詩にすべきまで風雅の名である、黒井海軍陸戰隊指揮官（號栩洋）も其の韵致あることを言はれた。そこでこれを訪れると、左側に秦山府君の石碑が立つて居る、苔は石を蒸し字を蝕して、刻文は半ば以上讀めない、庵に入ると、羅漢（つたかつら）は毀（こぼ）れたる壁に纏ふて居る、蛩（こおろぎ）は佛壇の下で鳴いて居る、處々（ところどころ）に剝げたる佛の塑像が五六個立ち並んで居る。此の寂靜なる幽玄なる處が歩兵第三十六聯隊の大行李となつて居る、二名の主計、一名の計手と二名の下士とは、予の入り來たるをも氣付かず無言にて執務し居る、一人は兵士の給與表を彼處此處と頻りに調べ居る、一人は紙幣と軍用切手とを絶えず勘定して居る、一人は兵士に配達する數千の郵便を處理し、戰死者へと後送者へとの郵便は夫レ〳〵附箋をして內地に返送する手續をなし居る、一人は簿記帳を前に置き、顏を下に向け手を頭に當てゝ何にか餘念なく考へて居る、一人は恩賜の酒と海苔とを分配する爲め幾回となく算盤を彈（はじ）いて居る、其間に電報は二三通も着く、特務曹長が何にか督促に來る、支那人の苦力（クーリー）が用辨に來る、言語が通ぜぬから通譯を呼んで來いと云ふ、驢馬

長春庵。

歩兵第三十六聯隊大行李。

の車は幾臺となく石段の下に集り來て用事を待つて居る、炊事當番は何にか請求に來る、凡そ人生の煩、雜、繁、忙の四を極め盡くせる光景である。煩、雜、繁、忙の極致は無言であるが、五名の人々は殆んど無言で居る、偶、應答などするにも極めて語が少い。此の煩、雜、繁、忙の極致として無言なる人々が、無心なるが故に無言なる佛像と相對し、寂靜幽玄なる內に人世の有らゆる錯綜紛騷を入れたる處などは、其の對比（コントラスト）が誠に面白い、誰レか一代の名工に此の景趣を畫いて貰ひたいものだと思つた。然かも此の如き複雜なる景趣は漢畫にて寫し得べきや否やと思つた、斯ふ云ふ境涯は西洋畫に限ると思つた、若し漢畫にて此の境涯を寫したれば、結句（つまり）の所、王禹儕の『陽山山下草庵深、寂寂香燈對碧岑、莫レ怪相看總無レ語、座禪爲政一般心』と云ふ詩を畫にするより外には出來ぬと思つた、卽ち簡潔ではある、執著は無い、然かしこれでは何んとなく物足りぬ、誰レも十分とは思はぬであらうか。要するに漢畫は、漢文と等しく長所は簡潔にあり、西洋畫は西洋文と同じく長所は複雜なる所を寫し得るのにありとは、誰人も稱ふる所である。

西洋文の簡潔。

攻城砲兵司令官豐島少將は、堅硬なる石英岩の峻（けは）しき巖山の頂上近くを削り、此處に天幕を張つて長く駐在し居らるゝが、此の天幕のある境涯は、英語なればweirdの一語で盡くすことが出來る、少しく通俗に云へばcunningの一語でも盡くせる、然かし漢文や日本文にてweirdなりcunningなりの如く能く一語にて盡し得る字ありや否や、否な能く數字を連ぬるとてもこれに通ずる語は全く無い。又た此の如く天幕が巖の上に張つてある狀態はperchの一動詞さへ使用すれば、千言萬語を使用するよりも十分である。卽ちThe General's tent perches on pinnacle of rockと書けば、畫くが如くに其の景趣が現前に現はれて來る、總じて高き山の頂なりに點々せる小屋などは、鳥に關する事を以て形容すれば最も讀む者を動かす、然ればマッコーレーの古羅馬行（ローマこう）の長篇の內にも、此の如き山頂の屋舍をLike an eagle's nest on the purple Apenninesと形容してある。然るに若しこれを漢文にすると、將軍帷幕在二巖頭一、其狀似二鳥之棲止一とでもするのであるが、如何にもダラ〳〵して冗長でもあり、且つ全體に於て語を成さぬのである。以上の如くなれば一概に西洋文は複雜に長じ、漢文は簡潔に長ずとも言はれぬのである。さて豐島將軍には山頂の掩蓋の處に案內せられ、ドーです、パノラマの樣でせうと云はれた、パノラマと云ふ一語にて此の山頂よりの眺望の全班は誰レ人にも判かる、然るにこれを漢文にすれば、餘程語少く書いても、山河在二一目一とせざれば通ぜぬ、而かもこれですら意味は廻はり遠い、パノラマなる語の方が遙かに直截にして鋭く頭腦に感ずる。以上の如くなれば、西洋文にも簡潔なる所がイクラもあるが、然ればとて漢文にては果して複雜なる所を寫し得ざるか、否な敢て然らずと思ふ、例へば明の馮夢龍の文を讀め、

漢文の複雜。

其山崛起數百仞、林薄深密、疊レ石爲レ城、外樹二木柵一、當レ道穿二坑穽一、仆二巨枠一布二渠答一、夾以二守陣一。

連營數十里、直至二玉壁城下一、城南起二土山一、欲二乘レ之以入一城、城上先有二兩樓一、直對二土山一、孝寛更綴レ木接レ之、令二極高一、欵遂于二城南一、鑿二地道一、又于二城北一、起二土山一、攻具晝夜不レ息、孝寛掘二長塹一、簡二戰士一屯レ塹、每二穿至一塹、戰士輒擒二殺之一、又于二塹外一、積レ柴貯レ火、敵人有下レ在二地道一者上、便下二柴火一、以二皮排一吹レ之、火氣一衝、咸卽灼爛、城外又造二攻車一、車之所レ及、莫レ不二摧毀一、雖レ有二排楯一、亦莫二能抗一、孝寛令二縫レ布爲一レ幔、隨二其所一向、布懸二空中一、車不レ能レ壞、城外又縛二松于一レ竿、灌レ油加レ火、欲二以燒一レ布焚一レ樓、孝寛使レ作二長鉤利刃一、火竿一來、以二鉤刃一遙割レ之、城外又四面穿レ地、作二二十一道一、分爲二四路一、于二其中一、各施二梁柱一、以レ油灌レ柱、放レ火燒レ之、柱折、城並崩陷。

と、攻守兩方の作業の最も複雜せる所を最も好く寫して居る。若し夢龍をして今日地下より喚び起し、旅順口攻守の實際を見せたるなれば、彼レは漢文を以て日露兩軍の複雜なる情勢を輒ち綴り得ると思ふ。果して然らば漢文は複雜なる所を寫す能はざるものなりと一概に思ふのは、是れ亦た誤れりと思ふ。

既に西洋文にも簡潔なる所あり、漢文も亦た複雜なる所を寫し得と言ふや、或は曰く、漢文將

た漢文より脫化せる日本文の長所は莊重にあり、典雅にあり、西洋文は莊重なる所、典雅なる所を缺けりと。然り今回なる陸海軍戰鬪の公報には莊重なるものあり、典雅なるものあり、而して其の最も莊重なる部分、典雅なる部分は、一見漢文より脫化せる所に多しと思へども、これ敢て然らず、勤王報國の念凝つて鬱勃とし、輒ち能く死生の間に出入し、感激極つて發したる文字なれば、自から莊重典雅ならざるを得ない。人は今の米國人の卑俗なるを云ふ、而かも其の獨立の檄文を讀め、莊重なる所、典雅なる所は實に唐宋時代の封文にも優る所あるではないか、是れ全く生死の間に出入せる志士が熱血を濺ぎて作つた文字であるからだ。漢文と西洋文との長短を云ふ勿れ、簡潔と複雜とを比較する勿れ、孰レか莊重なり典雅なりと說くこと勿れ、要するに千歲の名文は死生の間に出入せる所より發す、死生の間にありては人は自然の儘となり眞面目となり至誠となる、即ち人を動かす文字の此處より起るは偶然でない。見よや、軍中にある尋常兵卒の手紙の方が、現代の所謂文士の推敲せし文字よりは、人を動かす點に於て遙かに優る所あるにあらずや。旅順口攻圍軍中にあつて、感ずる所があつた故に、此文を草した。

戰前の雨

〔クロパトキン砲臺等奪取の役〕。

九月十八日（日曜雨多し）

朝來細雨霏々、午前八時、早く既に空濛として白楊の梢を籠め、暗淡として四圍の群山を隱すを見る。檄あり、明日を以て一大戰を開始せんとすと。一隊の馬卒、雨を冒して馬に飲ふ者あり、支那人より枝豆を得て食ましむる者あり、濠洲より輸入せる燕麥秣を細かに切りて與ふる者あり、鬣を撫でゝ其の肥えたるを喜ぶ者あり、鐙を磨く者あり、轡を整ふ者あり、鞍を拭ふ者あり、勒に油を塗る者あり、鞍嚢を繕ふ者あり、旅嚢を締むる者あり、其の胸中言は ず語らずと雖も、各〻其の主人をして明日の戰に功名を得せしめんことを期するもの、馬も亦 た風に臨みて長へに嘶き、平生の愛過に酬ゐんとするの概をなす、馬卒すら此の如く、馬亦た此の如し、將校の意氣以て測るべし。既にして馬卒各〻其業を了へ、營舍に就くや、會〻本國の恤兵部より贈る所の紙卷煙草四包づゝ頒たる、一卒あり、其の外包の裏の文字を讀む、曰く、

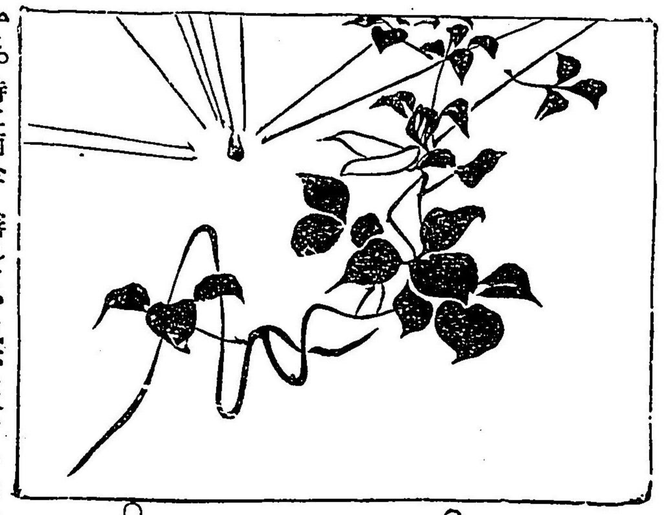
と、各卒聽きて肅然たり、他の一卒外包の表を見、『コンナ肩に負はれたる子供でも萬歳と云つて呉れるのだから、死んだつて好いナ』と、各卒聽きて愈〻肅然たり。時に雨益〻細くして煙の如く、風は營舍の壁に代用せるアンペラの蓆を撲ちて蕭々たり。

午後一時、第三軍より將士を犒はん爲め特に酒殺を供せらる、中島大尉、席上なる砲彈に挿める支那の鷄冠花を指し、予に謂て曰く、慽むらくは花の俗に過ぐることをと、予曰ふ、然り、若し敵の畵工をして日本人は大戰前の酒宴に此の如き卑俗なる花を挿し居たりと寫さしめなば、是れ一代の名折レなりと、爲めに隱元豆の花を折り來りて代ふ、列席の各將校曰ふ、妙なり々々と。即ち恩賜の酒を酌み、各〻皇恩の優渥なるに感激すること稍〻久し。宴酣にして十五珊の敵彈相踵で宴席の前後に落ち、霹靂一聲、硝煙砂を捲きて騰ること一二丈、煙沫飛びて酒盃の中に入る、衆喝采、『萬歳の聲、山嶽に震ふ。宴席主任の渡邊砲兵少佐喊んで曰ふ、此の好下物あり、盃を重ねざるべけんやと、洋酒數瓶立ろに席に出づ、卽ちダルニー退去の際、敵の遺す所の赤葡萄酒（シャートー・マルゴー）、白葡萄（シャートー・イケム）、キュランソー酒、チョコレート酒、バナナ

宴席に敵彈落下す。

酒なり、衆快呼、淋漓痛飲、意氣殆んど滿天の雨雲を拂はんとす。石原白道（陸軍省恤兵部員）、卷き紙を展べて隱元花前に敵彈の落下する所を畫く、即ち是れ。會、森川中尉先鋒隊に轉任せんとす、扇を出して一字を書き以て紀念とせんことを需む、開き見れば白地に一個の大なる旭日を畫けるもの、予敢て辭せず、題して曰く、

東海躍二紅輪一、乾坤
忽一新、丹心傾逐
照、葵藿奈二微臣一



と。時に雨全く霽れて、風亦た收り、彩雲滾々、當面の于大山頂に湧き來り、明日の戰鬪に我軍の大捷を豫兆するもの、如し。

明日の正攻計畫。

第一師團は二〇三高地及び海鼠山、水師營南方堡壘。

第九師團は龍眼北方高地の堡壘（クロパトキン砲臺）即ち水源地保護の砲臺、及び盤龍山西砲臺の西方高地にある堡壘。

第十一師團は東鶏冠山北砲臺及び東鶏冠山砲臺の攻擊準備。

二〇三高地及び海鼠山の外は攻路掃蕩を要す。

十九b
クロパトキン砲臺も奪取す

光輝

戰後の月

〔クロパトキン砲臺等奪取の役〕。

九月十九日（月曜）

午後、我が砲兵巨彈を集めて龍眼北方の角面堡（クロパトキン砲臺）を猛擊し、黃昏、壘殆んど粉碎す。歩兵即ち銃劍を裝ひて一齊突進、大呼吶喊して壁に肉迫し、三方より攀づ、工兵内より援けて爆裂藥を放ち、黃煙天を衝きて逆上し、砲兵外より助けて巨彈を密射し、呼聲、爆響、砲音、相和し、萬雷一轟、山海爲めに震動す。既にして夜に入る、敵、探照燈を放つ例夜よりも早く、白銀山砲臺の邊より五萬燭力のものを放ち、鞍子山砲臺と椅子山砲臺との間より四萬燭力のものを放ち、這般兩大光の間より更に三條の光を放ち、探照燈合して五條、上よりも下よりも斜よりも直前よりも浴びせる如くに照し來り、光彈も亦た連りに放ち散じて萬點の球玉を降らし、天地玲瓏、皎々として世界を玉化せんとす。時に砲戰未だ止まず、大小の彈丸雨の如く注ぎ、彼我孰レより發したるや得て辨ずべからず、唯だ光と音響とに依り僅かに何の種たるを知り得るのみ、紅に閃くは黑色火藥を裝せるものなり、黃に潑ねるは無煙火藥を用ひたるものなり、高く長く火花を散らすものは臼砲の彈なり、カタ〳〵〳〵と續くものは機關砲なり、トン〳〵〳〵と連りにするものは小銃なり、トンカタ〳〵と聞ゆるもの

大戰後の月明。

は、彼我の兵士が小銃と機關砲とを壘中に交も〳〵連發し殆んど相接戰するものなり。頃刻にして砲聲少く、銃聲も亦た薄らぎ、漸く少く漸く薄らぎて遂に止み、探照燈の數も亦た頓に減ず、恰かも飛報あり、我軍殆んど敵壘を奪取し、其の水源地をも占領すと、攻城砲兵司令官豐島少將聽きて筌然たり。時既に午夜、山頂にある者は豐島將軍、佐藤砲兵中佐（佐渡丸擊沈の存命者）及び予の三人のみ。會、風浮雲を拂ひて長空一碧、陰曆八月十日夜の月色は晝の如く、廬明靈照、無量光を放ちて十方に透り、廓然として一切の心地に〈印し、諸般の分別念相を切盡し去り、萬法一如たらんとす。中佐高く天を仰ぎ見て曰く、月をして人たらしめ、此の下界の實際を見せしめなば、果して何の感かあると、予曰く、馬太傳に云ふ、天の父は其日を善者にも惡者にも照し、雨を義き者にも義からざる者にも降せ玉へりと、月も亦た此の如き觀念あらんかと、中佐曰く、果して然らば嚴正中立かと、將軍曰く、嚴正中立なる者獨り月のみならんや、彼の壘を距る百五十米突の處に支那人の畑あり、瓜方さに熟し、茄子熟し、蘿蔔も亦た太れり、彼我の兵對抗することを連句、共に重燒麵麭を嚙み湯を呑むのみ、故に相互に瓜を採り、茄子を得、蘿蔔を煮て腹に飽んとするも、一たび面を出さんか、輙ち狙擊せらるゝを以て、瓜、茄子、蘿蔔の眼前に爛熟するも、採り得る能はず、徒らに涎を流して之を見るのみ、即ち這般の數畝の畑は今に嚴正中立地帶となり、瓜と茄子と蘿蔔とは正に嚴正中立を守るにあらずやと、二人聽きて覺えず哄然たり。中佐天幕より酒瓶とキャラ欵冬の辛醬油煮とを携え來りて曰く、此の戰勝あり、此の明月あり、此の快話あり、豈に一盃なかるべけんやと、自から滿酌して一飲し、予に觴して曰く、此の如きの酒、君抑、飲みたることありやと、曰ふ無しと。時に月は皎々として愈〻清く益〻冴え、乾坤瑩徹、人をして知らず無碍の淨土に入らしめんとす、即ち唐太宗が遼東を平定し、月を望みたる詩を想起す。

元苑月初明、澄輝照遼靄、映雲光暫隱、隔樹光如綴、魄滿桂枝圓、輪虧鏡彩缺、臨城郊影散、帶暈重圍結、駐蹕俯九都、佇觀妖氛滅

と。清の康熙帝も亦た所在を平定して遼東に至り、月を望み、唐太宗の韻を用ひて曰く、

夜氣澄炎景、清光度海靄、流雲漸稀朗、繁星粲如綴、蟾殿魄初明、氷輪影未缺、懷古聽行漏、素心良蘊結、曠然望九霄、妖氛盡殄滅

と。我が武夫の爲す所此の如くして、彼の古人の行ふ所亦た此の如し、予輩文人たる者、發憤勵精、能く天心を穿つの大手筆を揮ひ、以て此の曠世の月夜を賦し、我が文章をして長へに千秋に照らさしめざるべけんや。

十日日記。

九月二十日（晴。氣溫最高二一度半、最低一五度半。風強、不定）六曜。

前夜（九月十九日）より攻城砲兵司令部の山頂に宿泊して居つたが、新に築きたる塹壕の傍に寢たるより、泥と沙とが風に連れて絶えず顏に降つて來て、寢心は餘り好くない、脚も亦た冷たくなつて、時々眼を覺ました。そこで頭の上に百舌が大きな聲で鳴き續けたるより、それに連れて起き揚つた。一兵士が一合計りの水を汲み來て呉れたるより、これにて口を嗽ぎ顏を洗つた。此邊は一體に山が高く、樹がない故に、山中には一滴の泉だもない、遙か山下より溜り水を汲んで來るのであるから、此の少し計りの水でも容易なものではない。湯が湧いたからとて、朝餉を食べると、佐藤砲兵中佐が、此湯は青垢のヌル〳〵して居る水を沸かしたのだ、御互に度々これを呑んでも身體に何等の障りはない、貴君が先日も話されたる日本の戰後の教育は野宿主義に致さなければならぬと云ふ說は、至極賛成だ、ソーダ野宿主義に致さなかつたならば、イクラ戰爭をしても國民が後から朝鮮なり滿洲なりへ移住して呉なければダメだからナと云ふ。朝餉を了らんとすると、奈良砲兵少佐が飛んで來り、龍眼北方の角面堡（クロパトキン砲臺）も水師營西南方の砲壘も確かに取れましたと報告する。然らばと箸を投げ、

攻城砲兵司令部。

馳せて掩蓋の內に入り、望み見ると、當面なる敵の角面（クロパトキン砲臺）と南西方なる敵の第一砲壘との上に、恰も我が國旗が立ちて朝嵐に飄へり、折柄漏るゝ旭日は影を照らし來り、旗地なる旭日の光輝を愈〻添える處などは、詩にも畫にも成されない境涯である。其內に南西方なる他の敵壘二個にも旭日の旗が建つ。然かし敵は其の一隅に殘り居ると見え、トン〳〵と云ふ小銃の音も、カタ〳〵と云ふ機關砲の音も未だ頻りに聞え、又た味方は度々壘壁に突擊し、一將校が劍刄を振つて馳せ行く。やがて工兵が打ち込みたる爆發藥の煙も薄らぎ、味方は全く四砲壘を占領せしと覺ゆる間に、敵兵は總崩レとなり、隊を作さで東方に向ひ散り〳〵に逃け行く。すると攻城砲兵司令官豐島少將は、號令して一個の榴散彈を逃げ行く敵兵に打ち懸ける、彈は狙ヒ誤らず落ちて、敵は益〻散り〳〵となる、二彈三彈と浴びせる、半ば以上斃れて、餘は愈〻木の葉の如くに逃げ行き、遂に山の蔭に隱れて始末つた。役了りて、豐島將軍に戰勝を祝し、且つ昨夜來の厚情を謝し、辭し去らんとしたるに、將軍には、マー御緩くりとなさい、モー私も閑暇になりましたから珍談でも承はりませう、幸ひ國元より昆布粉を送つて來ました、貴君は酒黨にあらず、甘黨にもあらず、煙草も上らないから、昆布茶を一杯差上げますとて、口を開いて大笑ヒとなり、くさ〳〵の事を話される、若しも『快活』と云ふ字が人となりたれば、此の將軍こそ實に其人なれ、實に快活の權化は此人であると思つた。

クロパトキン砲臺等の占領。

攻城砲兵司令官。

午後三時、攻城砲兵司令部の山頂を下り、第三軍司令部に歸へる途中にて、三人の負傷兵が新しく繃帶したる儘にて向フより來り、予を見て、貴君龍眼北方の角面堡（クロバトキン砲臺）は取れましたか御承知はありませぬかと問ふたるより、角面堡も水師營南西の三砲臺も四ッとも朝の内に取れてしまつたと答ふると、三人は大に喜びたるより、御前等は何處の兵かと問ふと、私等は昨晩第一砲壘へ先頭で突撃した工兵でござります、爆發藥を手一杯に盛つて幾回となく敵兵目がけて打ち付けました所、爆發藥は無くなる、敵兵は一歩も退かぬ、我が歩兵は見る〳〵斃れる、歩兵と合して敵兵に石を投げました所、敵兵も石を投げ、其内に負傷しましたから、後は如何なることかと心配に堪えませなかつた所、唯今四砲臺とも取れたことを承知し、嬉しくて堪えられませぬと答へた。予は御前等が先頭で奮發して呉れた御蔭だ、其の甲斐があつて誠に善つた、能く傷を養生せよと云ふや、三人は殊の外喜ビの色を顔に現はし、一兵士は何にコンナ傷ですから直きに癒ります、此次の戰鬪に出られますと答へた。三人に別れ、第三軍司令部に歸り、夜に入り、『戰前の雨』、『戰後の月』の二文を起草した。草し了るや、月明昼の如く、蟲聲滿地、砧聲斷續。

九月二十七日（晴。氣溫最高二三度、最低一八度半。風軟、西六哩。）

二十六日、不在中に今澤攻城工兵廠長（工兵中佐、同郷人）が訪はれて、名刺が遺してあつた。

攻城工兵廠の製造器具。攻城工兵廠。

そこで今日は右の答禮旁、攻城工兵廠を參觀せんと、第三軍司令部を出でた。沿道には、燕、雲雀、頰白、四十雀などが飛んで居る。此等の鳥の多きこと〳〵云ひ、日の溫からず寒からざること〳〵云ひ、風のソヨ〳〵と軟かく吹き來ること〳〵云ひ、白楊と楊柳とは淡く煙を籠めて居ること〳〵云ひ、全く日本の春の景色にて、若し傍の畑に粟と玉蜀黍が實つて居らぬなれば、眞成の春である。此の如く誠に好い氣候で、好い景色で、好い心持ヲだ、其上に牧畜なり植林なり石伐りなり、興すべき事業は多い、戰勝の後、日本が此邊を租借すること〳〵なるなれば、郡長にでもして貰ひたいと思つた。それより程もなくすると、周家屯に着く、煙突より盛んに煙を吐き、竈より頻りに火を發し、トンカチ〳〵と云ふ音が聞ゆるより、此處なりと思ひ、馬の上より大聲にて廠長を呼ぶと、此處に居る、聲で判つたと今澤中佐が莞爾として來られる。廠長の案内にて諸工場を參觀すると、驚いた、其の盛んに製造し居れる器具は二十世紀のものとは思はれない、源平盛衰記か太平記にでも載つて居る如き楯、冑樣のものを製造して居る。廠長には、戰爭も石投ゲだの組打ヲだの斬合ヒだのと、大分昔に返つたから、此んな器具をも製造するものであると云はれた。それより話が轉じて舊藩主と舊藩士との事に渉り、御先祖樣（本多平八郎忠勝公）の御武德の餘光にて、御令弟樣には御出征になり、御一門の忠彦樣は遼陽にて御勇戰の後、名譽の討死を遂げられ、御舊臣中には此の第三軍のみに

ても土屋中將初め吾々に至るまで、夫れ〳〵王事に盡くし居れる折柄、貴君までも來られたと云ふ事を聞き、昨日取敢へず訪問したのだ、誠に愉快であると云はれたるより、予は舊藩人は何處に行つても幅は利かぬが、獨り軍隊に來ると澤山居るのには愉快である、先日も滿州丸にて鎮南浦に行くと、同郷の星田兵站司令官が直ちに訪はれた、平壤に行くと天野聯隊長も生駒大尉も同郷である、大孤山には寄らなかつたが、彼處には御承知の從兄熊谷大佐が居る、今回當地方に來り、長嶺子にて汽車より降りると、停車場にラムネ水二本を持つて來て呉れた人がある、誰かと問ふと、矢矧の產にて本多兵一と云ひ、酒保を開き居れるが、今朝貴君が御出でになると云ふ電報が停車場に着いた故に、先刻より待つて居りましたと申す。

▲した、後にて聞けば同處の彈藥中間廠長も同郷の森田君だつたソーだ、御先祖樣にも定めて御家の武運の長久なるを地下にて御喜びになつて居らるゝならんと云つた。

頂にて晩食を共にしたる佐藤砲兵中佐が山より下りて此處に來た、これも同縣人である。今澤廠長には鷄を割き、佐藤中佐と副官大崎工兵大尉と予と四人にて快く談笑しつゝ午餉を了つた。廠長の天幕の後に支那人が植えたる韮が青々と生長して居るより、これを乞ひ受け、やがて佐藤中佐と共に連騎して馬を馳せつゝ第三軍司令部に歸つた。韮を携えて歸つたが、さて予が此の一個月餘、食卓を共にし居れる第三軍管理部にて韮の食用に就き二派に分れた、韮黨の首領は發意者たる予にて、陣中にて熱病、下痢等を豫防するは韮を食ふに限ると云ふ趣旨である、同志者は筑紫砲兵中佐（熊本人）、岡田歩兵少佐（高知人）等である、渡邊管理部長（越前人）は食べることもあるが、熱心なる同志者では無い、佐藤中佐は僕は今日初めて此處で會食するのだが、韮は難有く無いと云ふと、夫れ見たことかとて、韮反對黨の一副官後藤歩兵大尉が叫ぶ。後藤大尉は髯麗はしく、骨格逞しく、武人の好摸本とも云ふべき人相なれば、韮を排斥する柄でもあるまいと云ふと、イヤ前途多望だから韮を食はぬと答へた。すると黑川輜重兵少尉が、前途多望とは御嫁サンでも貰ふと云ふ意味ですか、既に子が男女リァンカ（兩箇、支那語）もある癖にと、果ては大笑ヒとなる。第三軍管理部滯在中、食卓上の話は、總じて此類である、何と淡白で快活なものではあるまいか、予が其の初メ二週間の豫定で此處に來り、而かも延期して一月餘も滯陣し居るのは、全く偶然で無いことを悟らるゝならん。

九月二十八日（晴。氣溫最高二五度、最低二〇度。風強、不定）水曜

今朝、渡邊第三軍管理部長が其の一副官松平歩兵大尉（舊會津侯の令息、現山田伯爵）に向ひ申すには、乃木軍司令官閣下以下幕僚には長々の攻圍で御心勞は察する、せめて珍らしき物でも

第三軍司令部　松平英夫

ませうとて、副官と下士と傳騎と四騎にて出掛けた。やがて高原部を去り、山部に入ると、溪と云ふ溪にて苟くも飲むべき水のある處には、悉く我兵が天幕を張つて居る、『殺氣横ニ天地』とは此間の景象を寫し盡したものと思ふ。此邊の山々には、支那人が中〳〵能く植林して、青々として居る部分もある、鳧鴁は群を作つて啼いて居る、敵味方の新なる墓標の林立する處で、其の啼き聲を聞くと、如何にも淒涼を感ずる、古き荒れだる墓地にて聞くよりは一入斷腸の思がする。

再過二龍頭一。

駐二馬沙場一感若何。寒潮鳴咽入二悲歌一。一年又過龍頭渡。殘柳西風新塚多。

それより溪水の俄かに太くなりて灣の如くなり海に注ぐ處に大白山兵站司令部がある。此處の牛尾司令官には、數名の支那人と頻りに應接し居りしが、用務の果てたる後、予等を見て、能く御出になりました、時に丁度晝の時刻になりましたから、私が釣りました香魚と鰻でも差上げ度きものだ、何にか新しき魚類でも無いか、海岸を搜索し見られよと。松平副官には、早速命に從ひ、旦つ予を見て曰く、今日は關東半島の南東海岸を彼處此處騎り歩きますから、御一所に如何ですかと。予は同行致し

大白山兵站司令部。

御馳走致しませうとて、香魚の鹽燒と煮ビタシと鰻の燒きたるとを供られた。同行の松平副官も予も大陸に渡つてより以來、未だ嘗めたることもなき珍味なれば、何處で御釣りになりましたと問ふと、牛尾司令官には直ぐ此の川で釣つたのでありますと答へられた。依て松平副官には、渡遼第三軍管理部長の命もあれば、此等の魚を少し頂戴して乃木軍司令官閣下に差上げたいと存じますと云はるゝと、牛尾司令官には幾何でも釣つて差上げます、然かし毎日日出前で無くては多く釣れませぬ、其上、部下の勤務時間と慰勞時間とを嚴格にせん爲め、如何なる事情あるとも、日出前と夜分にあらざれば、自分始め誰レも釣りを致さぬと定めましたから、貴君等は今夜御一泊なさい、すると今夜ゴリ捕りを御目に懸け、明日日出前に香魚を釣つて差上げますと云はれた。然ればとて予等は一泊すること丶決した。然し牛尾司令官には、糧食、給水、薪料、被服、器具、馬糧の前送、苦仂（クーリー）、支那車輛、野菜の徵發、彈丸の打殼（修理して再び用ふ）の收集、往來兵員の設營、其他支那人の民政等にて、一分時の間隙だも無き繁忙の實況なれば、予等は今夜の一泊を期して此處を去り、龍王塘の海岸に出た。海岸は風が强く、二三丈もする白浪は硅岩の絕壁に疾く擊ち來り疾く擊ち去りて、宛ら萬斛の雪を一時に飈へす如き觀がする。然れば松平副官には支那人に出漁を談判したれども、彼等は此風を如何ともする能はずと答へたれば、近日中に魚介を第三軍司令部まで持ち來るべきこ

とを命じて此處を去つた。此邊には、秋の晴れ渡りたる空を春の日の如くに飛び舞へる鳥類の多きことゝて、副官は短銃にて直ちに一鳥を打ち止めた。鳥の落ちたるを搜ガシに行くと、水無き溪間の岸に露西亞兵の屍體が二ッある、これは去る七月二十六日、二十七日、此處にて日露兩軍格鬪し石戰せし際のものなるべく、帽子も外套も其儘にて肉は爛れ盡くして居る、副官には、コレだつて本國には親や子もありませうにと云ひたれば、予は『可レ憐無定川邊骨、猶是春閨夢裡人』とは善く詠じたものだと思つた。大白山兵站司令部に歸つて、牛尾司令官に此事を話すと、私は敵兵の屍體を見付け次第直ちに葬ふり、又た平和克復後に先方に通知せんと其の認識票は悉く保存して居りますが、左樣な處に殘つて居ることは氣が付きませなかつたとて、直ちに苦仂を遣はして厚く葬つた。溪水に香魚と鰻とが生けてあつたが、これは部下の將士全體に分つに足るまでは、誰レも食はずに生けて置くのだと云はれた。巢の樹の下にて風呂に入り、それより鮓を作つて夕餉を供せられた。聞く第三軍兵站監古谷大佐の主意とする所は、後方にある者は如何なる粗食をしても善い、唯だ戰鬪線にある者には、能ふ丈ケ給養を厚くすべしと云ふにありて、自から粗食して居り、朝餉は梅干二ッと定まつて居る、然しながら前方より客が來りたる時には厚くこれを接待せよとのことである。此處の牛尾兵站司令官にも此の主意を遵奉し、予等が偶〻前方より來りし故に、風呂を沸かしたり

第三軍兵站監の主意。

鮓を調へて厚く饗應せられたのである。夜に入るや、罐詰の空殼に藥を入れ、これに石油を注ぎて松火となし、溪水にてゴリを捕つた、司令官は誠に上手にて、高知縣出身の一軍曹と共に一時間程に四合計りも捕へた、予も試みたるに、二尾しか捕れなかつたが、實に興味の深い慰ミである。天幕に歸ると、風が寒く吹くからとて、支那人流の燒火を燃いて呉れた、近頃暖く快く寢たのは、今夜が第一等である。

九月二十九日（晴。氣溫最高二四度、最低二一度。風軟、南）水曜。

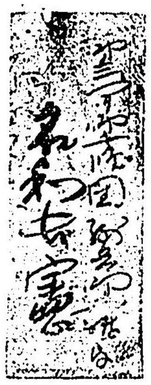
午前五時頃、牛尾兵站司令官には、サー是れから香魚釣りに行きませうと喊ばれたれば、松平副官と予とは床より飛び起きて一所に行くと、司令官は友釣りにて打ち絶えずに釣り取り、日出前に五十八尾獲られた。一兵士に命じ、柳の枝にて籠を造らしめ、これに取れたる香魚を悉く入れ、乃木第三軍司令官閣下へとて松平副官に贈られた、魚の香氣の鼻を撲つ所と云ひ、潑剌として色光澤の鮮かなる所と云ひ、籠の風雅を盡くせる所と云ひ、宛ら俳句を讀むが如き感がある。松平副官には、乃木軍司令官閣下には珍物なりとて嘸御喜ビになりませうし、又た私の此處に來た任務も果しましたとて、感謝せられる。朝餉の後、予等は昨日來の厚意を重々謝して大白山を辭し、來時と別路を取つて歸途に上つた。途中英格石にて石の城壁の如く又た日本の城跡に似たるものが二町程も續き居たるより、何にかと善く見ると、全

く溪流が洪水の際に兩岸の岩石を侵蝕せしより起生したるものにて、流水の侵蝕的開鑿の模本である、此の如き好模本は殊に稀であるより、後日著述でもする時には、宜しく此處の景象を挿入すべしと思つた。乃木軍司令官に能ふ丈ケ新鮮の儘にて香魚を差上げんと、一行は馬を躍らして歸ると、恰も午餐前とて第三軍管理部の各將校は集合して居つた。予が此日は殊に大なる馬に騎り居たるより、騎リ方を見て批評する。予は、私は人並ミに騎るのです、單に文人だと云ふ所で貴君等が彼此批評さるゝのであると云ふと、渡邊管理部長には、先づソンナものですと答へられる。渡邊管理部長は、長く佛蘭西に留學せし者なれば、予は、佐々友房氏が佛蘭西にて帝國主義、卽ちアムペリアリズムと云ふ語を聞いて來た、然るに日本には英語を解する者が多きより、アムペリアリズムと發言するを幾に思ふて、佐々がアムペラズムと言つたと評判した、これも佐々が洋學者でありたるなれば、誰レも評判を立てぬのだが、洋學者でなきより佐々のアムペラズムとて人の笑柄になつたのだ、私の馬も同樣である、諸君が私を文人だと思つて居るより、イクラ上手に騎つても、斯く批評さるゝのであると言ふと、各將校は、貴君の騎リ方も宜しい、姿勢も非難は無い、然かし勒の持チ方に至ては未だ文人だ、文人、文人、文人中の第一の馬騎リと云ふ免狀丈ケは渡すと言ひたれば、予は寧ろ鷄口となるも牛後となる勿れだと、負ケ惜シミを言つて、果ては大笑となつた。さて此の間に松平副官には、香魚の籠を早速乃木軍司令官に差出すと、乃木軍司令官には、如何にも珍物なりと賞せられ、さて切角の珍物なれば、一尾宛なりとも第三軍司令部の將校一同に分つて呉れられよ、其節拙者も一尾を賞味せんと云はれたれば、副官にも乃木軍司令官の言を聞て、流石に感激せられた。

九月三十日（晴。氣溫最高二四度半、最低二〇度。風軟、西）

朝、松平第三軍管理部副官には、魚介の徵發の爲め、今日は昨日と方角を全く變へ、西海岸に行きますから又た御同行は如何とのことなれば、予は、私は大日本水産會の幹事と申すエライ役を多年致して居りますから、本會報告の材料を收集するに好機會なれば、直ちに御同行致しませうとて、二人連騎して出掛けた。海岸まで出るには中〳〵の距離がある、出るまでに大なる涸レ沼がありて、荻、蘆、蓼、河原菊などが猥籍として出き亂れ、鍋鶴、白鷺、五位鷺が頻りと餌つて居る。海岸に出づると、巖の姿は如何にも怪しく、石門は浪より起り、雄浪雌浪は交る〳〵打ち寄せ來り、全體の景色は房州の外海岸に似て居る、副官も亦た房州の海岸に善く似て居ます、海水浴でも出來そうな處だと云ふ。鞭を揚げ、波打チ岸を驅け行くこと一里許、八隻船北海に至り、第三軍憲兵の駐在所に入り、魚類の事を聞くと、昨今慾に目の無き支那人が戎船を以て食糧、飲料、鷄卵などを敵壘に漕送するより、此の海岸は一

八隻船北海。



體に船を泛べて出漁することを軍政署より嚴禁されましたと答へた。そこで此處を去り、第一師團騎兵第一聯隊長名和騎兵中佐（男爵）を半里距れたる處に訪ひ、魚類徵發の事を依賴した。名和聯隊長には午餉にとて鷄飯を供せられたるが、香ノ物の芳ばしければ、何處にて得られしやと問ひたるに、露西亞人の糞桶に漬けたのですと答へられた。此の聯隊長も華族なり、同行の副官も華族であるが、華族すら糞桶に漬けたる香ノ物を好がりて食べらるゝを見、予が一時なりとは云へ、これに閉口したるは贅澤の極なりしと自から愧めた。午後三時、來時と別路を取つて第三軍司令部に歸つた。

露人糞桶の漬物。

軍用輕氣球。

十月二日（晴。氣溫最高二四度、最低一九度。風軟西）日曜。

前日以來、二十八珊砲（サンチ）の据付ケ了り、今日は敵要塞を目懸け初めて試射するとのことであるより、朝餉の後、攻城砲兵司令部の山頂に向つた。軍用輕氣球は、晴れ渡りたる晩秋の空に揚がり、風無き儘に雲井を鳴き行く雁の群と其の高サを競はんとする處など、一生涯中に未だ嘗て眺めたることも無き景趣であつた。然るに敵は輕氣球を目懸け野砲にて續けさまに榴散彈を放ち、予が頭の上にて散り〳〵に爆發し、其下を馬に騎つて獨り行くのであるより、切角の好景趣も餘り好き心地はせぬ。攻城砲兵の山頂に登ると、山、海、谿谷、地隙、掩堡、要塞、幕舍、軍艦の一大パノラマは眼前に開展し來り、『海國帆檣壯。邊城鼓角雄』の古句を想ひ起した。滿州軍總司令部より總參謀長兒玉大將も來り臨まれ、乃木大將、鮫島中將、伊地知少將等と共に觀測して居られ、此處の主任なる豐島少將が砲火を指し、例の快活なる大聲にて頻りと說明して居られる。さて砲の種類など云ふことは、吾々素人の解せざる所なればこれを記せず、然かし敵は如何なる砲種を使用し如何なる彈種を我に向て放射するや、これを知れば自から彼我の情勢を揣摩することが出來る、即ち今日までに敵の我に向て放射せし彈種の寫眞を得たれば珍藏する。此日の成蹟は殊に良好にして、二十八珊彈の初めて落下せし際は、敵兵八九名は飛び揚げられて即死し、敵の狼狽の狀は手に取る如く見へしかば、孰れも喝采して午餐の時三鞭酒の盃を擧げ、やがて予は第三軍司令部に歸つた。午後は何處にも出でず、至極閑暇である、さなきだに用務の無き予は、頃日軍中にあつて讀むべき書籍などは無く、無聊に苦んで居つた。偶、篠田法學士（第三軍國際公法顧問）と山口通譯官とがホ

兒玉大將。二十八珊砲の試射。

ハットンの小說。

ーリジー氏の四川、貴州、雲南ニ於ケル三年間とハットン氏の小說露國皇帝ノ命令の二冊を貸與された。これは露人がダルニー撤去の際、遺し行きたるものなるが、兩君は露人の遺し去りたる書類を檢分中、偶然これを發見せられしものにて、特にハットンの小說は、誰人も知れる如く露國皇帝の命令に依り、其の國內に頒布を嚴禁せられたる有名の書物である、篠田學士

は堆積せる反古を檢分中、其内より拾ひ上げたるものにて、學士は勤務の多忙の爲め、未だ讀ます、然れば先づ讀めと予に渡したのである、露國の領土内には頒布を禁せられ、反古の内より發見したりと云ふ此書自身が既に好個の小說なれば、平生如何なる書物にても貪り讀む癖あるも、小說のみは一切遂に讀みたること無き予も（ボイスキルバートの小說大破壞を除ては）、興味動きて讀み初めたるに、趣向は悲壯、行文は流麗なれば、午後三時より翌午前一時半まで宵の更け行くをも覺えず、其の四分の三を讀み了つたが、主人公は虛無黨の女刺客なるまゝ一絕を口占して寢に就いた。

長劍舞來解二漢紛一。箇中國士却紅裙。寧期如レ草殺レ人處。先讀乾坤第一文。

旅順口地方の氣候。

十月三日（晴。氣溫最高二〇度、最低一二度。風強、南東）月曜。

今日は風強く、氣溫の俄かに低下せしことゝて、人も我も大陸季候の變化烈しきことを言つた。然かし熟考ふれば、札幌よりも季候は佳良なりと思ふ。札幌にては、今日此頃となれば、霜は降る、木の葉は黃ばみて木枯ラシの聲がサラ〳〵とする、其内に手稻山の頂が雨雪にて微かに白くなる。然るに此の地方にては、未だ一回だに霜は降らぬ、木の葉も黃ばまぬ、唯だ黃ばみ盡くしたるは高粱のみである、秋の草花も咲き亂れ、春の愛子たる雲雀は秋の狡兒たる百舌鳥と相和して鳴き、今日こそ殊の外寒けれ、頃日は好天氣のみ打ち續き、日暖かに晴れ〴〵して、太氣の朗かなること北海地方の今日此頃と比ぶべきものにあらず。聞けば例年陽曆十月中には霜は降らぬ、十一月に入りて初め二三回、十二月、一月に四五回、二月、三月に一二回位とのことなるが、今年は例年より更に暖いとのことである。さて此の地方は盛岡市近傍と緯度を同くすれば、實は盛岡市の氣象と比較を取りたく思へども、軍中にて何等の材料が無い故にこれは出來ぬ。然かし戰後此の地方に渡つて事業を盛んに經營せられんことを國民一般に希望する故に、北海道開墾地の中央（札幌地方）と此の地方と孰れが氣候佳良なるや、參考の爲め平均溫度を表示する。

▲札幌地方　△旅順口地方

一月	▲一六・〇（△一一・五）	二月	▲一五・〇（△一五・〇）
三月	▲一一・五（△二・〇）	四月	▲五・〇（△八・〇）
五月	▲一〇・五（△一五・〇）	六月	▲一五・〇（△二〇・〇）
七月	▲二〇・〇（△二三・〇）	八月	▲二一・〇（△二四・〇）
九月	▲一六・〇（△二〇・〇）	十月	▲九・五（△一五・〇）
十一月	▲三・〇（△六・〇）	十二月	▲（一三・〇）（△〇）

（一個年）	東京	札幌	旅順口地方
快晴	一四〇	一五〇	一三〇
曇	一四〇	一五〇	一三五
雨	一三〇	一四〇	八〇
雪	一〇	一二五	一二〇
霜	八〇	一三〇	一四〇

即ち北海道よりも否な東京よりも此の地方の季候の佳良なることは判かる。

さて又今日は終日外出せず、露國皇帝ノ命令の讀殘せる部分を閲みし了り、更に四川、貴州、雲南ニ於ケル三年間を讀みたるに、興味津々として言ふべからざるを覺えぬ、京友不レ知情味適、彈丸聲裡讀二奇書一。

十月五日（晴。氣溫最高二二度半、最低一五度。風軟、北西）氷曉。

是より先、旅順口攻圍軍に來つてより以來、兵卒の生涯、陣中の情態、戰後の景趣など、歴史家將來の資料の一端までにと、畫題を捜ること丈ケには聊か勉めたのである。然し自分は少しも畫けない、故に捜つて來ては畫伯達に報告するのである、白道畫伯（石原陸軍恤兵部員）に報告すれば、輙ちカンバスを携えて件の場處へ行つては寫生せらるゝ故に、予も心地が善く、時があれば畫題探シに出掛けるのである。此事を知り居る將校は、毎々予に彼處に行つては如何です、此處に御捜索なさいなどゝ言ふのである。大崎工兵大尉は、水師營に偵察に行きたるに、關帝廟の關羽の像の敵彈に中つて居る所は、戰後の景趣として頗る面白い、然し其處に行くのには中々の考へものであると報告して呉れられた。そこで今日は其處に行かんと思ひ、同地に生れたる一老支那人を案内者となし、且つ馬卒を連れて出發した。途中にて大崎大尉の許に至り、此行の安危を問ふた、大尉には鳳凰山前方の山の下より半里ほど馬より下りれば危險は無からん、然し水師營に出づる溪水より坂を登る處は敵砲臺の直下なればば氣を御付けなさい、白馬では宜しくあませぬと注意された、幸に今日は白馬に騎らざりしかば、それではとて行くことゝ決した。亂山を高下して行くこと凡そ一里半、敵の小銃距離に來た故に馬を下つた。砲彈は途上に幾個も落つる、然し頃日は、其の方向に依てこれを避ける位のことは僅に知れる樣にもなり、且つ頭の上を飛んで遠く行くのであるから、聊か慣レ氣味となつた。それより味方の近頃占領せし一砲臺の傍を過ぎ、溪水を渡ると、小銃の丸が亂下する、アンタハン、コナイな處に馬を連れて來なハッてはイケマヘンと叫びたる兵士のあるより、何うしてかと問ふと、危いサカイと答ふるより、馬卒をして馬を附近なる最と深き地隙の内に連れ行きて繫ぎ置かしめ、さて支那人の案内者は此處より前には行かぬと云ふ故、馬卒と共に坂を上つて水師營に入ると、連擠數百戸の大村、寧ろ關東半嶋の一都會と申すべき處である、流石に財産の惜き支那人も、此處の危險には避易したりと見え、一人の影だに

水師營の關帝廟。

も見へぬ。然し我兵は或は石を壘みたり、或は支那人の天戸を以て蔽とを作りたり、或は塹壕を穿ちたり、或は掩蓋を築きたり、或は土壁を立てたり、くさ〳〵の方法を以て隱蔽しつつ多數の兵員が駐屯して居る。村の中央に當り高き二本の旗竿が立てゝある故に、これなりと思ひて行くと、階前の人家は砲彈にて壞れ盡くし、廟門は『奎星閣』の三字を額として幾分か舊形を存すれども、瓦落ち壁崩れて所在は踏むべからず、左大臣なる關平の塑像は、馬より落ちて折れたる矢の半ば以上箙に殘れる狀は面白く、右大臣なる周倉の馬は寸斷して、青龍刀の痕迹だに見るべからず。それより廊廊に入ると、聯が幾個も掲げてある、大概は壞れて讀むべからず、唯だ『朝來爽氣挹二南山一、夜半文光射二北斗一』の一聯のみが讀み得らるゝ。石碑は三基立つて居るが、其の中央なる『流二芳百世一』と篆額せる一基の文を寫さんと、馬卒に向ひ寫す間に砲彈が頭の上を幾個飛んで行くか數へて居よと云ふと、『仰觀二横扁一係二雍正十年一』ドーン、一ッ、『本營協領本堪張公建修』ドーン、二ッと、八ッ數ふるまでに『計今百六十有餘年。世遠年湮。墻未レ傾。而瓦已解。風吹雨漏。棟未レ折。而椽已崩。神像不二復莊嚴一。廟貌諸多二殘敗一。目擊神傷。深有レ所レ感。因而謀及二兩翼佐領一。會商二營員同志一。樂善虔意重修（下略）　金州漢軍佐領　福陞　光緒拾七年巧月』と寫せた。それより本廟に入ると、左の壁は大なる砲彈に打拔かれて居る。其の傍なる雷神と火神との二塑像は全く壞けて居る。菩薩と天后聖母とは

水師營南方砲臺。
第一旅團第三聯隊本部。

倒れてV形をなして相共に臥して居る、七聖の内の四聖は仰いで倒れて居り、二聖は紛碎せられ、一聖は幾分か殘つて居る、文昌帝君は伏して居る、馬祖と財神とは首が取れて居る、施公は顏が刷げて居る、中央の關聖大帝は流石に儼存して居るが、其の胸の中央は四十七ミリの砲彈で貫き通して居る。成程大崎大尉が報告して呉れたる通り、中〳〵面白き景趣なりと感じ、ゆくりなく杜牧之の『遺廟丹青落、空山草木長』の句を想ひ起したるが、然し此邊にては樹木は射擊の目標となるが故に悉く伐倒しあるより、『草木長』の三字は當らない。然しながら一體の趣は、如何にも雋くに足るべきものなれば、廟内を暫く彷徨して、此處に來りたる効能の空からざりしを喜んだ。廟門を出で南西に行くと、一高地がある、即ち我兵が近く占領したる敵壘の一である、此處には第一師團歩兵第一旅團第三聯隊が駐屯して居るが、當時これを占領せし際の苦慮、勇氣、細心、精力、慘烈は全く一篇の大なる小説である。聯隊長牛島大佐等には、能く御尋ね下りました、壹の日中に

牛島大佐

此處に御出でになるとは誠に期せなかつたと喜ばれる。さて聯隊長等は重燒麵麭のみにて午餉を濟まさるゝを見、予は飯は御上りになりませぬかと問ふと、毎日日が暮れ敵に人影も認められぬ樣になりますと、土城子より飯の煮いたのが到着致します、これは當夕の食分と翌朝の分とを一度に持つて來るのであります

露兵の水壕。

陸上の魚形水雷。

が、かくて朝餉と夕餉とには飯を食べますが、午餉には御覽の通リ重燒麵麭のみを食べますと答へられた。予は土城子までは一里半もあるでは御座りませぬかと云ふと、聯隊長には左樣で御座ります、それ故に夕餉は毎夜大概十時頃に食べ、又た湯も大きな樽に入れて彼處より到着するのでありますから、皆な冷めて居りますと答へられた、何んと麥飯の冷えてパサ〳〵としたるを冷たき湯を注けて夜の十時頃食べ、それで一日の苦勞を慰むるとは、到底都人士の想像すべからざる所である、而かも此の聯隊は平時東京市麻布に駐屯し、兵士は東京人が多いのである。聯隊長は壘内を御案内致しませうと言はれたるが、此の高地には其の入口より塹壕を掘り、土嚢を積み累ねて通路となしあれば、敵は目の前に群り居れども、隱蔽されて容易には認められぬ、然かし認められると直ちに狙擊し、先刻も中尉一名と兵卒が二名此處で卽死致しましたと云はれた。それより水の深く溜り居る壕に來りたるに、聯隊長には敵はコンナ高地にまで水を灌いで此く水壕を作り、我兵を防禦したのでありますと云はれ、それより敵の魚形水雷を裝置せし所に到るや、敵は軍艦より此の如く完全なる魚形水雷を幾個も輸送し來り、陸上にこれを放つて我兵を極力防がんと致したれども、これを放つに暇なくして逃走致しましたと云はれ、次で一木材に一尺位を距てゝ七珊の敵彈二個が穿ち入り爆發せざるものあるを指し、何んと奇觀ではありませぬかと云はれたるが、是れ亦た一個の好書題

露兵の給養。

なりと思つた。鹿柴の間より敵の人馬の往來せるを窺ひ居ると、番兵が危ないと叫びたるより、覺えず頭を縮めた。途上にて手帳を拾つた故に、開いて見ると、露國將校の傳票である、敵兵が如何なるものを食べ居たるやを知るに足れば、これを讀むに、七月までの外は記して無い、然かし七月頃は何を食べ居たるやを知るに足れば、これを記るさんに、

東シベリア狙擊第三聯隊半中隊長　フロウル中尉記名

七月二日　米十プード。三日　鹽三プード。五日　米十プード。九日　米五プード、大豆五プード。十一日　米十プード、豚脂一函（一プード）。十二日　豚一函（一プード四斤）。十五日　米五プード、大豆五プード、豚脂一函（一プード七斤）。十六日　豚脂二函（二プード九斤）。十七日　麥一プード十五斤。二十日　米十プード、牛酪一プード二十斤。二十三日　米五プード、牛酪一プード二十斤。二十四日　米五プード、牛酪一プード。二十六日　米五プード、牛酪一プード。三十日　米五プード、牛酪一プード

と書いてある。砲壘を一廻はりして案内の牛島聯隊長に謝し、此處を出で、前路を取り歸途に就きたるに、途上敵の榴霰彈が炊事當番の湯を煮き居る所に飛び來つて一兵士を其場に斃し、更に飛んで其傍の一兵士を斃したるを眼前に見、座ろに人生の無常と慘澹とを悟り、言ふべからざる感懷を發した。それより龍眼北方なる歩兵第十八旅團司令部に到り、平佐少將

に謁し、更に近く占領せしクロバトキン砲臺を見たるが、此處にては三食共に一里距れたる圍山子より運び來り、日も既に落ちたること丶て、兵卒が追送品の空箱に飯を入れ、空叺に乾鰈か何にかの菜を入れて此處に運び來る者連續と斷えざるを見、戰鬪線にある人々の困難勞苦は此までなる哉と悟りつ丶、やがて鳳凰山下に達し、それより快馬一鞭、夜に入つて、柳樹房なる第三軍司令部に歸つた。

軍中の宴會。

十月九日（晴。氣溫最高一五度、最低一二度。風軟、北西）日曜。

正午、乃木第三軍司令官より午餐の饗あり、宴方さに了り、餘興酣なるや、午後三時頃、砲聲殷々、忽ちにして萬雷の一時に轟發するを聞く、即ち宴席を辭し、馬を走せて攻城砲兵司令部の山頂に登るや、司令官豐島少將曰く、十分間許り遲くありました、味方は既に突擊して豫定の地點を占領しましたと、依て戰勝を祝し、且つ我兵の勇武なるを感嘆しつ丶歸へる。

十月十三日（晴。氣溫最高二二度、最低一七度半。風軟、南東）水曜。

午前、吉田第三軍經理部長を隣村に訪ふ。部長には兵站、糧餉、輸送力、燃料等の事を說く

や極めて親切なり、特に此の如き燃料の皆無なる地方にありて、數萬の兵が日々炎燃きする薪を一日の餌料だに無く、能く補給する經

經理の苦心。

營の慘澹なるに至ては、予等の如き此の地方に長く滯在し居る者と雖も全く想像の及ばざる所である。本國の人士に向ひ、困難勞苦は、獨り戰鬪上にあるのみならず、亦た經理上の點にも大に存することを悟られんことを望むのである。

謹啓槃名歐米の全天地を動かし、現代の詩豪スウィンバーンと手を提りて東西の英雄君と操との感を催ふし、王侯貴婦人の駕をロンドンの旅舍に枉ぐるに至る、我兄の榮譽も極れりと謂ふべし、乍然小生の祝する所は我兄が津島の小仙洞に白髮の御兩親樣と十年初めて相會したる事に御座候、釉狸新詩一千首、不レ愁錦繡裏二山川一にあらずして、至レ家父老喜、出レ郭壺漿迎の境遇にありと存候、英國の侯爵夫人などが訪問に來りたるは詩となすに足らず、白髮の老父母がヨネがえらくなつて歸つて來たと御喜びになりたる情は實に同感に不堪、小生の老母までも貴兄が御歸朝になりしを喜び、いたづらの野口サンがえらくなつて導れて來て下されしと

第三軍司令部に於て

志賀生

野口米次郎殿

謹啓槃名歐米の全天地を動かし、現代の詩豪スウィンバーンと手を提りて東西の英雄君と操との感を催ふし、王侯貴婦人の駕をロンドンの旅舍に枉ぐるに至る、我兄の榮譽も極れりと謂ふべし、乍然小生の祝する所は我兄が津島の小仙洞に白髮の御兩親樣と十年初めて相會したる事に御座候、釉狸新詩一千首、不レ愁錦繡裏二山川一にあらずして、至レ家父老喜、出レ郭壺漿迎の境遇にありと存候、英國の侯爵夫人などが訪問に來りたるは詩となすに足らず、白髮の老父母がヨネがえらくなつて歸つて來たと御喜びになりたる情は實に同感に不堪、小生の老母までも貴兄が御歸朝になりしを喜び、いたづらの野口サンがえらくなつて導れて來て下されしと

陣中生活一班。

十月八日至曉哥。

廢物利用。

謹啓出征將士の苦心を御承知に成らんとの義に候へば、陣中生活の一班を御承知に成らんとの義に候へば、將士が如何に苦心して廢物を利用するかを御承知に相成るに若かずと存候、依て內地にて榮耀風流に飽き玉へる人士の御目までに懸けん爲め陣中の廢物利用の數々を左に差出申候。

風爐。

(一)風爐。　卽ちシチリンなり、重燒麵麭を入れたるブリキの空函を曲げて圓くし、兩端を釘にて打ち着け、下部に穴を穿ちて風入レとなし、かくて此の上に飯盒を懸けて食物を煮タキするなり。

煙草入レ。

(二)煙草入レ。　夜中には露の下ること本邦よりも殊に烈しく、露營又たは天幕の內にては、煙草及び燐寸の濕めりて用をなさざること往々あり。さて敵兵の遺て去りたる外套は、毛地厚ければ、これにて煙草入レを製し、又た征露丸入レ（軍より各將士に給與さるゝ赤痢、熱病など傳染病の豫防丸藥、每食後一丸づゝ服用する制規なり）は、厚きブリキ製なれば、其の

明きたるものに燐寸を入れ、表面なる『征露丸、云々』と刻せる部分は凸凹をなせば、これにて燐寸を擦れば直ちに點火するなり。

パイプ。

(三)パイプ。　長日月間の遠征なれば、パイプを損じたり又たは失ひたる者も少らず、卽ち敵の遺て去りたる銃丸と其の藥筴とにてパイプを製せしもの是れなり。

風鈴。

(四)風鈴。　明キ瓶を橫に二つに截ちて、礫なり金屬なり重キものに糸をくゝり着け、糸の端に短冊を着け、風のまに〳〵動きて空瓶の內部に撞り、チリン〳〵と最と涼しき音をなすなり。短冊は多く紙卷煙草を入れたる紙の空箱を適宜に截ち切りて用ふ。先月の上旬なりき、予は五家房の傍を過ぎける際、偶、初秋の風の涼しき音を送り來りたれば、馬を駐めたるに、空瓶製の風鈴にて、短冊は矢張リ紙卷煙草の空箱にて作り、上に文字あれば、讀むに、

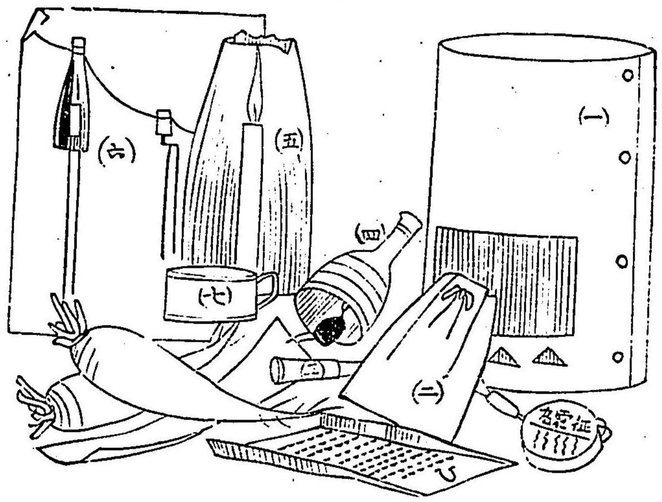
短夜や敵前いそぐ三騎かな

とあり、風雅の極とや謂はん。此の持主たる兵士の名を聞き洩らせしこそ今に恨なれ。

ホヤ。

(五)ホヤ。　關東半島は、細き長き半島にして、三方海に面すれば、風多く且つ風位の變化多きことゝて、露營若くは天幕の內にては燈火の滅すること往々あり、而かも陣中にてはランプなく、一切蠟燭のみを用ふるを以て、火の滅するを防ぐ爲め明キ瓶の上部を截ちてホヤに代ふ。予の此文を草せしも亦た明キ瓶のホヤの恩惠に賴るなり。

電柱碍子。
湯呑。
大根オロシ。
罐詰の明キ殼。



（六）電柱碍子。　軍中用ふる所の電信線、電話線の碍子破損するもの少らず、而かも其の修理は本邦にあるが如くに容易に辨ずべからず、即ち明キ瓶を以てこれに代ふるに、其の効能は眞成の碍子と少も違はず。

（七）湯呑。　罐詰メの明キ罐にて作る。

（八）大根オロシ。　不用なるブリキを釘にて穴を穿ち、凹凸を作りて大根オロシとなす。此の如くオロシたる大根は辣氣鼻を撲ち來り、風味一層佳。

以上は此闘の説明に過ぎず候、乍然陣中の廢物利用は以上の數種に止らず、其他實に屈指に遑あらざるほど澤山に有之候、今小生の實視したる物のみを左に御通知申上候。

罐詰メの明キ殼。　湯沸カシ、汁椀、小鍋、柄杓、茶筒、煙草ノ灰吹キ等、くさ〴〵の利用あり。最も巧みに利用せるは、第三軍管理部にて、これに細き麻紐を着け、呼ビ鈴となせるものなり。

明キ瓶。　水入レ、藥入レの類となせるは、固より普通にして奇となすに足らざれども、明キ瓶の儘を用ひ、蠟燭を其口に立てゝ恰好の蠟燭立テとなせるは、一寸面白き思付キと謂ふべし。又た明キ瓶の上部を去り、下部を以てコップと作せるもの少らず。

重燒麵包の空函。　これはブリキにて製し、素と甚だ大なるものなれば、其のブリキは各種の器具製造に利用せらる。又は現形の儘にては、其の大小に依り、或は香物漬、或は水桶、或は馬の水呑桶、或は風呂桶となる。

明キ樽。　一斗樽の明キたるものは、多く假樋に利用せらる。又た内部に厚く粘土を塗り、下部に穴を穿ち、此穴の周圍をブリキにて張り、火爐と作す。

明キ叺。　叺の明キたるほど各種に利用せらるゝものとては少し。先づ歩兵はこれより草靴を製し、馬卒は現形の儘にて軍馬食用の麥袋に代用し、工兵は掩堡の土嚢となし、又た支那には本邦の如き繩とて無ければ、輸卒は明キ叺の繩を解きて直ちにこれを用ひ、又た藁を解きて新に繩を製す。

空箱。　本邦より追送品の空箱は大概大なれば、ベンチに代用して腰掛ケとなす。又た机に

代用すること少からず。予の使用する机は、『鹽乾魚肉四貫五百目　開鱈　明治三十七年六月大阪小笹善兵衛納』と記せる明キ箱なり、此文は卽ち此の開鱈の明キ箱の上にて草せしもの。

以上の外、古き長靴の上部を以て圖囊となせる一將校、カキ色夏服の古きズボンを以て巧みに脚絆を製したる一兵士を途上にて見受け申候、佐藤砲兵中佐が練齒磨キの入レ物の明キたるを食鹽入レと致し居るは、一等の思付キにて至極妙なりと感じ候、又名和騎兵中佐(男爵)の許にて午餐の節、供せられたる白菜の香ノ物は如何にも芳ばしかりしかば、何處にて得られたりやと相尋ね候處、男爵には露西亞人の糞桶にて漬けたるものなり、糞桶の香ノ物を召上りになつたのは始めてゝありませうと笑て答へられ候節は、如何に芳ばしかりしとて覺へず閉口致候、乍然此の一事にても我が出征將士の困苦は內地にありて到底想像だに及ばざる義と御承知有之度候、匆々拜具。

其他。

營中雜筆。

十月九日（日曜午後）

惡書惡句仍千古。

予、技能に於て百拙、特に書に至りては拙中の太拙、曾て粉山衣洲の家に數客あり、衣洲予が南京客中の七絕、嶺南行蓋幾層層、氣吹偏如二退院僧一、聽得吳孃歌二水調一、春湖柔櫓入二金陵一を評し、其の稍〻調を成せるを稱す、一客曰ふ、詩は可なり、然れども志賀が夫の惡筆を以て示したる時は、流石の支那人も興を醒ましたるならんと、座客齊しく手を拍ちて曰く、眞に然り々々と。當時席に在りたる者、偶〻此事を予に告ぐ、亦た覺えず手を拍ちて大笑す。今茲

に第三軍司令部に在るや、予をして強ひて惡筆を揮はしめんとする者少からず、常に辭す、而かも多くは聽かれず、佐々木通譯は漢語の譯官なり、素と能筆を以て軍中に鳴る、此人にして惡筆を需めんとす、殘忍も亦た極れり、卽ち衣洲席上の笑柄を語りて固く辭す、通譯、墨を磨し紙を撫で〻强ふ、卽ち謝して曰く、

如レ水墨香撲ニ幕紗一。捻レ毫一字奈レ難レ加。惡書惡句仍千古。可レ耐牙營賦ニ蜀花一。

新面壁九年。

大陸氣候激變、忽ちにして熱、忽ちにして寒、十月三日、北方の强風俄かに吹き至り、寒暖計攝氏十二度に降る、予、霜降リの夏服の外、何物をも携へず、料峭として冷氣に堪へず、卽ち本邦に在りては年內一回だにシアツを着けたること無き予も、初めてシアツを着け、翌四日、第三軍より給せられたる赤毛布を頭より被ぶり、蠅除の拂子（軍中にては、蠅を驅逐せん爲め誰人も携ふ、支那人すら携帶し、ダルニーには此種の拂子一式を賣る商店あり、滿洲に蠅の多きこと以て察すべし）を右手に携ふ、一將校あり、叫びて曰く、達磨なる哉、眞の達磨なりと、白道壽伯（石原）、卽ち之れを寫す、壽成る、予も亦た見て、眞に活達磨の觀をなす、因て壽を東京の知人に贈り、且つ傍に書して曰く、

陸軍 白道壽伯 戶山學校教師

新面壁九年　大陸氣候の激變に依り今日の扮裝如此、健康亦如此。

鷓鴣。

予の宿舍せる支那屋舍の後（乃木大將宿舍の傍）に一株の比較的大なる菩提樹あり、其傍に杏、棗、楡等亂生し、相交互して蔭を作る。每朝早天、報喜鳥先づキッ〳〵と鳴き、次で白頭翁來り、午前九時と午後四時頃には、鷓鴣必らず來り鳴く。鷓鴣は予が鄕國將た東京邊には絕えて見えず、本邦の各地亦た見ること極めて稀れなり。支那に至ては然らず、南淸地方に多きが上に、旅順口附近にも亦た到る處最も多く飛び且つ鳴くを見る、北淸地方に此の如く多きを見れば、杜詩の『到レ曉惟能愁ニ北人一、南人慣聞如レ不レ聞』と云ひ、周愛蓮の『黃陵多有此間稀』と咏ずるもの蓋し眞ならず。頃日惡詩あり、

屋後、有ニ一菩提樹一。旦暮鷓鴣來啼。有レ感。

煙花任汝舞婆娑。竹裏黃陵又可レ窠。莫レ是菩提樹陰厥。新墳無レ主感情多

と、拙と雖も實際實境なり。

未震法雷。

一僧あり、本山より特派せられ、遼北の各軍を悉く巡訪し、南下して此處に至り、各隊を一々慰問す、其の精力嘆服するに足る。予を見て一辭を需む、卽ち特に千頭庸哉氏に囑して其の穿てる僧冠を畫かしめ、上に題して曰く、

震ニ法雷一。擊ニ法鼓一。布ニ慈雲一。洒ニ甘露一

と。惜い哉、此僧精力餘ありて、修養未だ足らず、人に向ひ開悟を說きて遂に三昧に至ら

す、彈丸の落下するを見、頓に前進するを止めて歸へる。一將校見て笑て曰く、『不レ能レ震ニ法雷ニ』と改めては如何と、予曰ふ此くては過酷なり、『未レ震ニ法雷ニ』と改むべしと、聽く者爲めに哄然たり。

活殺存于一心。

去月二十日、東京麻布第三聯隊が水師營南西方の敵壘を取るや、壘中に魚形水雷及び機械水雷を藏む。露兵が海軍より遠く携へ來り、陸上にありて空中に爆發せんとせしもの、其の精苦想ふべし、而かも壘の我軍に奪はるゝや、一も發し得ず、倉皇として遁れ、悉く遺てゝ去る、我兵皆な以て水上の物を陸上に見るを珍とす。頃日、此の機械水雷一個を馬に載せ第三軍司令部に送り來り、將士の觀に供す、横道砲兵大尉之れを畫き、贊を需む、書して曰く、

其未レ發兮。匹馬載歸。其發兮。萬兵紛飛。活殺存ニ于一心ニ。其神乎見レ幾。

無餘裕。

麻布第三聯隊の占領せし水師營南西方の壘中、露兵の遺て去りたる物品堆積す、而かも敵彈の下ること頻りなるを以て、物品を聚むる者未だ多からず、予入りてレビッヱキーの戰術書一部、傳票一冊、軍隊手帖二冊、聖典一部を得。聖典の中に挿畫多し、而してアダム、エバのエデンの聖園を逐はるゝ處、一幅の裸體畫なり。携へ歸りて人に示すや、曰ふ「ナンダ露助の枕草紙ですか」と、予曰ふ、否、彼の聖典なり、然れども露兵にして彼の壘中にありて果して枕草紙を展べ見るが如き餘裕あらしめなば、彼レ遂に敗れざりしならんと。衆手を拍ちて大笑す。

日東畫伯菅丹陵。

畫伯村田丹陵、小平島、火石稜等に觀戰し、大小數幅を揮灑し、一詩を需む。其姓を問ふ、菅原なりと、卽ち筆に任せて贈りて曰く、

彈丸如レ雨小平島。劒氣横レ秋火石稜。此裏誰哉揮レ筆去。日東畫伯菅丹陵。

九泉欲喚柳宗元。

攻城砲兵司令部なる山嶺よりの遠望、宛かも一大パノラマを開展するに似たり、横道砲兵大尉、此處に登りて彼我の砲壘を寫し、一本を贈られ、且つ詩を題せんことを需む、卽ち曰く、

秋空立レ馬倚ニ天門一。百二興亡咫尺存。如レ許太親誰領得。九泉欲レ喚柳宗元。

附言、小生は例の如く健啖善眠致居り未だ一度も軍醫に厄介を懸けたる事無之候に付、御安心被下度候、將校兵卒には固より夫れ〴〵の職務に格勤致居り候へ共、小生は御承知の通リ何等の用事も無之候に付、唯每日々々各地を巡騎致候儘、頃日にては旅順口附

近は山徑、間道、畔途に至るまで大概承知するまでに相成り候、然れば第三軍管理部の將校は軍人の謙讓より小生の事を「先輩々々」と呼び做され候、馬も先づ人並ぐらゐには騎り得るに至り、既に今日も第三軍司令部より內外新聞通信員諸君子を招待し宴會を開かれ、諸將士と共に右宴に陪席致候折柄、興酣なる頃、砲聲雷の如く一時に轟き來り候に付、安原步兵大尉等と共に直ちに馬に飛び騎り出來得る丈ケの早足にて躍らし行き候處、約一里の上下する可なりの惡道を十二分間にて達し候、此く早速到着は致候へ共、我兵の早く既に一敵堡を奪取せし後にて、占領當時の壯觀を盡くす能はざりしは殘念に存候、乍然小生も此分にて餘リ調子づき候へば屹度失敗可致、病氣にて軍醫の厄介となるか、馬より落ちて怪我するか、敵の流丸にでも中るかの一に出づべくと存候に付、今より深く自から警戒可致候間、此義は聊か御放念被下度候、匆々拜具。

十月九日夜、時に彼我の銃聲斷續、支那婦人の砧聲斷續。

旅順口の水產。

十月十二日（水曜）。

謹啓秋冷の折柄　大日本水產會總裁殿下を初め奉り、幹事長閣下其他御一同愈、御殊勝に渡らせられ、益、會務に御勵精被下候段實以て感激に不堪候、却說戰後の施設に就ては朝野に於て各種の議論有之候へ共、歸する處兵を强くするの基は國を富ますに在りと云ふに結着致し、而して戰後最も有利にして而かも大に開拓せざべからざる事業は、黃海、オホーツク海、薩哈嗹、コマンドル諸島、滿洲內河の漁業に有之、或る一部社會の議論にてはオホーツク海と薩哈嗹との漁業のみにて四五年間に戰費を取り返すに足ると申す程に有之候、要するに外交社會にても戰後の有利事業は水產の經營に在りと申居り候、此の如く朝野一般の意向戰後の水產事業に傾注したる折柄に御座候へば、本會に於ても目下夫れ〴〵御準備中にて、各位御繁忙の儀恐察に餘り候上、目下新會堂の建築も定めて着々と進行中にて一入御多用の事と存候、然るに小生事會員諸君子より多年幹事に御推薦を辱うしながら何等の效蹟も無之候上、本年は歸省及び滿州丸の航海にて會務に從事するの機も少く、更に又旅順口攻圍軍に長く滯在致居り、本會有事の秋を空くせるは各位に對し深く御詫び申上候、尙當地方も早く既に引

揚げ歸京可致樣存居り候處、吾々素人が御互に考へ居り候より數十倍の難局に有之、小生も切角當地方に渡航したる以上は陷落を見屆け度と存候に付、隨て歸京の期も後るゝことゝ可相成候、本會に於ても定めて旅順口陷落表祝の御趣向も有之たるべく、國民全般が非常なる熱心を以て旅順口の陷落を待ち居るは、全く忠愛の情の溢るゝ所に出で、其熱心は實に同感に不堪候へ共、然りとて熱心の餘りに陷落の期日を餘り早く數へ居るも亦誤なりと存候、以上の如き狀況に有之候に付、小生の歸京も御豫想よりは自然後るゝことゝ御承知有之度候。

却說關東半島は三方海に面し候に付、定めて水產に富むことなるべしと存じ、先日來東海岸は龍王塘、西海岸は八隻船北海及び雙島灣まで參り候へ共、何分金錢上に慾目のなき支那人はジャンクを以て竊かに敵の爲めに通信を辨じたり、又は旅順口の敵壘へ食料、飲料等を密輸送したり、又は我軍艦の所在を密告などするものあるより、ジャンクを以て沿岸を航行する事は我軍より堅く禁止致しあり、隨て彼等は漁業を行ひ兼候に付、水產上の事を視察することは甚だ困難に有之、更に戰爭中の事とて支那人はソワ〳〵と致し居り纏りたる應答も不致候に付、別段何等の諸問も不致候間、コレと申して御通知申上候までの事も無之候、尤も我兵士にして監督の爲め乘組み居り候へば沿岸にて舟を浮べ漁業致す事も許可被致、又支那人は嚴禁を犯して密漁致候に付、折に觸れては漁獲物を見受け申候、卽ち今日まで小生の見受けたるものは鯛、エイ、石首魚、鱸、牛尾魚、鯽、鰆、鰈、大刀魚、羊角魚、鯖、大口魚（支那名、鱈にあらず全くの別魚なり）、鰆、文鰩魚、サヨリ、ニッヘ、海鰻、蟹、章魚、牡蠣、鮑魚、海鼠に有之候、大刀魚は御互に日本人は嗜まざれども、支那人は殊に嗜好し且つ廉價なるより到る處に多く漁獲するを見受け申候、尙又海鰻も澤山見受け申候、又淡水魚には鰻、鮎、ゴリ、鯨など見受け候、關東半島は岩石多く且つ草樹殊に少きことゝて溪水は細く且つ淺けれども、支那人は些だに淡水魚を捕らざるより怪大なる鰻容易に捕れ申候、先日南東海岸の大白山兵站司令官の許に參り候處、盤に鮎あり鰻ありゴリありたれば、何處にて得られたるやと問ひ申候處、幕舍前の淺き溪水にて捕りたる由答へられ、勤務後今夜はゴリを捕り明朝は日出前鮎を捕る故に一泊せられよとの義に付一泊致し候處、當夜は小生等と共にゴリを四合程捕り、翌朝は日出前迄に友釣りにて司令官のみ鮎五十八尾を獲られ候、鰻も亦大なるものは直ちに捕れ申候、淡水魚の多きこと以て知り得べく候、尙又此近海は鮑魚の產地に有之、所在の地名に鮑魚肚子と申す處有之候に付ても鮑魚の古來より關東半島沿岸に多かりしことゝ被存候、以上申上候通り沿岸の漁業は我が兵士監督の外には禁ぜられ候上、附近には數萬の我兵駐在致居り候に付、魚價は甚だ高からざるべからざる筈にて、慾に拔目なき支那人は此際を附ケ込みて魚價を益〻高からしむる筈に有之候へ共、而かも東京に於ける普通魚價よりも

低廉に有之候に付、近海に魚類の富めること推して知るべしと被存候、尚又沿岸の風物は我が房州の外海岸に類似致居り、彷彿として昨年の今日頃會務を以て下村錄事と同地方を巡回致し候事を追想致候。

別段に御通知申上候程の義も無之候に付、先は各位の起居御伺と旁、小生の無事健康を御知らせまでに一書差出候、尚終リに臨み、謹で　殿下を初め奉り各位の御健康を祝し奉り候、

匆々敬具。

寺内陸軍大臣書

（在旅順口方面の著者に寄せられたるもの）

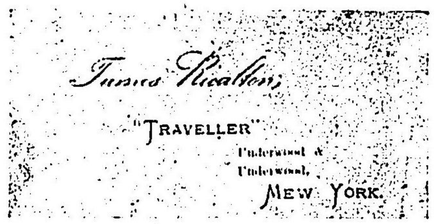
鳳凰山頂の西洋奇人。

十月十六日（日曜）晴。

旅順口方面に來てより三日目、九月二日先づ觀戰せんと鳳凰山に登つた、當時此の山頂の如くに敵の砲彈射道に直向に當つて居る處とては他に稀れであるが故に、誰レも居るまいと思つた。然るに圖らざりき、六十餘なる一個の西洋人が、秋の野花を手に持ちつゝ詩集を讀んで居る。大小の砲聲は間斷なく聞ゆる、予は大きな身體をもて傍近くに寄る、風はピュー〳〵と強く吹いて來る、然かし老人は玄の又玄と云ふ風で餘念なく讀んで居る。彼レに近いて聲を掛けた、すると老人は初めて人影の此處にあることに氣が付き、徐かに一禮して、何にか援助すべき事があるなれば御遠慮なく申されよと云いたるより、予は自分こそ西洋萬里より日本軍に來りたる老人に向ひ斯く云ふべきことであるのを、彼レが自分より年少なる日本人に向ひ、却て右樣の事を云ふとは、頗る逆であると思つた。然るに彼レの援助を遂に得なければならぬことが出來た、そは午餉にとて重燒麵包を嚙りたるに、口が痛く渴きたれば、老人はこれを察して、自から溪水を汲み來り、湯を沸かし、壓窄茶を削つて茶を煮、若年者の如くにマメ〳〵しく立ち働き、サー呑まれよとて快げに大碗一杯に注いで呉れた、此時の厚意と快

事とは今日までも敢て忘れられぬ。午餉の後、老人は當面の敵要塞を指點して詳かに說明し、且つ過ぐる十日許り前、暴風雨の夜、雷霹き雷光閃めける際、日露兩軍の大砲は連りに發し、七條の探照燈は半空より地下に落ち、光彈は續けさまに放ちて萬點の珠玉を散じ、墨よりも濃き眞の闇夜を輝らしたる景象を撮影したり、是に至て余が旅順口方面に來りたる目的も半バ以上は達したり、然かし希くは更に各種の奇景を撮影したき志望なりと云ひ了り、やがて予が英語の堅苦敷キより思ひ起したるにや、突然として基督と釋迦と孔子との敎義に何の區別ありや、共に善を勸め惡を斥くるにあらずやと問ひたれば、至極同感なりと答へけるに、老人は口の內にて黃禍論などを唱ふる者あるは何の事か、ッヲ、ッヲと呟く。さて此山の麓には多數の從軍外國新聞通信員が天幕を張つて滯在するに係らず、何故に此の老人のみは此の如き危險なる高山の頂に、而かも携帶天幕だに張らず、靑天井の下にあるやと訝り、其故を問ひたるに、老人には笑ひて、山麓の面々は、酒を飲み煙草を嗜み食物の好惡などを評し、其の言行好ましからざれば、此等の連中と同居するを欲せずと答へつゝ、傍の革囊（かばん）を指し、これはバーレーと申す者の所有物にて、彼レは桑港クロニクル新聞の通信員となり年齡は甫めて弱冠に滿ちたる若輩なれども、父母の家庭敎育が宜しかりしと見へて言語振リ殊に上品なれば、此者と共に此の山頂に同居するなり、然かし唯今は前方の戰線を視察に行きたり、今

に歸り來るならん、氣の合ひたる二人のみにて山頂に寢泊し、スハ戰鬪始まれりと云ふ時は直ちに飛び出して撮影すると答へたり。是に至て予は老人の寫眞家なることを悟り、何にか貴君の撮影せられたるものを示し呉れられよと賴みたるに、老人は然り〳〵と連呼しつゝ四十二枚の寫眞と寫眞覗き目鏡とを革囊より取り出し、コハ皆な余の撮影せしものなりとて、一々說明されたるが、印度の象狩の景あり、南米ブラジルの急湍の景あり、フィリッピン島に於ける米國遠征軍の戰鬪の景あり、義和團匪の亂に日米兩國兵の提携して進擊する景あり、



米國大統領ルースベルトが馬上にありてホヽ笑み居れるもあり、印度太守カーズン卿あり、同夫人あり、李鴻章あり、伊藤侯爵あり、其他最も多きは危險極まる激流の景、砲火の最も盛んなる戰鬪の景にして、寫眞の紙質の精良、藥料の好佳、光澤の燦爛、撮影の明瞭、特に位置の撰擇の巧妙なる、天晴レなる伎倆なる哉と嘆じ、覺えず貴君は寫眞家なるかと問ひたるに、老人は然り、然しながら寫眞家にはあらず、何んと申すべきか、先づ旅行家とでも申すべしとて、一束の書狀を指し、今はニヲー・ヨーク市の旅行雜誌通信員の名義にて日本政府より從軍を許可せられたれば、此の如き添書も紹介狀も全

リカルトン老人。

く不用となれりと答へ、予は其の書狀を示されたしと云ひたるに、老人はこれを示したり。一々開き見れば、米國の大統領、同陸軍大臣、印度大守カーズン卿、其他世界知名の人士數十名よりの添書將た紹介狀なり、曰く老人名はジェームス・リカルトン（James Bicalton）、嚴格なる禁酒家、禁煙家なり、米國ニューアーク市の自邸に私立博物館を所有す、二十五年間教育事業に從ひ好教師として知らる、天性旅行を好み、衣食を極めて節約し、依て以て教職の俸給を儲蓄し、夏冬の長休暇毎に必らず旅行す、エヂスン（電氣術大家）は此人の精力、冒險、沈勇、健康、旅行好キ、學識の用ふべきを識り、電燈點火用の竹の纖維を南米、日本、錫蘭、印度等に搜らしむ、而して此人百難を排して此等諸國の深山幽谷に入り、遂に錫蘭の山中にこれを發見して米國に持ち歸へる、世界の電燈此よりして廉價なる竹の纖維を用ひ點火するを得、其間印度のストレッジ河（Sutlej）の急湍を渡るに、土人をして山羊の皮を着せしめ、皮の隅を手足に縫ひ付け、さて一方のみ明けて此口より息氣を入れ、フワリと輕からしめ、かくて件の土人が皮を着て能く急湍を泳ぐに至るや、リカルドン氏は肩の上に乘つて彼岸に達したり、故にストレッジ河の上流を渡りたる唯一の白人なり、印度にて象狩に行き群象の怒號するや、寫眞器械を携えて傍の高き木に登り、上にありて群象怒號の狀態を撮影したり、アナカンダ（大蛇）の木に纏へる狀を撮影せん爲め、特に南米ブラジルの密林に入つて其の目的を達したり、フィリピン島の米國遠征軍に從ひ、カルーカンの戰鬪に一兵士の斃るゝや、早くも寫眞器械を傍に遺し置き、件の兵士の銃を取りて連りに敵を射擊したり、北淸義和團匪の戰役に從事したり、イスランド島の大噴火山へクラに登り、山下の穴居に同國有名の詩人にして隱者なるヨナッソンを訪ひたり、一種の車を創製し、其内に衣類、飲食類を備へ、自己の足にて運轉し、以てシベリアの曠野數千露里を旅行したり云々。予は書狀に依りて以上の事實を知り、實に世界稀有の奇人なることを悟り、奇の念想に打たれて暫し無言の儘、老人の顏を見詰め居りしに、其の生涯の奇なるのみか、風采の異なると、隱者の流を酌める所とに依り、ゆくりなく彼のヘンリー・ソーロー（米國の隱者、文豪）を想ひ出し、老人に向ひ、貴君はソーローの文を如何と思ふやと問ふた、すると老人はソーローの文とな、余は其の愛讀者なりと叫んだ。かく相互に談話しける間に、予は偶、靴の先にありたる一個の石塊を見、角閃岩が少しはあるナと獨語しけるに、老人は少し所か、角閃岩は此山に澤山にありと云ひぬ、予は此の老人なか〳〵の物識りなる哉と思ひ感服し居ける折柄、二十二三歲位の一年少洋人が山を登つて來た、老人は此の若者こそバーレー氏なりと紹介しぬ。やがてバーレー氏は予に向ひ、リカルトン老人は御覽の通り粗末なる被服を着け居らるれども、實は一方ならざる分限者である、見られよ老人のヅボンのポケットの膨れ居るは、錫函を入れ居るが爲め

なり、此の錫函の内には老人が世界旅行中に蒐集せし一個千圓も價する寶玉類を幾十個となく盛れりと云ひぬ。さて夜も既に十時後となり、敵の探照燈は此方を照らして滿地雪を欺く頃となりければ、老人もバーレー氏もイザ眠るべしとて其の寢に就きし狀を見るに、二人各、革囊と日本製の柳行李とを幷べて寢臺に代へ、着の身着の儘にて毛布（ブランケット）を被ぶり、更に頭より日本製の油紙を被ぶり、予に向ひグード、ナイト、スァーを呼びつゝスヤ〳〵と眠に就きぬ。

流石に予も二人の擧動に舌を捲いて驚きつゝ山を下り、第三軍司令部に歸つた。

第三軍司令部に歸へりたる後、外國從軍者の事を擔任せる山口通譯に向ひ、予はリカルトン老人の事を驚いて質問した。すると通譯には、彼は驚くべき上品なる人物にて、其の言行は誠に嘆服すべきものである、先日も第三軍管理部より老人の食料にとまでに活きたる鷄二羽を贈りたるに、老人には日本人の厚意は誠に感謝する、然かし活きたる動物を面り手づから殺して食ふに忍びぬ、且つ自分は身體極めて壯健なれば、寧ろ戰傷を負ひて疲弱せる人々に贈るに若かずとて、自から件の二鷄を周家屯なる第九師團野戰病院に携え行きて患者に贈つたのである、何んと今の世に得難き高尚なる人品ではありませぬか、先づ聖人と申して宜しくありませうと話された。予は是に於てか老人の愈〻奇とすべく、益〻畏敬すべきを悟つた。

以上の如くリカルトン老人は如何にも奇とすべく且つ畏敬すべき人品なれども、更に嘆服すべきは、萬里の旅行を何事とも思はず、風餐露宿を苦ともせず、雨虚雪暴を意に介せず、地球を股に懸けて氣安に此の世界を我家の如くに考へて居ることである。今回の戰後に日本人に最も要すべきは此の氣象である。此の氣象は實に植民的事業の本尊にして、日本人が世界に雄飛する原素である。然れば戰後の教育は實に野宿主義の養成にありと信ずる。然るに今の世には、吹けば飛ぶが如き輩が、肩を聳かし聲を枯らして、戰後の教育は志氣の養成にあり、大和魂の涵養にありと絶叫し、其の方法はと聞けば、ナンダ劔舞の奬勵である、慷慨なる事蹟の譚であると。此の如き如何にも女々しき感情的の手段を取るが故に、日本人は一時に憤激して事を果たす如き一氣呵成の勇氣はあれども、堅忍耐久、執着して大事を爲し遂ぐる恒性に缺乏して居るのである。戰後の日本社會には、リカルトン老人の行事の如きものを習はしむるを以て、其の主眼となすべしと信ずる。

さて予はリカルトン老人と愈〻親密となり、老人に紀念の爲め撮影を依頼すると、老人にはヲー、イエスと答へたれども、さて今日は風多ければ面白からず、風無き快晴の日を待つべしとて、兩三日の後、風無く快晴の朝に、約の如く第三軍司令部まで來りて撮影されたるものが卽ち此處に挿入する上部の寫眞である。此の寫眞に映りたる人物と動物とに就ても少しく因緣がある故に、左に說明する。

馬

名ヤ號（露西亞のヤの字が燒判で押してある故に名く）、南山の戰鬪にて我軍の獲たる露西亞馬。

犬

名ミシュカ（ミカエルの幼名）、雙臺溝（旅順口の北約三里）にて負傷せる露西亞の捕虜が日本人に懇篤に治療されたるを喜び、謝恩の紀念までに我軍に贈りたる露西亞犬なり。此犬は此の寫眞に見ゆる如く、善く日本人に馴れ居れども、偶〻我軍に露兵の捕虜の來るや歡びて之れを迎ふ、先日猶太人なる敵の捕虜の到りたる時も、ミシカは見るや否や喜び勇みて件の猶太人の胸に飛び付き、更に飛びて其頰を嘗めに嘗めたりと聞く、遂に舊主の恩を忘れざる憐むべき動物なる哉。

右森獸醫

犬ミシュカが當時貫通銃創を負ひ又た足に負傷し居たるを治療して全癒せしめ、此の如く愛らしきものとなし、且つ馬ヤ號を手入レしたる米國修業の獸醫（後、銃丸にて兩眼を打ち拔かれ盲目となる）。

左馬場騎兵中尉

馬場陸軍少將（第一旅團長）の令息、馬ヤ號は敵の遺して去りたるものとて、殊に見すぼらしく且つ弱かりしを手入レし、且つ調教して此の如く麗はしくしたる騎兵士官。

（右、鳳凰山（日露の戰場）。中央、攻城砲兵のある山。左、干大山（日露の戰場）。

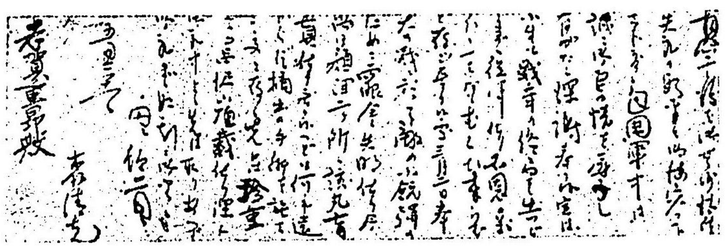
遠景

我が歩兵、砲兵、工兵の幕營地、軍用電信柱。軍用鐵道線路。高粱を刈りたる後の畑（莖未だ殘れり）。

森獸醫失明後の書面

（著者の常用馬ヤ號を治療せし人）

（後敵銃丸に兩眼を打ち拔かる）



風一日雨一夜。

十月十六日（日曜）晴。

第三軍管理部にて四十日間食卓を共にしたる年少の中嶋歩兵大尉が、最先の戰闘線なる第十五聯隊第十中隊長に轉任した。中嶋大尉は、宣戰以來の　詔敕を悉く手帳に寫し、閑ある毎に讀みて、獨り自ら感激の情に忍ばれて居た。赴任の前夜、是非とも此の手帳に一字を題して呉れよと所望した、そこで予は敢て辭せず、

大尉少年膽氣粗。又看忠厚意殊餘。應ノ知鐵馬長嘶夜。感泣挑ノ燈讀ニ詔書一

と書いた。大尉は詩を讀みて誠に感泣に堪へませぬと云ふた。赴任後、大尉には其の天幕の傍近に散亂せる敵の地雷導火線、銃劍、槊杖、砲彈、藥筴等を拾はしめ、これに一書面を添へ、今日しも伍長と兵とを遣はして第三軍管理部に贈り届けた。渡邊第三軍管理部長には、藥筴は十五珊半にて殊の外見事に且つ損所も無ければ、歸京後、應接間の花瓶にせられよとて、予に轉贈せられた。さて大尉の書面の末尾に『赴任後部下を集め　詔敕を解き聞かせ候處何れも感奮の樣子見受け候然かし慰勞の爲め何にか分配せんとするも羊羹一本のみなるには心淋しく存候』と書いてあつた。そこで予は菓子なりとも携へて大尉を慰めに行かんと、件の伍長と兵士とに其處に行くも何等の危險なきやと尋ね、且つ先日來の戰況を問ふた。すると二人が交も〳〵語るには、先日來は塹壕の外に一寸でも顔を出しまするとと、目の前にある敵は隙さず狙撃致しました、然れば三日間は將校兵卒共に誰人も大便を致さず、小便は身體を縮めましたる儘前にて致しましたが、目下は左樣の事はありませぬと答へた。予は、然らば小銃の丸は來るかと問ふと、時々來ます、然かし大概危險はありませぬと答へた。然らば明日行くべし、御前等は今晩此處に一泊するだらうから、明朝案内して呉れよと言ひたるに、二人は委細承知致しましたと答へた。

十月十七日（月曜）風雨。

今朝、周家屯の第九師團野戰病院に行つて横道砲兵大尉の後送を送つた。横道大尉は、勤務中、夜分過度に雨露に暴露したる結果、急性なる機關痲痺に冒され、身動きも出來ざるが故に本邦に後送さるゝのであるが、極めて懇篤なる人にて、予に度々地形の見取圖を寫して呉れたる者である。大尉に別辭を述べ了り、さて隣りに一將校が臥し居るより、これを慰問すると、松倉歩兵中尉にして、

即ち有名なる盤龍山敵砲臺を占領せし際の勇者である、殆んど二ヶ月前、此の敵砲臺を占領せし際、其隊の將校は、此の中尉と今井少尉とを除く外、悉く戰死し、さて中尉は左の腕の上に一度に四銃丸を被ふり、其の二丸は腕を貫通せしかば、青泥窪にて十九日間療養の後、戰死せし友達の仇を報いんと、再び劒に仗りて軍に上り、腕を捻つて機會を待つて居た。すると去る十三日の役に出陣の命を受けたれば、今井少尉と共に小躍りして出で戰ひたるに、一銃丸は飛び來り、少尉の頭腦を貫通して其場に斃し、馳せて中尉の左脇を貫きける刹那、一銃丸は又もや飛び來りて中尉の腹部に中りたるも、御守札に中つて肉に入らず、危き一命を助かり、かくて此の病院にて治療され居るのである。同僚と云ふ同僚は斃れたるに、獨り松倉中尉のみが御守札で助つたとは、誠に不思議の感がする。すると中尉は、銃丸の痕ある錦の御守袋を示して曰く、これは出陣の際、老父母が是非に持ち行けとて、母が態々袋までを縫つて呉れました故に、老父母の情に免じて身體に着けて來たので御座ります、然かしいづれも神社の御札のみでありますと。此く話し居る間に渡邊第三軍管理部長、後藤同副官も横道大尉を見送りに來り、且つ松倉中尉を慰めしに、中尉は今日は諸君子より面白い御話を聞き、イッか傷も癒つた樣な心地が致しますと喜んだ。折柄昨夕約束せし案内の伍長と兵士とが予を此處に尋ね來りたるより、諸君子に別を告げて野戰病院を出でた。

此處より二里許りの前方までは十七回往來した。然れば今日にては沿道の山川などは固より、何の邊の地點に赤楊が植はり、何の邊の地點に紫茱萸の花が咲いて居ると云ふことでも、誦んずる樣になつた。此の如くなれば、沿道に露營し居れる兵卒も、此の風の吹くのに又たアノ霜降り色の夏服を着て行く大きな人が馬に騎つて通るワイと云ふ樣な顏をして予を見て居る、否な此邊を春の空の如くに飛び舞へる燕、雲雀、頰白、四十雀までが「何用があるか、又たアノ人が通る、御苦勞なことだ」と冷笑して囀る樣に思へる。唯だ前度來と相違し居れるは、見渡す限りまでの高粱は全く刈り盡くして、一尺許りの莖のみを地に殘せると、車輪の大サある向日葵の花が半ば以上落ちて黃色の殊の外褪めたるなど、全體の風景が何んとなく冬の來襲を豫告することである。折柄各隊共に或は石を疊み、或は土を盛つて壁を立て、或は穴を穿ちて豁舍を作り、或はアンペラ蓆を連ねて小屋を建て、或は本邦よりの追送品の入れありたる叺を幾個となく解きて敷物とし、孰レも思ヒ〳〵に冬營の準備をして居る。それより愈〻行くと、風は益〻烈しく、予は寒氣を防がんと馬を躍らした、案内の二人は徒歩なれば、後レ〳〵となり、遂に見失つてしまつた。程經たる後、馬に溪水を飲ませつ二人を待つに、既に午後二時となり、飢を訴へたれば、鞍囊より重燒麵包を出し、馬背にて噛つて居ると、後から騎馬の人が、何處の上人かと思つたら君だつたかと叫めいた、振り返へり見ると

海軍陸戰重砲隊指揮官黑井海軍中佐なるより、予は先日海軍陸戰隊の天幕に宿泊せし際の歡待を謝しける折柄、二人は追ひ付いて來た。此邊より一里餘は全くの生路（しやうぬみち）であるより、二人の後に着いて行き、一の岡の上に登ると、峭絶なる椅子山の敵砲臺がヌッと面前に現はれた、敵砲臺の直ぐ前を度々經過したるが、さて敵砲臺が俄かに面前に現はれると、毎々の舊識とは云へ、危險極まる舊識にして、餘り善き心持チは致さぬ。然かし毎度は單騎であるが、今日は三人連レなれば、何んとなく氣が強く感じた。此岡より先一里弱は、四十日前、別の徑路に依て行つたことがあり、熟路のことゝて、二人に別れ、獨り山を上下し、碾盤溝南西高地なる第一師團司令部に達した。さて此日は風殊の外強く且つ寒く、最近の二個月間、雨とては二回の小降リの外無かりしとて、沿道には其初め絹漉シの如き沙塵が絶えず面を掠めて舞ひ、果ては猛りて礫までをも飛ばし、騎り居れる白馬も全くの灰色となり、ゆくりなく鮑明遠の『出自薊北一行、疾風銜レ塞起、沙礫自飛揚、牛馬縮如レ蝟』の妙趣を悟つた。

第一師團司令部に行くと、會、此處に來會したる滿洲軍總司令部參謀の岡田歩兵少佐には、第一師團參謀和田大尉の案内に依り、先月二十日第一聯隊（東京赤坂）の占領せし海鼠山（なまこやま）砲臺（寺兒溝西北高地）に檢分に行く所である。此の砲臺に行くのには未だ少しく危險ではあるが、實に好機なればとて、同行することゝ決した。すると和田參謀は岡田少佐と予とに向ひ、御

和田大尉

案内は致しますが、丸に中つても知りませぬと二回まで云はれる。少佐は知りませぬ丈ケでは困るぜと笑ひたる所、傍より筑紫砲兵中佐が一行を目送して、ソレでは御機嫌好うと叫びたる故、予は振り返つて、緣喜の惡いことを云ふではないかと笑つた。一岡丘に登ると、敵は目の前に群れ居る、案内の和田參謀は、此處は驅ケ足になさいと注意されたれば、少佐と予とは走つて下つた。麓には戰死せし兵士の墓が幾個もある、生き殘れる友達は敵の砲彈を瓶に代へて墓れ行く秋の殘リの花を綺麗に挿し、眞心盡クシの手向ケをして居る。和田參謀には、殊勝なものです、御覽の通リ、毎日々々誰レかゝが新しい花を代へて挿しますと云ふ。これを見聞きしたる予は、覺えず帽子を脫して一々墓を禮拜した。それより塹壕を堀つて兩側に土囊を高く積み累ねたる通路が長々と續いて居る、予が日本人は德用だ、背が低いから壕を堀ることも淺く、土囊を積むことも低くゝて濟むからと云ふと、和田參謀は、貴君見た樣な人許リだと壕を深く堀つた上に、横にも廣く堀らなければならぬから、一向德用でもありますまいと笑ふ。溪間に出づると、崖を壁にして建てたる天幕が見ゆる、第一師團歩兵第一旅團司令部がある、內に入つて旅團長馬場少將に謁すると、將軍には敵の彈藥函を火鉢とし、藥莢を灰吹キとして煙草を燻らしな

歩兵第一旅團司令部。馬場少將。

から草々の物語をせられ、切角此んな第一線まで御出掛になりましたから、何にか敵の遺て行きたる物にても紀念の爲め差上げませうと、十五珊半の彈丸を火鉢にせよとて贈られ、幸便あり次第、第三軍司令部まで屆けんと云はれた。

此時偶然予は、馬場少將の令息（騎兵中尉）と森獸醫と予との三人にて共に撮影したる寫眞をポケットに入れてありしことを思ひ出し、これを將軍に示すと、將軍には誠に善く撮影してあります、さて貴君の騎つて居らるゝ馬と悴の傍に居る犬とは如何なるものですと問はれしかば、予は精しく說明した、馬は南山の戰鬪に我軍の鹵獲したる敵のものである、犬は双臺溝に獲たる敵のものにてミシゥカと呼ぶのである、馬は敗戰後の遺テ物とて見る影もなき姿なりしを、御令息（騎兵中尉）と此の森獸醫とにて治療し調敎して此の如く麗はしくなつたのである、又た犬は貫通傷を負ひたる上、足にも怪我をして居つたのでありますが、此の獸醫が治療して全快し、今日にては日本人に馴れ、軍中にてミシゥカ々々々と呼ばれ、此の如く愛すべきものとなつたのである、然るにリカルトンと申す米國第一流の老寫眞家が、同國大統領、陸軍大臣等の添書を携へてニゥ！ヨークより戰地に來り、私と懇意になりましたる所、紀念の爲め天幕の最も多き處を遠景として私を撮影致しますと、御令息と森獸醫とはこれを聞かれ、私に向ひ件の分捕リ馬に乘られよ、犬のミシゥカも連れて行つて自分等も一所に

寫しますからと云はれたるより、私が得意となつて分捕リ馬に乘り、犬と共に三人にて此く一所に撮影したのでありますと云ふと、將軍には、左樣ですか、それは面白い事でした、悴は少さい時分より馬や犬やが大好キでありましたから、御一所に撮影して嘸かし愉快に感じたでありませうと云はれた、これを聞いて予は親の心は誰レも同じことであると思つた。やがて馬場將軍及び副官の津嶋大尉に別れ、更に此處よりは案內者として副官の是永少尉も加はり、四人にて行くと、又た敵前に來り、彼此の小銃の音が連りと聞える、敵味方共に狙ヒ撃チをなし居るのである。さて此處に至て少しく彈丸の事を說くが、元來我々素人（しろうと）は大砲の彈ほどに小銃の丸は恐れない、然かし少しすると、銃丸の方が砲彈よりも却て大に恐るべきことを知る樣になる、何となれば砲彈は大なるが故に、其の飛んで來るのを見て避けらるゝ餘間もあるし、又た中〳〵人に中るものではないが、銃丸はピゥーンと突然飛んで來るが故に、避ける餘間も何も無いからである。然しながら實際亂軍になると、銃丸は雨の如くに降り來るが故に、銃丸などには

戰中に病死
（第四四三頁の碑銘參照）

彈丸の禪理。

最早氣を止めず、單に砲彈のみに氣を止める樣になる、然れば此の如き大熱境に入れば、再び砲彈が恐しくなると云ふ。要するに其初め銃丸よりも砲彈を恐るゝは小乘なり、次に砲彈よりも銃丸を恐るゝは權大乘、最後に銃丸に氣を止めずして砲彈のみを恐るゝは大乘なり、而して予は昨今漸く小乘の域を脱し、僅かに權大乘の境に入りたるより、小銃の音が今聞ゆるも好い心持ちは致さぬ。然ればとて砲彈が來りたりて、無論恐ろしいには相違ない、現に先刻驅ケ足にて走り下りたる處にて、砲彈が音を鳴して頭上を飛び行きたる際、予は覺えず頭を縮めた、すると傍にある四五の兵士が、何んだ弱い者だと言ふ樣なる顏をして笑ひ居たるより、予は深く慚恥に堪へなかつた。それより海鼠山に登ると、歩兵第一聯隊が駐屯して居る、聯隊長寺田歩兵中佐を訪問したるに、自から朝鮮飴を切つて茶を供しつゝ懇切に物語りせられ、紀念の爲めにとて敵の水雷發射鑵を贈られた。此處より此隊の副官山崎大尉も一行に加はり、五人にて前進すると、死屍の臭氣が頻りと鼻を撲ち來る、卽ち此邊が最近に占領せし敵壘の部分である。此處に來りて斷腸の感に堪へないのは、予が旅順口地方に渡航せんとせし際、其の知人より此の物品を屆け呉れよと依托されたる山本少將が先月二十四日此處にて戰死されたることである。

海鼠山砲臺。
歩兵一聯隊本部。
山本少將の戰死。

驅レ馬休レ蹂血髑髏。欲下盛二何土一築中哀丘上。回レ頭海鼠山西路。皷角聲悲落木秋。虞元結。痊

戰死露將。名二哀丘。

山の外斜面には敵兵の死屍が遺つて居る、我兵が收めんとて顏を出せば、敵は何の分別もなく直ちに狙擊する、故に已むを得ず其儘に葬ふりもせず遺てゝあるのだ。先刻も馬場少將が、此樣に敵と鼻を衝合はして居ると、言語さへ判れば、御互に面白いことも言ひ交はしませうにと物語られたるが、此處に來つて、予は成程と悟つた。それより此の山脈の極まる處まで行くと、海軍觀測所がある、此の觀測所の望遠鏡に依り敵情を偵察すれば、敵壘は眼前に連りて『力窮塵轉急、圍厚突開難』の句を想ひ起さしめ、眼下には旅順口の市街開展し來り、市街を超えて海門には二隻の我が閉塞船が横はり、其傍に敵艦バーヤンが煤煙を吐きつゝ錨泊し、これを超えて我が軍艦の煙樓が絶え〳〵に見える。此の觀測所の望遠鏡は、掩蓋の下に深く蔽はれ、唯だ一個の小き穴を鑿ち、此穴に眼鏡を挿み、僅かに四方を望見し得る樣に裝置してある、而かも敵は眼前に居るを以て、眼鏡のピカ〳〵せるを認め、小銃もてこれを狙ひ、絶えず銃丸が落ち、先日も一敵丸は望遠鏡を毀ち、更に走つて觀測し居たる陸軍見習士官の額に中り、これを斃したることもありたるが、年少の中川海軍少尉が獨リで主宰して居る。予は如何に君國の爲め職務の爲めとは云

海鼠山の海軍觀測所。

へ、此の如き山上に海上勤務の人が獨リで居るかと思へば同感の情に堪へない。そこで携へ來りし日本酒一瓶とドロップス一箱とを少尉に贈つて山を下つた。下つて前路に返へると、予は先づ安心した、貴君等は銃丸に中つて死すれば名譽の戰死で、金鵄勳章をも賜はるが、私は犬死のみなれば宜しいけれども、これを聞きたる內地の人々は、マゴ〳〵して居つたから流丸にでも中つたのだろうと冷嘲を以て迎へらるゝ、一は賞讃、一は冷嘲、天地雲泥の相違だから、此處まで返つて胸が納まつたと云ふと、和田參謀は、詩か何にか吟じて一向ンナ殊勝な樣子は見えませなかつたぜと笑つた。

諸君子に別れ、一兵士に案內せられ、白銀山砲臺の上より出でたる月影を踏みつゝ隣リの山に向ふと、白露は衣を撲ちて玉の如く、雁の群は高く鳴き渡り、蟲の音は衰へて切れ〳〵なる處など、全くの秋の暮である、露華撲レ袖明如レ玉、月白白銀臺上秋の二句を得たるより、起承の二句を得んとしける折柄、案內の兵士が此の天幕が第十五聯隊第十中隊本部でありますと叫びたるより、內に入つて中隊長中島大尉を訪れた。中島大尉は喜ビの色を滿面に顯はし、先刻貴君の御出デになると申すことを承知致しましたから、何んぞ御馳走とでも思ひ、黃色の野菊を堀り來り、幸ひ敵彈の奇怪に割けたのがありましたる故、これに植ゑましたと、示されし花は誠に至情の籠り居りて一入の眺メを感じた。それより渡邊第三軍管理部長、同

歩兵第十五聯隊第十中隊本部。

副官後藤松平二大尉より依托されたるくさ〳〵の物品と予の携へ來りし麥酒、日本酒、ドロップスとを贈ると、大尉は諸君子の御厚情は感謝に餘リますと云ふ。それより大尉は此の麥酒を開き、杯を酌み交はしたるが、傍に熱に冒されたる一少尉が臥し居るより、予も例日の如くには大聲放論せず、やがて共に寢に就き、幕外に風の愈、猛けり狂ふをも知らで快く眠つた。

十月十八日（火曜）

午前二時頃と覺ゆ、予の頭と面とに上より水が頻りに落ちる、毛布の下よりは水が浸入し來りしより、覺えず眠を覺ますと、盆を覆へす如き大雨にして、雨潦が天幕の上より漏り、下より地に溢れたのである。此の天幕の內には、予を合せ十名の者が寢て居たるが、孰レも起きて雨潦の浸入口を禦いだ。然かし雨は益〻降りしきり、洪水の一時に來るが如き觀をなし、風も亦た猛り狂ひ、アワヤ天幕は雨と風とにて吹き飛ばされんとした。予は、何んだ美人の冷たき髮がチラ〳〵と顏に當る樣な心持ヂがするでは無いかと云ふと、ドット大笑ヒの聲となる。すると中島大尉は、此んな時には大きな聲で都々逸でも葉唄でも祭文節でも何んでも遣れと命令した。一軍曹は追分節を歌つた、一兵士は荒木又右衞門武勇談の祭文節を二齣語つた。すると先生にも何にか願ひ度いと予に向つた、そこで予は何にも隱シ藝は無きより、伊賀越の掛茶屋にて聞きたる荒木又右衞門の實話を致すべしとて、又右衞門が渡邊數馬の助太刀となり仇

討チする朝、件の掛茶屋にて一酌を命じ、代金を支拂ひ、イザ仇討チと立ち去りたる後、一町も行きて前の茶屋に戻り來り、先刻の勘定は一文丈ケ釣リ錢を取らずに行きたる故、今態、これを貰ひに來たと云ひたれば、茶屋の主人も客な人だと思つて一文渡した、すると數馬は又右衛門に向ひ、此際一文位のことを何故に客々せらるゝのかと問ふと、又右衛門は、然ればなり苟くも荒木又右衛門とまで呼ばれたる者が、仇討チの際に臨みて狼狽し、釣リ錢の勘定間違ヒをしたと歌はれては一代の名折レなりと思ひ、さては態、取り返へしに行きたるなりと答へた、此の如く死生の際に餘裕がありたるより、誰レも知る如く目出度仇を討ち、名を末代まで遺したのだ、諸君は近日中に友達の仇討チに進發する故に、予は此の茶屋にて聞きたる話を致すなりと云ふや、一同は面白いと叫び、熱病の少尉までが快げに莞爾として居つた。

かくて夜は明けたるが、雨は頻りに降り、風は蓬々として止まぬ。何にも調理することが出來ぬ故に、道明寺糒を食べて飢を凌いだ。予は五十日間に二回の小雨の外無かつたのに、何故に此く雨が降るだらうと云ふと、中島大尉は文人（文人とは予が軍中にありて常に自から稱ふる語）が此樣な戰鬪線の天幕に來て宿泊されたるより、天も驚いて大雨を降らしたのだと笑つた。午後三時頃、雨は暫く止み、風は少しく收まりたれば、昨夜來の歡待を謝して此處を去り、山道を廻ぐりて第一師團司令部に到り、昨日砲臺を案内されたる和田參謀に謝言せんと、參謀部の天幕に行きたるに、天幕は昨夜の風雨にて吹き飛ばされ、諸參謀と共に別の處に穴居して居る。穴居に入ると、蠟燭を點じて書類を見て居るより、予は大塔宮の土の牢屋に入つた樣ですネーと云ふと、諸參謀には、先刻も貴君の噂をして居りました、アンナ山頂に宿泊されたる故に、大雨が俄かに降つたのだと云ひしかば、予は其處の中隊長中島大尉も左樣云ひましたと答へると、モー貴君は文人は卒業しましたネーと笑はれた。第一師團司令部を辭して獨り昨日の來路を取り、一岡上に椅子山の敵砲臺を見ると、予は覺えず馬に鞭ちて逸チ早く下つた。昨日は三人で此岡を通りたる故に、若し敵が狙擊するものとすれば、人の群れ居る處を目掛けて發砲する故に、危險の度より云ふと單數1である、然るに今日は一人故に危險の度は昨日に比ぶれば僅かに1/3である、公算（プロバビリチー）の理論より云へば、此の如きであるが、さて今日は一人故に却て危險に思ふなどゝは、人間と云ふものは實に濟度し難きまでに弱い者なりと自から憐レに考へた。

昨日と同じ道ではあるが、風は北よりヒュー〳〵と吹き來つて一層寒く、軍用輕氣球までが道の傍に天曝（あさづけ）シとなつて、誠に寒むさうに見える。雨の餘リ、道路が如何にも泥濘を極め居れば、路側の露營にて別に良い道はないかと問ふと、アチラの道の方が惡うゴスと答へた、予は有難う、御前は上方の者だなと云ふと、笑つてソードスと答へた。沿道の舍營にては、雨が晴

れたりとて、孰レも競つて昨夜來の濡メリ物を乾し居れば、赤毛布（軍隊にては赤毛布のみを用ふ）は屋根にも垣にも土塀にも木の枝にも懸つて、宛から時ならぬ桃花の滿開を眺むるが如くであつた。第三軍司令部に歸ると、渡邊管理部長は、御寒むかつたでありませう、雜炊を作つて置きましたから、緩くり食べて御暖まりなさいと云はれた。雜炊にて腹を暖め、快く寢に就き、一時頃となるや、起き玉へ々々々、逆襲々々、敵が隣リ村まで攻めて來たと大喝する者があるより、誰レかと思ふと、攻城砲兵の山頂より下り來りし佐藤砲兵中佐である。佐藤中佐は先日來、拔群の働をなし、今夕は乃木軍司令官の許にて酒を賜はりたるが、予の戰後の敎育論に殊の外贊成して居る人である。予は逆襲などする道理が無いとて、復た眠ると、中佐はソレでは君の腹を枕に假りて此處で寐て行くとて、予の腹を枕とし、予とT形をなして、長靴の儘雷の如き鼾聲を揚げて眠つた。軍人社會と云ふ者は、總じて此の如く淡泊で磊落で快活なる者である。然れば予は快く此の五十日間を暮らし、滯在の期限を一度ならず二度までも延べたるは偶然では無い。近況を諸友人に報道せんまでに此文を章した。

此文起草中、十五珊半の敵彈落下して、目前の一白馬を兩斷し、一黑馬を殺し、一支那苦力に致命傷を負はせ候、自然小生には馬の肉一片と骨三片の飛び來り、肉の椅子に附着せし丈ケにて、何等の怪我も無之候。

佳兒（KARI XIII）敗後正百九十五年の音樂

〔第二回總攻擊〕。

十月二十六日（水曜）晴。

謹啓、今日は總攻擊開始の由にて第三軍司令官乃木大將初め鮫島中將、參謀長伊地知少將及び第三軍幕僚には孰レも早天より攻城砲兵司令部の山頂へ出陣に相成候、然るに小生は今朝關東報記事飜譯の破片を拾ひ讀み致居候處、偶然にも面白き一事を發見致候、ソハ我が第一旅團第三聯隊が去月二十日奮戰して奪取せし水師營南方高地なる敵壘の內（前頂『戰後の月』は此の戰役なり）にて去る五日小生の拾ひ得たる敵の一傳票は、關東報の所謂勇者フロウル中尉の所有致したるものに有之候、卽ち小生の得たる傳票には每ページにフロウル中尉と記名致しあり候處、關東報に依れば、同中尉は部下九十五名と共に一個のカポニエール堡外岸側防寫窖を死守し、九十五人中九十二人まで死傷し、殘リ僅かに三人となるや、自から銃を取りて敵兵（日本兵）を射擊し、其の目覺ましかりし狀は味方に鳴り渡りて齊しく激賞する所なりとて長文の記事有之候、敵ながらも天晴なる擧動なり、流石に日本兵の敵とするに足るべき好男子なる哉と思ひ〳〵などして遂に午後と相成り候、然るに砲聲は愈烈しくなり候

關東報の勇者フロウル中尉。

大砲戰。

へば、渡邊第三軍管理部長には小生を見、丁度好き頃であります御同行しては如何ですかと申され候に付、小生にも早速同意し、連騎して諸將軍の出陣し居らるゝ處へ登り候處、戰鬪方さに酣にして、彼我八十の砲臺、砲壘、肩墻、砲兵陣地より各〻八九種の砲を競ひ放ち、硝煙は蒸して長天の雲と連り、偶〻北西風の吹き來りて此の蒸す如き硝煙の一部を拂ふ折柄、敵軍艦より放ちたる十二インチ砲の一巨彈は忽ち落ちて半空に縱横一町餘の大十字形を劃する處などは誠に絶代の偉觀に有之候、既にして敵砲火の漸く沈默するや、味方は今より突擊せんとする義に候へば、之に中る恐レあるを以て味方の砲火も暫く中止致候に付、硝煙は半ば散じ去りたる折柄、一將校（中尉か大尉なるべし）が落ちなんとする夕陽に拔劍閃めかせ、之に連れて大呼突擊する一隊は味方の歩兵に有之、此隊のアハヤ平行壕より躍り出でゝ右方より二龍山敵砲臺の外壘に攀ぢ入らんとする刹那、又もや味方歩兵の別隊は一將校の拔劍に連れて他の平行壕より躍り出で、左方より此の敵壘に攀ぢ入り、須臾にして敵壘の右方と左方とに旭日の一大旗高く翻飜すると見る間に、萬雷一聲、壘より黑き煙を四五丈も高く揚げたるは敵の地雷の爆發に有之候、敵は此の一壘の我が歩兵に奪はれたりと見るや、此の地雷と共に各陣地より又もや一齊に砲火を開きて我兵を瞰射し、我が陣地よりも之に應じて一齊砲火を開き候故、小生等の眼下は見る〳〵淼茫たる硝煙の海となり、流石に老鐵山のみは高峯頂なりとて此の硝煙の海の上より島の如くに現はれ、依然其の面白き皺法（しわのよりかた）を顯示致居りたるは復たと得難き畫趣にも有之候へば、若し畫を描く事が出來たるなれば何卒して此境涯を寫し置き度ものなりしと今に殘懷に存候、硝煙は其初メこそ砲彈が堅き岩層に中れば淡き白煙を吐き、軟き岩層に中れば土砂を捲きて黑黃き煙を揚げ候へ共、此の如く長天の雲と關東半島兩側の海水とに連り一望一色と相成りて候ては、唯だ音響のみに依て彈丸の何種たるを識別するまでに有之候、卽ちシュー（schüüüü、子音を連ね更に母音を連ねざれば全く砲音を寫すべからず、以下皆な然り、我兄幸に小生が殊更に奇なる綴字を以てすると思ふこと勿れ）と來るは全彈なり、其のポァーン（pum）と大に震動して地に落ちたるは爆發せしものなり、プスン（psn）と地に落ちたるは爆發せざるものなり、プーン（poon）と空中を鳴り來るものは速力の減弱せるものなり、ピューン（pûne）と鳴るものは彈丸破片の縱斷面的卽ち强く來るものなり、ヒューン（hyûn）と鳴るものは彈丸破片の横斷面的卽ち弱く來るものなり、キュ〳〵〳〵（que que quee quee）と來るは彈の被套の飛ぶなり、ヂドーン・ヒュー（jidōne hiū）と響くは榴散彈にあらずんば臼砲の彈なり、デューン（dûne）とするは十二珊の海軍砲なり、ドゥー（dūūūū）と長く太きは海軍砲なり、ドゥーン、ドゥーン、ドゥーンと（dōng-dōng-dōng）と大地に震ふは二十八珊砲を放射せるなり、ヴュー（vûe）と聲するは砲彈を放射して後其の音響が後方の山角に撞擊して返

大世界第一の音樂。

發するものなり、カッサ〳〵〳〵（kassa kassa kassa）とするは彈の銅帶の一部脱したるが爲めに空氣の此の部分に衝突して發するものなり、トン〳〵〳〵とするは遠き小銃なり、パッチ〳〵〳〵（putchi putchi putchi）とするは近き小銃なり、プン（pun）と飛ぶは銃丸の眼前に來るなり、世間何物の音響か能く大、壯、偉、快なること此の音樂に比ぶものあらんやと存候、瑞典（スウエー）の佳兒（カル）第十二世は御承知の通り世界隨一の武將に有之、年少初めて戰陣に臨むや、砲聲を聞きて「是れ我が無上の音樂なり」と絶叫したりとは何の歴史にも記載有之候處、流石の武將も露西亞のピョートル大帝の戰畧には數歩を輸し、ボルタワの役に大敗し、更にドン哥薩克（コサック）の首長マゼッパと結托してピョートル大帝を圖らんとせしも、マゼッパは露將メンシコフの爲めに破られ、自ら毒を仰ぎて死したるは千七百九年十月下旬に有之、さしもの佳兒（カル）王も復たと盛り返へすべき術を失ひ、其の覇業は茲に敗亡したる義に有之候、既にして佳兒（カル）王は那威（ノルウエー）と戰ひ、フレドリクシャール（軍中には參考書無き爲め記憶が誤まれるやも計られず、我兄之を諒せよ）の要塞を攻圍中、平行壕の内に在りて双眼鏡に依り敵軍を觀察せし際、銃丸に中りて未死の英魂を埋めたる義に有之候、王死してより瑞典は復た振はず、爾來バルチック海沿岸の地を露西亞に割き、割きに割きて遂に芬蘭（フインランド）までをも失ひ、今日となりては露國に對し一矢を酬ひんとする方策も無く、空しく無限の怨を呑み居ける折柄、歐羅巴露西亞に對する其の地

理的位置の恰も亞細亞露西亞に對する其の地理的位置と同一なる日本と云へる一國が、遙かに極東より起りて瑞典が終天の敵と戰ひ、之を打ち破りて瑞典の爲めに一矢にあらず百矢までをも酬ひ、而も佳兒の露西亞に全敗し、正百九十五年の紀念日に當り、大、壯、偉、快なる音樂を奏し、旅順口の要塞、平行壕の內より躍り出でゝ能く露西亞の一壘を奪取したりと聞かしめば、フレドリクシャール要塞の平行壕より喚び起す佳兒の魂、彼レ顏を破りて果して何をか言はんとするか、乃木第三軍司令官には今日の勝利を喜び、攻城砲兵司令官豐島少將の手を握り、今日は二重露苦日なりと呼ばれ候へ共、佳兒を地下より喚び起せば、亦た我が豐島將軍の手を握り、天上地下未だ嘗て聞かざる妙音樂なる哉と絕叫可致、佳兒の志も百九十五年目に完く成就したる義に有之、玆に障道の因緣業累を解脫して大歡喜の究竟に入ること〻存候、是より先き小生には支那人の珍しくも新鮮なる尺餘の赤鯛數尾を持ち來るを見てこれを購ひ候に付、今日の戰鬪に殊功ありし面々に聊か心祝ヒまで致さんと存じ、先づ豐島將軍及び攻城砲兵司令部の將校に宛て「御目出度候に付鯛差出候、炊事當番にまで屆け置き候」と書き殘して山を下り、馬を飛ばして今日の突擊に有効なる迫擊砲を發明せし第三軍攻城工兵廠長今澤工兵中佐（三河の煙火を應用して突擊に有効なる一新砲を發明せし同鄕人）を訪ひて鯛を贈り、更に又今日の役に殊功ありし火石岑子東方高地なる海軍陸戰隊に至りても相贈り

申候處、同隊の指揮官黑井海軍中佐には、山に入りてより七十日間新鮮の魚類とては味ひたることなきに、今日は戰には勝利を得るし、其上に鯛の刺身と潮煮とに有り付けるとは何たる愉快ぞやとて、頻りに小生を引き止められ候へ共、既に四方の山々は紫と染まり暮色蒼然として至る頃なりしを以て、歸途を急ぎたる儘、强ひて辭し候處、然らば麥酒にても一杯傾くべしとの事に付き、小生は指揮官の風雅の士たることを知るが故に、且つ杯を擧げ且つ左の一絕を示めし、餘は後日を期して此山を下り、一直ちに第三軍司令部に歸り、不取敢此書を草して我兄に御報知申上候、匆々拜具。

由來窮達豈無レ時。　世事元知一局棊。
二百年來千里外。　擧レ杯遙酹好佳兒。

一代の名文。

十月三十日（旨曜）晴。

海軍陸戰重砲隊の砲撃。

『目標P砲臺、榴彈込メー、四度、三番砲、三番砲打テー、デューン、五十米突近シ、四度半、四番砲、四番砲打テー、デューン、命中、萬歳』と午前より打ち續け居たるは海軍陸戰重砲隊である。陸軍の砲兵も亦た同じく午前より打ち續け居たるより、平面にして食卓の如くなりしP砲臺の頂斜面も鋸の齒の如くにギザ〳〵となつた。すると黒井海軍陸戰隊指揮官より『各砲豫定丈ヶ打つたら休憩』の號令が出で、三十分間休憩した。砲の傍なる兵曹長が予を見て、モー十八九年前にもなりますか、貴君とフィジイの喰人島へ御同航致しました頃、貴君は失體ながら日影の唐黍見た樣な御方でありましたと云ふと、傍の一將校が其頃こそ痩せて居つて本當の文人であつたろう（軍中にて予が自分の事を文人文人と稱へるより、昵懇の人は予を文人と呼ぶのである）と云ひたるより、予は本當の文人とは何の事だと云ひ未だ了らざるに、P砲臺の内にてカタ〳〵〳〵と敵の機關砲の音が聞ゑた、予は又た女性的なる音がする哩、機關砲の音は陰險だと云ふと、件の將校は、眞に女性的だ、ソー云ふウマイ形容をするから文人だと云ひたれば、予はそれだから本當の文人では無いかと答へた。さて敵の機關砲が砲臺の内にて發せらるゝ時は、必らず味方の歩兵が突擊する時であるが、果して味方の歩兵は、砲臺の塹壕の内に飛び入つた、三個の地雷は塹壕の傍より爆發し、霹靂三聲、黒煙は土石を捲きて半空に逆上した。地雷の煙の晴レ間より北東風が喇叭の音と萬歳の聲とを送つて來た、旭の旗も飜つた、味方は正しくP砲臺（一戸砲臺）を占領した。

一戸砲臺の占領。

P砲臺の占領は了つたるより、馬を飛ばして第三軍司令部に歸ると、折柄今朝より催ふしたる時雨は一時に下り、パラ〳〵と馬の蹄を拂ひ來つて、坐ろに霰たばしる那須の篠原の豪懐を悟つた。夜に入ると、各方面の戰報が集つた。今日第九師團の一隊が敵砲臺へ突擊の際、少年士官の中には、高サ十二尺もある支那圍壁の上に登り、雨よりも劇しき銃丸と噴火山の潰裂するが如き爆樂との間に立ち、劒刄を振つて味方の突進を指揮して居つた、忽ち敵の巨彈落ち、煙は天に向つて上つた、二三分間の後、風の吹き來つて煙を拂へば、此等の年少士官は何處にか去りしぞ、影だにも見えずなつたとの悲壯なる事實もあつた。

第九師團の悲劇。

すると渡邊第三軍管理部長には予を見て、松倉が又負傷したソーです、愉快な男ですナと云はれた。此の松倉（清次郎）と云ふは、年少なる歩兵中尉にして、八月二十二日の戰鬪に隊の將校は、此の中尉と今井少尉の外悉く戰死し、而かも中尉は、四個所の傷を負ひ、傷の少しく癒ゆるや、同じく傷の少しく癒えたる今井少尉と共に九月十三日の戰鬪に出で、共に戰友の仇を報ひんと猛進中、一九

三回負傷せし中尉。

飛び來り少尉の頭腦を貫きて立ろに斃し、更に飛んで此の中尉の左膊を貫き、更に一個所の傷を負はせたのである。予が去る十九日、渡邊管理部長と共に周家屯なる第九師團の野戰病院に見舞に行つた時、恰かも中尉が此の二回目の傷を治療されて居つた、予等を見て、十日か十五日經ると傷も癒りますから、今井少尉の仇打ちに出掛ます、中尉だの少尉などが死なゝければ戰は勝てるものではありませぬから、家には一回も手紙を遣りませぬ、それで家でも私が全く死んだと思ひ居ると見えまして此頃は手紙も追送品も著きませぬと、兩度の傷を蚊にでも刺された樣なる風に見做して、雲を衝くが如き氣焔を發して居つたが、今日の戰鬪に又もや猛進して傷き、前後三たび負傷して遂に屈せざるとは何たる快男子ぞやと、管理部長と共に嘆賞した。かくて當日の戰況を色々物語りして居ると、石本通譯官（清語）が歸つて來て、私の弟も負傷致しました、東京の明治學院の學生で、一年志願兵の少尉となり、在學中に今回の戰役に召集に應じたのであります、今日の戰鬪に左方なる白銀山の敵砲臺より雨霰の如き彈丸を浴びせられ、同僚は盡く戰死し、從卒は二名共に斃れ、自分も亦た左の手に丸を被むるや、二の丸は左の腕に中り、三の丸は左の脚に中り、四の丸は左の首側より肩を貫き、身體の左半分は利かずなりたれば、今はこれまでなりと身體の右半分を運び、右の脚一本を引き擦りに引き擦つて東鷄冠山北砲臺の塹壕に登り、ポケットより國旗を引き出さんとしける刹那、

石本少尉の書キ置キ。一代の名文。

倒れて溪の底に顛げ落ち、前後不覺となり居る所を發見せられ、先刻龍頭なる第十一師團野戰病院に收容されましたが、四ヶ所と申す重傷なれば、生命は如何か計られませぬ、然かし非常に元氣で居りましたと云ひたれば、我も人も天晴レなりと感激して聞いて居つた。すると通譯官には、實は弟は昨夜出戰前に私に此の樣なる手紙を送りましたと讀み下した、

御送附の防水マント確に有難く頂戴仕り候愈明日は攻擊にて當中隊は第一線東鷄冠山へ突擊仕り先登第一の名を殘すべく（何等の豪快）假令へ戰死するも決して名を汚すが如き事なし御安心あれ

（何等の悲壯）小子の行李中には蓋の右のカクシに金子五圓及過日の望遠鏡は右の方に有之候間兄上御使用被下度

（何等の用意）尙ほ行李中には靴下、ハンケチ、シャツ、手袋等有之候間御使用を乞ふ（何等の縝密、而かも又た兄弟の情掬すべきを見る）尙小子の死體は火葬して後（出來得れば）自分の國旗にて遺骨を包み東京へ御送りを乞ふ（何等の決心、何等の悲慨、他人をして覺えず涙を掩はしむ、況んや其の骨肉たる兄君の之れを讀むをや）其他は皆過日申上置候如くに御座候兄上より御送のマントは行李の上にあり先は最後の御願迄（餘音嫋々）

佐々木君にもよろしく願ひ候敬具

十月二十九日

兄上様

愚弟　權　四　郎

（文中の批點と〔　〕中の批評とは予の加へたるものに係る）

と、列座の人々は感激の餘り一言隻語だに發せずに聞いて居つた、予も亦た非常に感激した。然かし予は先日『漢文と西洋文』と題したるものを我兄に寄せ、漢文將た日本文と西洋文との優劣長短を說く勿れ、凡そ一代の名文は生死の間に臨み感激の餘に發したるものより成る、見よ現代の所謂文士の推敲せしものよりは、軍中にある尋常兵卒の手紙の方が人を動かす點に於て遙かに優るものあるにあらずやと論じたるが、果して此の石本少尉の文は、鉛筆にて走り書きせるものに過ぎずと雖も、讀む者、聞く者をして感極つて眞に涙を掩はしめ、神韻縹緲、正に一代の名文となすに足るではないか。試みに英語に直譯して見よ、

Dear Brother;

Duly received the water-proof cloak you sent me with many thanks. At last we shall make a general attack tomorrow, and our company will rush against the East Cock's comb Hill as the first line, so to make me keep back the honour of the first charger. Though may be killed, be easy that I will never dishonour my name. In the rightside pocket of the lid of my trunk you will find five yen in cash and the field-glass you sent me other day; these your dear brother may make use of. Also you may use my stockings, handkerchiefs, gloves, etc. in the trunk.

Besides I ask you to cremmate my corpse if possible, and send the bones over to Tokyo wrapping them with the national flag I was carrying. As to the other things please do that I had told you before. The cloak that you dear brother sent me is on the trunk. Adieu so much for the last favour in my life.

Please give my best regards to Mr. Sasaki.

Your humble (loving) Brother,

Gonshiro.

以上は全くの直譯なり、愚弟と云ふは西洋の文想の中に無き所なれば、唯だこれのみには括弧を附して loving と云ふ原文中に無き一字を加へたるが、此字丈ケを除きては原文と一字一句だも增減せぬ。然しながら此の英文を讀みて涙を掩はない西洋人とては無いと信ずる、少くとも石本少尉を敎授し居たる明治學院の西洋敎師は讀みて必らず涙を掩ふに相違ない。果して然らば漢文將た日本文と西洋文との優劣を說き長短を比較するが如きは全くの末なり、

況んや現代の所謂文士が嘵々と文章の巧拙を論ずるが如きは末の末なり、神來の文は自然より來り、至誠より發し、精神より出づ。皆川淇園曰く、蓋し冥想恍惚の間、天地位し、萬物備はる、感に隨て現はれ、念に隨て變ず、此の感念を主るもの即ち所謂精神なり、字々此境を離れず、句々此界に違はず、念々相續き、以て之を執持し、以て之を鼓盪して歌詩と爲る、恍として象あり、惚として理あり、是に於てか之れを詠じて聽くべく、之を諷して發すべし、而して拙きものは一々之に反すと。清の袁隨園も亦た曰く、落筆に古人無くして精神始めて出づと（不二覓レ書看一覓レ劍看の境涯にあれば、我兄幸に參考の粗雜なるを咎むる勿れ）。眞に然り、自然、至誠、精神より湧くにあらずんば、如何ぞ一代の名文を作すを得べけんや。

石本通譯官には令弟の手紙を讀むに當り、通譯官自身にも神來して感激し、諸人も亦た感激の餘りに無言なる儘、通譯官は覺えず面を伏して揚げなかつた。そこで予は筆を走らして長古一篇を賦し、

半體行。

半　體　行。

不二先登一則戰死。袖中旭旗麗レ於レ綺。恰好吾屍以レ此裹。阿兄裹去寄二阿爺一。且說不レ負二阿爺子一。須臾殺氣震レ天來。縱レ火三十七礮臺。大彈小彈亂如レ霰。硝煙漲レ空蔽二萬雷一。一丸奪二左手一。二丸傷二左肘一。三丸貫二左脚一。四丸中二左首一。體左悉傷氣彌奮。滿腔熱血迸二體右一。隻手怒振レ刄。隻脚蹀レ血進。半體踰レ屍登。先登飜レ旗以二隻腕一。吁嗟先登第一聊以報二　天皇一。步兵少尉臣石本權四郎。」

卷紙に大書すると、列坐の四將校は聲を和して朗吟した、聽き居りし八九名の將校には愉快々々と叫びたる者もある、チェーストーと薩摩音を發したる者もある、ブラヴォーと佛蘭西語を揚げたる者もある。すると石本通譯には面を揚げて、これでモー滿足致しました、ア、不レ負二阿爺子一々々々々々と大聲にて連りに朗吟して居つた。

軍中の送別。

十一月二日（水曜）

柳樹房の一支那屋に久しく同宿せるは、大本營の鮫島中將、筑紫砲兵中佐、大村歩兵少佐、滿洲軍總司令部參謀の岡田歩兵少佐、金州軍政官の齋藤歩兵少佐と予との六名である。然るに大本營の大村少佐と滿洲軍總司令部參謀の岡田少佐とは歸任するゝことゝなりたるより、何とか送別の意を表しては如何との議が同宿者の間に起つた。然し軍中にありて別段何等の催シとても致し難ければ、一同にて新舊の戰場廻りをしたるなれば、研究の一端ともなり、且つは趣味も多かるべしとの說に歸著した。鮫島將軍と齋藤軍政官とは、他に公務もあれば、殘リ四人にて第三軍司令部を出でた。彈藥縱列の宿營地を過ぐると、小き溪水が涓々として流れ、六七株の楊柳が程好く黃葉して其間に支那人の村落がある、劉家屯である、今秋は戰亂の餘に係らず、此の地方の高粱は例年になき豐作にて、村民はいづれも頻りと高粱酒を釀し居るより、古句の『遠愛柳林霜後色、一如春至欲黃時』と、杜詩の『裏年催釀黍』の眞境眞趣を悟らしむる。此處は米國現代の文豪ケン

劉家屯。

ナン氏が一外國通信員と共に滯在する村なるより、予は

軍無二私掠一足二鷄豚一。釀レ黍酒旗高掛レ門。黃葉滿坡家八九。劍南夫子讀書村

と口吟すると、筑紫中佐は中々格調が佳いと云ふ。それより架橋縱列の宿營地を過ぐると、明日の天長節の爲めにとて、兵士は支那松の葉に紅の蔦を纏ひてアーチを作つて居る。此處を過ぐるや、兩山が俄かに迫り來り、右側の片麻岩は、左側の硅岩と相接せんとして、其間に一線の徑路を通じ、左側なる山頂には、一大巖の落ちんとして落ちず我が面前に壓迫せんとする處は、長崎途上の『鯖腐ラシ岩』に善く似て居り、蘿葛は錦を染めて右側の峭壁を彩れるより、大村少佐は仙境なり、僧五岳の畫を見る樣だと叫ぶ、予は戰況視察にあらずして仙境視察なりと笑ふ。分水嶺を超えて安子嶺に登ると、當面には劍山、歪頭山、右には凹字形山、左には遠く旅順口を望み、過去、現在、未來の三戰場は一眸の中に收まつた、すると中佐は、

羊腸搜レ路入二青空一。處處山村木葉紅。安子嶺頭停レ馬看。旅順口是夕陽中

と口吟したるより、予は結句が少しく平仄に違ふが、詩三百篇、一以蔽レ之、曰思無レ邪で、實際實景だから却て妙だと評した。此處には敵の散兵壕も肩墻も未だ其儘に殘り、彈丸と土嚢とは處々に散亂し、白びたる敵の屍骨は其間に點々し、時に殘柳もあれば、明詩の『黃雲落

安子嶺。

日枯骨白、砂礫慘憺愁三行人一、行人來折戰場柳、下レ馬坐望居庸口』の居庸を旅順に改むれば、眼前の景趣を全く言ひ盡くしたるものなりと思つた。さて安子嶺の役は、我軍の最も苦戰、劇戰、奮戰したるものにて、當時敵兵は時々刻々に其の威力範圍を擴大し來り、我レは益〻壓迫を受けんとするや、第一師團參謀鈴木少佐は、慨然として何んと往日南山の戰に我レの爲したる所を擧げて今日敵に爲さしめ、敵の取りたる所を以て我レ今日取らんとするかと叫ぶや、列座の面々は敵の爲す事は我レ爲し能はざる事あらんやと、一齊に起ち上り、遂に苦戰、劇戰、奮戰して敵を此の一帶地方より擊退し、旅順口要塞內に驅逐して、大局の運命を判決すべき機會を成就したのである。予は我軍の南山にて捕獲せし露西亞馬（露字ロの燒印あるを以て日號と呼ぶ）にて今日此處に來り、我軍の大勝せし戰跡を騎り廻ることなれば、更に一入の愉快を感じた。中佐には、此の附近の戰鬪の劇烈なりしことを說き、且つ此時彼我の隊は鼻を衝き合はすまでに接近し來り、兩方共に一寸にても頭を出すと狙擊さるゝ故に、共に壕內に靜止して居つた、かくて兩方共に無聊に堪えざる折柄、偶〻我兵が小銃射的の標的を頭の上に高く揭げて見ると、敵兵はこれを射たるより、我兵は「命中四點」の信號旗を振つた、すると敵兵よりも標的を高く揭げた、我兵は射た、敵兵は「命中六點」の信號旗を振つて示した、すると我兵が又的を揭げる、敵兵は射る、我レは命中幾點の信號旗を振る、代て彼レより的を

揭げる、我レは射る、彼レは信號旗を振る、此の如く我彼兩方交る〳〵に面白く射的して居るより、後方に居たる我が一中隊長は全く味方同志にて競爭射的をなし居るものと認め、さてこそ此邊は早くも味方の悉く占領せしものよと考へ、壕外に全身を露はし悠々と煙草を薰らして緩步し來ると、敵兵はいづれも此の競爭射的の面白サに餘念なく、中隊長を狙擊せざりしが、中隊長は味方の壕內に入りて初めて事の顚末を聞き、危き一命を助かりたりとの事を第十一師團長より聞きたりとて、最と面白く話された。總じて要塞戰にては、敵と絕えず相接近して居るより、此樣なる喜劇は他にも往々ある。

かくて嶺を下り、來時と別の路を取つて歸途に就くと、此路はダルニーより旅順口に通ずる街道とて、露人の經營に係るものなれば、規模の廣大なること此邊に有り振れたる支那道の比にあらず、山側をSの字形に削つて路を整ち、見渡す限リ十二三個のSの字は上より下へと連り、且つ草樹の少なき處などは、伯者の西部より四十八曲峠を超えて美作に入る街道を通る心地がする。Sの字曲リを下り盡くすと、亭々たる綠の松樹が紅葉黃葉とに交はり、其下に數軒の人家が見える、地圖を按ずると分水嶺子村である。それを下り〳〵てビリアース老畵伯の滯在せる東房身（內外新聞通信員の滯在所）に出で、やがて第三軍司令部に歸つた。

第三軍司令部に歸ると、同行せし岡田少佐は、今日の視察中に得たる參考の件々を上官に報

死神論。

告せんとて筆記し、予も亦た此文を起草し居りしより、夕食の定刻に餘程遲れた。是より先キ第三軍管理部に規則あり、卽ち公用の外、食事の定刻に遲るゝ十五分間以上になると、副食物を供へぬと云ふことである、そこで岡田少佐と予との兩名には今夕副食物を供へられぬことゝなりたるより、少佐は上官に報告するものなる故に公用であると答へる、予は、文人として當日の紀行を遺忘せざる前に起草し文學界に寄與するは文人の公用であると答へた。すると列席の各將校は宜しい、判つた、一は軍人、一は文人として各〻氣焰を吐いた、共に公用である故に、今夕は十二分に副食物を供ふることゝすべしとて、夫れより種々の話が始まつた。死神の有無に至つて議論が起つた、渡邊管理部長には、敵の最も多く取る彈道、最も多く射擊する方向、地點、天候、時刻等の函數(F)が卽ち死神である、此の函數に近づきたる者が死神に取り著かるゝ公算(P)のある者にして、此の函數に全く遭遇したる者は卽ち死神に取り著かれたるのである、卽ち

死亡＝P＝F(彈道,方向,地點,天候,時刻……)

と論ずると、齋藤軍政官は個人の其の地點にある時間の長短が最も此の函數を增減すると說いた。予は面白い、ハイカラの大乘を得た者だと叫んだ。

以上の如く軍人の社會は、他の社會、殊に敎育社會だの文學社會だの役人社會だのと違ひ、淡白で、快活で、勇氣があつて、而かも頭腦が理學的に能く消化して居るより、物事が早判りし、ハキ〳〵として疑念が無い故に、此の八十日間の滯陣はハイカラの大乘國に遊び居る樣な心地がする。

十一月六日（日曜）

安子嶺の舊戰場を視察せし後、同宿の諸將校には、未來の戰場を檢分し、敵の配備、施設等を偵察することゝ決した。予は同行しても宜しきやと問ふと、諸將校には余等は調査に行くのであるが、亦た過日相談したる送別行の一部なれば、無論同行さるゝも可なりと答へた。鮟島將軍には、貴君行かるゝか、御奮發であると云はれたるより、予は笑つて御奮發であると云ふ語は、大嶋、松村二將軍よりも承つた、頗る文人を侮蔑したる語と申上げても宜しいと答ふると、筑紫中佐は、此人は自分の進退は全軍の士氣に關係するとて頃日は大氣焰でありますと云ひたるより、予は其故を說明して、私は左家屯までの道路は二十四回往復した、其他第一戰線の大概の處は經廻つた、故に頃日は兵卒中にも私の何物たるを知つて居る者が多い、アノ文人が未だ滯陣して居るナ、未だ白い夏服を著て居るナと思はしむれば、士氣を奮興する一端となるでは無きやと答ふると、氣餒當るべからずとの笑夢か起つた。諸將校には、今日若し彈に中つたなれば、三等症(下等性なる病症を陸軍にては三等症と規定す、調査

に行つて彈に中れば戰死とも目されぬ故に、此く戲レに言ふのである）に編入せらるゝのだと云ひつゝ各〻馬に乘つた、予も、若し彈に中つたら、內地の人々は志賀がマゴ〳〵して居つたから中つたのだと評するであろうと云ひつゝ、前日の安子嶺行の通リ捕獲の露西亞馬號に乘つて出た、鮫島將軍は一行の出發を頻りと目送して居られた。歸てから後にて聞くと、將軍には一行の出發せし際の話を聞き居られ、直ちに乃木軍司令官に謁し、今日盤龍山砲臺に行つた三將校は未來の戰場を偵察に赴いたのであるより、彈に中つても三等症にあらざる義を豫め申上げ置きますと報告せられたとのことである、『人生感二意氣一、功名誰復論』とは此等の事を言ふものだと思つた。さて一行は馬を躍らすこと一里半、五家房附近なる第九師團司令部に著くと、第三軍參謀の山岡步兵少佐が居られて、予を見、盤龍山南砲臺を御回はりになりましたれば、當日の苦戰者（八月二十、二十一日の突擊、二十二日の奪取、二十三日の逆襲）の爲めに是非一詩無かるべからずと思ひますと云ふた。やがて一行は、土囊を積み上げたる塹壕の通路に入ると、先づ入口にて負傷兵に會ひ、中途にて卽死兵の擔架に載せられ來るものに會ひ、それより敵味方の放ちたる爆裂藥の爲めには半ば黃ばめる段々をば登り、盤龍山東西舊砲臺を見、開路を經て未來の戰場を檢分し、敵味方の死屍の收容する能はずして未だ狼籍と遺てある處に到るや、筑紫中佐は、上野淺草のパノラマにある死屍の通リだと云ふ。

盤龍山東西舊砲臺。

左テキ。

と木札の建てる處に來たより、誰レでも左に曲りたい人は曲がれと云ふや、曲がる者の無かつたのは當然である。『大日本勇士之墓』と木札の建てるを一拜し去ると、此邊には露西亞兵の外套を着て居る日本兵が多い、予は、一兵士が露字の肩章の附しある未だ新らしき敵兵の外套を着し居れるを見、ヲイ敵と間違へらるゝぞと云ふと、其兵は大に笑ふ、又た其傍の兵士が塵埃にて餘リ黑き顏をなし居るより、凱旋の時、其顏の儘で故鄕の歡迎會に出て見よ、盃が雨の降る樣に前に集つて來るぞと云ふと、此兵は喜んで居る。さて先刻より彈丸は絕えず頭の上をビゥー〳〵と飛んで行くけれども、餘リ敵に近い故に、遠方に落ちて此處には一つだに落下せぬ。そこで先刻の山岡少佐の言を思ひ出し、土囊の上に腰を懸けて沈吟し、

盤龍之山高百仞。其盤如レ龍其踞虎。削レ山築レ壘鑿安レ砲。絕險自誇稱二天府一。何物狙擊兩聯隊。憑レ高瞰レ我太跋扈。將軍視レ之目眥裂。案レ劍叱曰彼可レ取。急傳二號令一整二部曲一。喇叭高奏吶喊譜。譜聲激壯喊聲雄。砲聲爆聲相旁午。北陸健兒膽如レ壺。笑視銃丸劇レ於レ雨。一舉拔レ壘樹二旭旗一。堂堂復命茲振旅。君不レ見一簣全二九仞之功一。鳳詔煥然照二千古一

と、紫鉛筆もて走り書きした、惡詩は最惡詩であるが、實際實境ではある。それより東盤龍山々腹なる歩兵第三十五聯隊本部に聯隊長佐藤中佐（兼毅）を訪づれ、軈て處々を廻り、午後三時頃、第九師團司令部の天幕に入り午餉をすると、同行の大村少佐が頭の上を彈丸が通はる下で飲食するも亦た愉快だと絶叫した。然かし先日の死神論にありたる通り、函數（ファンクション）を減ずることは出來る故に、歸途は敵の狙擊を避ける爲め、百米突（メートル）づゝ離れて馬を躍らして行くこと、規定した。さて右の規定の如くして馬を躍らし、半里程經て漸く敵前より去ると、最後に居たる大村少佐が、アー可笑い、諸君が正直に百米突づゝ離れて馬を一生懸命で躍らし行く所は、一幅のポンチ畫を見る樣であつたと喊めきたるより、一同は人の事を言はずと御自分は如何であつたかと笑ふ。第三軍司令部に歸りて、筑紫中佐は乃木軍司令官に敵の散兵壕の深サ、圍廓の高サ等、當日實視の條々を報告し、予の同行せしことまでも述ぶると、軍司令官には報告の條々を喜んで聞かれ、アゝ志賀も行つたのかと答へられたりとぞ。

十一月七日（月照雨）

同宿の大村岡田兩少佐共に愈、明八日早天歸任することゝ決したれば、黄昏、同宿せる支那家屋の内にて心ばかりの送別會を開いた。第三軍管理部よりは牛肉を贈られ、鮫島將軍より

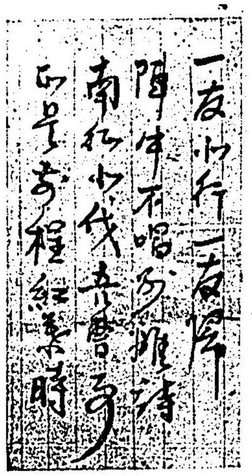
露兵ブリキ製の藥莢。

は正宗酒を贈られ、渡邊軍管理部長も來會したれば、一同別盃を擧げた。時に岡田少佐は、敵のブリキ製の藥莢を取り、予を見て、元來彈の藥莢は青銅にて製造するものである、然るに頃日は最早青銅も盡きたりと見へて是れ此の通りブリキにて作つたのを打ち出しました、敵の運命の切迫して來たことも此レにて判ります、然かしブリキ製の藥莢まで製造して猶ほ且つ抵抗するとは、其の頑强なること敵ながら天晴であると感じましたから、私はこれを携帶して行きまする故、紀念の爲め此事を書いて下されと云ひたるより、

是俄兵守旅順口者所製藥莢元以青銅製而守涉八閏月青銅悉盡僅以鐵葉辨之其困怠之狀可想也雖然百方堅守至是猶不知屈者吁嗟亦可以謂克足角與我武者矣夫

明治三十七年十一月七日　於旅順口攻圍軍牙營　志賀重昂誌

と書いた。さて筑紫中佐は、



と書きつけ吟せしに、鮫島將軍は面白いと云はれ、それより一同は屋外の木葉を見て、實にも前程紅葉の時なりと、斷續せる砲聲の下に此詩を述吟し、盃を重ねつゝ、快く兩君の歸任を送つた。

上樣日和。

ビリヤース翁。

ケンナン翁。

攻圍軍の天長節。

十一月三日（未曉晴）

暖かな長閑な風も無く雲も無き日本晴、否な滿洲晴の日である。東京にては天長節に雨の降りたる例は無いが、戰勝地域の此處にても亦た今日殊の外の快晴に逢ふとは、古句の『千里同明大有年』を想ひ起さしめた。朝早く起きて渡邊第三軍管理部長に、好い天氣です、全く皇帝（カイゼルス、ターグ）日でありますと云ふと、部長には上樣日和（うへさまひより）ですなと答へた。九時、朝餉の後、寒暖計は十度（華氏五十度）なれば、心地好く曝背（ひなたぼっこ）して居ると、ビリヤース翁とケンナン翁とが南の村と北の村とより來られた。ビリヤース翁は世界第一流の戰爭畫家にて、有名なる倫敦（ロンドン）畫入新聞（イラストレーテッド、ニウース）の特派員として露土プレブナの役等前後十八回の戰役に臨みし六十餘歳の鑁鑠たる老人である、ケンナン翁は米國有數の文章家にして、其の生涯には波瀾曲折多く、シベリア流刑人の事を記述せし著述の爲めに露都ペテルブルグにて捕縛せられ、四十八時間以内に露國の境土以外に放逐されたる是れ亦た六十餘歳の鑁鑠たる老人である。現世界有數の兩偉漢が、振古未曾有なる天長節日に我が戰勝地域の中央に來會して、予と三人相手を握つたのは、我が生涯に於て記憶すべき日であると思ふ。予は自分と共に一支那屋に久しく同宿し居る大本營の鮫島中將、筑紫砲兵中佐、大村步兵少佐、滿洲軍總司令部參謀の岡田步兵少佐、金州の軍政官齋藤步兵少佐の五君を兩翁に紹介した。かくて五君には兩翁に打ち解けて種々物語られたるに、兩翁は大に滿足して、予に向ひ、貴君は此の如き人々と共に一所に同宿せらるゝは嘸（さぞ）愉快ならん、眞に羨むべしと喜んで云ふた。予の座席にハットンの露皇ノ命令があるを見て、ビリヤース翁は打ち驚きて、ハットンは我が親友なり、貴君は如何して此書を得られたりやと問はれたれば、予は詳かに話した、是れは貴君も知らるゝ如く、露國政府の忌憚に觸れたりとて、露國の境土内に公行することを嚴禁されたる小說である、然るに今回南山の戰勝後、露人のダルニーを撤去するや、我軍には國際公法顧問の篠田法學士等をして露人の遺て去りたる書類を檢分せしめたるに、學士等は堆積せる反古（ほご）の内より此書を發見されたる、恐らくは政府に反對なる露人の潛かに所藏し居りたるものならん、然るに予のこれを卒讀するや、書中にケンナン先生の文を轉載せしものを二ヶ所發見したり、書は露人の遺て去りたる後我軍が反古の内より發見せしものなり、其の著者はビリヤース先生の親友なり、書中にはケンナン先生の文を轉載せり、何等の奇因緣ぞ、正に文壇の一佳話にあらずやと云ふと、ビリヤース翁には、其書を貴君が先づ讀みてケンナン翁に告げ、而かもケンナン翁が君に依りて初めて其文の轉載しあることを承知したるに至ては、益〻奇因緣にあらずやと答

文壇の奇因緣。

第三軍司令部の天長節。

へ、且つ此の如き奇因緣を我友ハットンに書送したらんには、殊に喜ぶべかりしも、惜い哉、余が日本に渡航せし後、今より三ケ月前、彼レは黃泉の客となつたと云ふ。傍に聞き居たる鮫島將軍には、實に面白き話かなと云はれる。やがて兩翁には予等の寄宿所を辭し去られ、老壽伯は南方なる東房身（予等の滯在せる柳樹房、卽ち第三軍司令部所在地より凡そ六町、內外新聞通信員滯在す）に歸り、老文豪は北方なる劉家屯（第三軍司令部より凡そ十五町、ケンナン翁と共に一外國通信員滯在す）に歸り去られた。

天長節日の壹。

十一時半、第三軍司令部の各將校には　聖壽の萬歲を祝する故、予にも來會せよとのことである。式場は乃木軍司令官寄宿所の後なる廣場にて、美しく黃に染つたる桑皮樹（とねりこ）と麁しく赤黃に色附きたる樺樹（かばのき）との下にテーブルを列ね、中央には追送品の空箱を臺とし、其上に支那人の大なる水桶を置きて、これに松が枝と菊花とを亂れ挿し、其傍に旭日の二大國旗を交叉してある。やがて乃木軍司令官以下鮫島、伊知地、豐島の三將軍、五十の將校、通譯官は場に列し、三鞭酒の杯を擧げ、乃木軍司令官の發聲にて　大元帥陛下の萬歲を三大呼し、音樂隊は三たび君ヶ代を奏しける折しも、海軍陸戰重砲隊は一百一の祝砲を發し、聲山海に震ひて、雲井を渡る丹頂鶴の群すらも、我が國威の隆々たるを祝ひて喜び舞へる觀がある。

正午には兵士に酒一合、菓子（くわし）、小豆（あづき）、鯛（たい）、海老（えび）、魚菜（ぎょさい）の羹（あつもの）、五目鮓の給與があつた。兵士には平常

天長節日の旅順口。

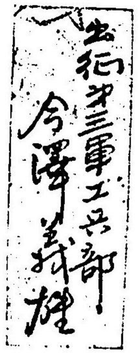
海味を嘗め居らざるが故に、第三軍兵站監古谷大佐には天長節にこそ十二分にこれを給與せんと、今日の爲めに辛勞して殆んど一萬尾の鯛を鹽にして蓄へ置いた、然れば敵の直ぐ眼前にある兵卒と雖も今日は鯛の鹽燒を給與せられたのである、漢の天下は獨り張良、韓信があつたのみでは得られなかつた、蕭何の功も亦た大にある、兵站の主任に當り居る者の辛勞は殊に察せねばならぬ。ケンナン翁は後にて此時に兵卒に至るまで海老を給與されしと聞き、海老は歐米人の珍重するものとて、如何に海老を給與せしとな、日本軍が兵站の齊整と熱心と運搬力の偉大なるとには、軍隊の精英なると共に嘆服するの外なしと云はれた。一時、午餉の時、予の前に座せる筑紫砲兵中佐は、攻城砲兵司令部に特使を發して戰況を問ひ合はした、すると『零時四十五分、旅順口市街に火災起り、今に鎭火せず』との報が到着し、一同に披露せられ、敵兵の投降者も數名來る、相謂ふ、旅順口の命脈遂に長からずと。

天長節日の日本軍。

午餉の後、同宿の筑紫中佐、岡田少佐と共に周家屯なる攻城工兵廠を訪れんと、今日は天長節なれば馬にも十二分に保養さすべしとの發議にて、三人は當面なる于大山の色の每度（いつも）になく麗はしきを賞でつゝ徒步にて前んだ。行く〳〵途上には、天幕にも、露營にも、翳倉にも、穴居にも、工場にも、砲臺にも、野戰病院にも、我兵の滯在せる支那家屋にも、絹、木綿の國旗の外、兵卒の思ひ〳〵に紙にて製したる國旗が幾百千となく美しく風に飜へり、折柄溫

天長節日の攻城工兵廠。

追擊砲。



今澤中佐

度も十五度(華氏六十度)にて、人をして春の野邊に花狩に行く感あらしめる。攻城工兵廠に着くと、廠長の工兵中佐今澤義雄氏は、筑紫中佐、岡田少佐とは同僚たり、予とは鄕友である故に三人の訪問を大に喜び、サー紀念の爲め一所に寫眞を撮影すべしと云ひたるが、三人には紀念の爲め寫眞を撮影するのなれば、貴君の新に發明した る追擊砲(突擊の際最も有効なるもの)を持ち來り、其傍にて撮影すべしと云ひ、予は然らば追擊砲の歌にても作らんと云ひけるに、諸君子にはソレは妙なりとのことなれば、

追擊砲。有二殊功一。誰造レ之。兵是工。誰創レ之。今義雄。吁嗟霹靂落レ地天狗走。二龍山外虜兵空

と賦したるに、廠員には書いて呉れよと迫りたるが、筑紫中佐は、ソレは志賀君に書かしてはイケヌ、惡筆で一文の價値が無くなると云ふ。然かし廠員には此歌を掲げたる下にて撮影したしとのことなれば、已むを得ず惡筆狼藉と大書し、これを貼つて其下にて撮影した。撮影したる後、今澤廠長には天長の佳節を祝するまでにと、予等三人を賓とし、部下の將校をも招きて手篤く酒肴を饗應し、第九師團野戰病院長永末軍醫正は詩文に趣味ある人なれば、特に紹介せんとて院長をも招いた。永末院長には直ちに來會し、昨日饅頭を製し乃木軍司令官に献じたるに、此くなん咏じて返禮されたりと、ポッケットより出し示されたるを見るに、

乃木大將饅頭に寄する感懷。

色白にふつくり出來たおまんぢうアンと喰べたる味のよきかな

饅頭を食ふにつけても思ふかな饅頭山の取れぬ悲しさ

とあつた、一同はこれを讀みて、前者は胸裡の洒々落々たる所を示し、後者は自己の大任を造次顚沛だに遺れず、機に觸れ境に遇ふ毎に感慨せらるゝなど、其の心事の悲壯なる、此の二首正しく乃木大將の本色を顯はすものなりとて、いづれも感に入つた。酒酣なる頃、近く西の方にて兵卒が今日の遊興にとて頻りと角力取る聲が聞える、コナタ椅子山、カタヤ劔山など、行司の呼ぶや、エンヤ、ハッケヨイ、ノコッタ〳〵〳〵の聲の後に、偶〻劔山（味方の大勝利を得し地名）が椅子山（敵方の地名）を見事に投げ出しでもすると、雷の如き喝采が起る。今澤廠長は喝采の聲を聞き、益〻酒を勸められしかば、予等は豪懷淋漓、言ふべからざる興趣を感じた。六時頃、三人は辭し歸らんとするや、廠長には、貴君には暫く鄕味を嘗めざるべしとて、三河味噌一樽を贈られ、兵卒をして第三軍司令部まで屆け送られた。

天長節日の夕。

夕、第三軍司令部に歸ると、支那の村長は、日本天皇の聖壽節に酒を賜はりたりとて、感謝の意を渡邊軍管理部長に述べて居る。管理部に給仕せる背高き一支那人は、威海衛駐在の英國軍隊に在籍し、英國皇帝戴冠式の節、英都倫敦(ロンドン)まで渡航せる者なるが、サー、大人(ターイン)、ベリ、

天長節日の夜。

マッチ酒進上、サンキューとて、御酒を澤山頂戴せしことを謝して居る、意味は誰レにでも直ぐ判かるが、日本、支那、英吉利三國語雜リの片語とて、此の如き珍妙なる言葉は初めて聞いたと、我も人も皆吹き出して笑ふ。

夜に入り輜重輸卒の廣き露營の前を通ると、『全勝亭　大入叶』と墨黑々と書せる掛行燈が掲げてあり、將校兵卒が續々と入るより、予も内に入ると、イラッシャイ〳〵〳〵と入口に て呼ぶ兵士があり、内には將校席、下士卒席、憲兵席、藝人席と貼札にて區分せられ、中々の大入リなる寄席である。馬卒（東京の瓦職工）の講談、後備步兵（紀州の荒物屋主人）の義太夫、輸卒（東京馬喰町旅人宿の若且那）の落語ありし後、眞打には後備步兵（淡路の淨瑠璃語リ）の菅原傳授手習鑑があつて、十一時頃席が果ねた。寄宿所に歸ると、鮫島將軍には、今日東京は至極の好天氣なり、觀兵式は軍裝にて、内外人の參觀者は例年に幾倍し、國民後援會の主唱にて日比谷公園に催ふしたる東京市民の祝賀會は、滿洲軍に對して非常なる感謝の情を表し、且つ　陛下萬歲の聲を發せし時は天地も崩づるばかりにて、國民の意氣は雲を衝くが如くなりしとの電報を傳へ聞きたりと物語られた。かくて予は一生涯に未だ曾て有らざる豪快、雄壯、痛奇、多趣なる天長節日に逢ひたるを喜び、此の如き盛事に接したるも、亦た實に聖德と國威との御蔭なりと感悟し、後世の紀念の爲めに『攻圍軍の天長節』一篇を草した。

露國捕虜との問答。

喜劇一齣。

十一月四日（金曜）

二人の敵が我軍に捕虜となつた、第三軍憲兵部にてケンナン翁（米國文豪）の通譯に依り、予は此の二捕虜と問答した。憲兵長鈴木憲兵大尉初め馬場騎兵中尉等四五の將校が傍聽して居る。二人曰く、旅順口を出でたる我が軍艦（露艦）は悉く無難に浦鹽斯德に入り、クロパトキン將軍は既に日本軍を擊退してダルニーまで進入し、バルチック艦隊も亦た今日か明日か來着すべく、陸海の大援軍の旅順口に入るは日を期して待つべしと、眞赤なる顏して氣焰の熱を吐き、さて日本軍にては、捕虜あれば先づ其手の指を切り足の指を斷ち、而る後に屠り殺すと云へるが、今我々二人が此の如き殘忍なる日本軍に捕へられたるも全く運の盡きなり、是非も無けれと、黃き氣息を吹きければ、ケンナン翁には、旅順口を出でし露艦は或は黃海にて擊沈せられ、或は膠州灣將た上海に逃げ入つて武裝を解かれ、或はノーウィック號の薩哈連にて擊沈せられたる事より、クロパトキンの遼陽を棄て沙河に大敗したる次第と、バルチック艦隊の來着も亦た期すべからざることを說明するや、捕虜

第三軍司令部
陸軍憲兵大尉鈴木武臣

十月号

の顔色は忽ち白く忽ち青く忽ち土の如くなりける折柄、予は憲兵長の手許にありしドロップス（西洋菓子）と紙巻煙草とを與へたるに、二人は手の指を切らるゝと思ひの外、至極の恩惠に預りたれば、悲みの色は瞬間時に喜びの色と變はり、ドロップスを摘み、煙草を吹かし、數十日間絶えて無き所の味なりと叫びき。實に二人が僅々十二三分の時間中に六回まで顔の色を變へたるは、憐レなりと云へば云へ、西洋の脚色には間々有り勝チなる喜劇とこそ云ふべけれ。

十一月四日、二龍山敵砲臺に對する我が第九師團工兵の攻路開鑿は大に進捗し、既に敵前一百米突に達せり。是に於てか九日午後三時、奇襲に依り、二龍山中腹の散兵壕を奪取せんと、先づ各將校所持の時計を同一の標準時に正し、且つ突擊隊に對しては、左の嚴乎たる命令を發せり、

萬難を排して敵壘に突入し、直ちに搭開鑿逐すべし、而して一部隊は敵の土嚢を反對の側に移し、速かに胸墻を築くべし、傳令の必要を生ずるとも、突擊成功せざる間は、何等の報告をも發するに及ばず

と、即ち垣内深川二大尉は、其の各中隊より決死の兵を撰拔し、三手に分ち、三隊長に嚴命するに、三時に至らば、他を顧みずして猛進し、一躍敵壘に突入し、何等事情の生ずるとも突進に後れず、唯一人となるとも突擊し、右手傷かば左手にても指揮し、脚を失はゞ手にて進ひ、萬事休するまで必らず指揮すべきことを以てす、三隊長爲めに慨然、腕を捻りて三時を待つ。三時至る、即ち疾風の如く突進す、敵狼狽、自から張りたる鐵條網に彊り、且つ斃れ且つ潰え、二龍山敵砲臺の中腹散兵壕は、全く我が有に歸し了りぬ。

きゅうかう 穴弓 穴告 に 秋りて

爆發の理學。

七爆聲歌

〔松樹山砲臺爆發所見〕。

十一月十七日（宋曜）

今日は雪降リ後の天氣とて、快晴で、風が無くて、暖かである、雪降リの明日は猶も日向ボコするとは、日本ばかりでは無い、此の地方にも應用さるゝ。そこで何處へか出掛け樣と思ひ居れると、恰かも第三軍工兵部長の榊原工兵大佐が尋ねられ、今日は午後より坑道に依りて松樹山敵砲臺の穹窖（敵が壕に依て突擊し來るを擊退する爲め煉瓦、人造石又はベトンにて構造せし地下窟）を爆發する筈です、若し地下に發さるゝ力が多くなれば、地下の物を破壞する力が多くなる道理なれば、外部には餘リ爆聲を發せず、且つ煙を揚げぬ、これに反し外部に多く力を發する時は、壯觀ではあるが、効力は少い、先日二龍山敵砲臺攻擊の際、御覽になりたる敵の大地雷の如きは、壯觀の極を盡したるものなれども、學理上より觀下すれば殆んど無用なるものである、果して此の大地雷は味方を少しも傷けず、何にも効能が無つたのである、故に爆聲を發せず、煙を揚げざることを期するは理想ではあるが、然かし爆發なれば、相當の聲を發し、煙を揚げ、亦た一壯觀となすに足るものであると云つて歸られた。午餉を忙ぎて了り、五將校二憲兵と共に連騎して攻城砲兵司令部の山頂に登つた。殘雪は敵

の各壘を班々に點じて平常の景趣とは異り、一入の風情を感じた。程もなく爆聲一轟、黑煙が土沙を捲いて揚つた。五六分間隔て丶第二の爆發が揚つた、然かし第一回より低く且つ細い。又た五六分間隔て丶第二回より更に低い細い煙が揚つた、河野工兵少佐（子爵）が傍に居り、今度のは非常に効力があつたと云ふ。言未だ了らざるに第四回、第五回、第六回、第七回の爆發が揚つて、いづれも効力があつたらしい。然かし爆發は爆發なれば、皆な轟然地を裂きて起り、黑煙は半空に逆上した。殊に黑煙の逆上せる際、我が陸軍砲も海軍砲も東より北より西より連りと射擊し、硝煙空に漲る處などは一代の壯觀にして、要塞戰にあらざれば應接し得ざる景趣である。愉快グに眺めて居ると、通報が來た、曰く今日の爆發は前度未曾有の効力ありしと、報未だ了らざるに喝采と萬歳の聲とは勃生して山嶽爲めに鳴動するばかりである。

要塞戰に於ける工兵。

是に至り予は素人として要塞戰に於ける工兵の功蹟を說かざるを得ない。工兵の野戰に必要なるは論を待たぬ、然るに要塞戰にありては、凡そ戰鬪と云ふ戰鬪の筋道は先づ工兵が開くのである、要塞戰にては絕えず敵壘に肉迫して攀ぢ登るのである故に攻路を鑿ち、此の攻路よりして敵壘に躍り入る順序である、若し此路以外に身を暴露したらんには、如何なる鬼神と雖も死傷を免かれ無い、故に要塞戰に於ては一條の攻路の內に死活と勝敗との動機を納めて居り、而して此の攻路とし云へば、多く工兵が先づ設計し、尋で步兵が開鑿するのである。

次に工兵は敵壘に施設せる各般の副防禦物を破壞して步兵の爲めに突擊の便を開く、次に步兵に先ち敵壘內に突入して爆藥を四迸し、步兵をして其間に突擊せしむるのである。然れば旅順口の如き天然と人工とを侍める要塞を攻擊するには、工兵の力は最も與つて大である。

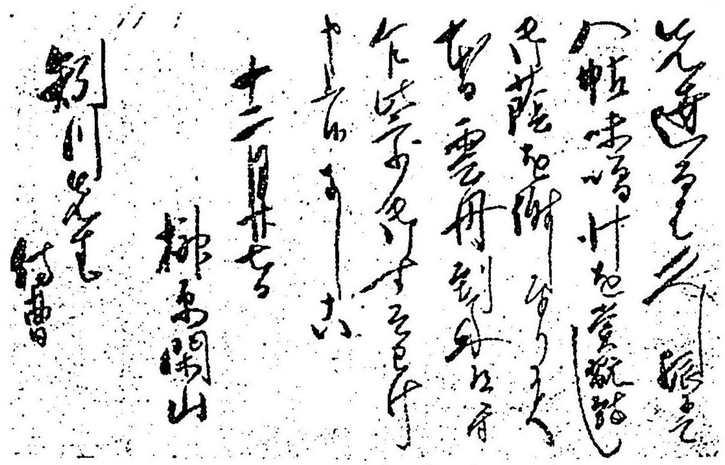
今や世界の指目は齊しく旅順口に集つて居る、何となれば北支那に於ける露西亞の唯一なる公然的租借地は旅順口である、此の唯一の公然的租借地を失ひたる以上は、露國の北支那に於ける公法上の根據は消滅するものである、故に外交上より打算すれば、旅順口陷落の遲速は最も大局に干與する。更に北方に於ける敵陸軍の增率は益、加はり、バルチック艦隊も亦た紅海に入らんとして、我が軍艦の修理は一日も速かならんことを要する。然れば今日此頃に當り、內外の指目が旅順口に集り來りしも偶然でない、否な世界の安危治亂の動機は、今日となつては旅順口と云へる一地點に納められて居る。さて此の旅順口を陷落する道筋を開通する者は先づ工兵にして、此く開通されたる道筋に依て他の諸兵が活動するものとすれば、工兵たる者自から顧みて重しとせざるべけんや、其の圓匙（杓子鋤）の上に盛れる土の重キを說く勿れ、其の重キは世界の安危治亂を上に盛るが故なり、其の十字鍬（鶴嘴）を揮ひ堅き石英岩を鑿ちて攻路を開く時、自から想へ此の攻路を開鑿する遲速は、世界の安危治亂を遲速せしむるものなることを。今茲に松樹山敵砲臺の爆發し了るに當り、九泉喚び起す工兵大佐大木房之助君

大木工兵大佐の戰死。

の魂、君や松樹山敵砲臺爆發工事の任に當り、去る七日午前十一時、工事の大成に垂んとするを撿分し、敵を距る五米突の處に到り、望遠鏡に依りて敵砲臺の外岸頂を窺へる刹那、飛丸一來、場に斃れて命を國に致したる者である。嗚呼君をして今日の大成功を見せしむる能はざるは憾むべし、然りとは云へ君が志と工事とを能く繼ぐ者がありたるこそ、今日の偉觀を發輝したのである。然れば大木大佐にして靈あらば必らず地下に咲を含むことならん、卽ち歌を賦して聊か君の魂を招く（十一月十七日午後四時半、攻城砲兵陣地に於て起草）。

七爆聲歌。

爆聲一。空漲レ漆。爆聲二。蝕二天日一。爆聲三。電雷掣。爆聲四。穹窿窒。爆聲五。虜兵滅。爆聲六。天柱折。天柱折兮地維摧。礮臺迸裂爆聲七。」有レ繼如レ此宜二慰藉一。吁嗟大木工兵大佐。」



榊原工兵大佐（現少將）

十一月二十三日。

十一月二十三日（水曜）

朝餉の後、我軍の南山の戰に捕獲せし露西亞馬（ヤ）號に騎り、柳樹房の第三軍司令部を出で、五家房の第九師團司令部に至り、それより盤龍山東砲臺に入り、豫て準備しありたる一間許りの大絹地二枚に左の二惡詩を揮毫した。これは第九師團長大島中將が其の任地の偕行社に掲げられるので、これが需に應つたのである。

『前盤龍』。

前盤龍。

盤龍之山高百仞。其盤如レ龍其踞虎。削レ山築レ壘鑿安レ砲。絶險自誇稱二天府一。何物狙擊兩聯隊。憑レ高瞰レ我太跋扈。將軍視レ之目眥裂。按レ劍叱曰彼可レ取。急傳二號令一整二部曲一。喇叭高奏吶喊譜。譜聲激壯喊聲雄。砲聲爆聲相旁午。北陸健兒膽如レ甕。笑視彈丸劇レ於レ雨。一舉拔レ壘樹二旭旗一。堂堂復命茲振旅。君不レ見一簀全二九仞之功一。鳳詔煥然照二千古一。

『後盤龍』。

後盤龍。

斯恥不レ雪非二男子一。恢復之師咄嗟起。虜軍三面三匝來。吾兵算來百人己。」糧道絶。水還竭。人飲レ溺。人呑レ血。呑レ血飲レ溺澆二忠肝一。飢者操レ銃傷者鐵。喑啞叱咤聲振レ谷。三面虜

軍遂潰裂。」吁嗟取已難守殊難。取レ之守レ之兩般完。天子褒賜優渥語。三軍艶稱九師團。」

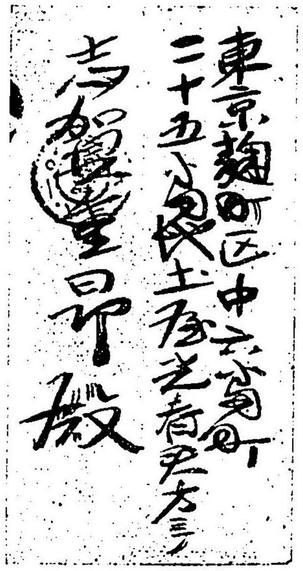
さて此の『前盤龍』、『後盤龍』の意味と云へば、去る八月末の總攻撃の際、第九師團の盤龍山敵砲臺（東西舊砲臺）に向ふや、敵の砲彈は地を裂きて迸しり、銃丸は雨よりも劇しく、爆裂藥は天より降る如く來り、地雷火は霹靂二三聲、地維を摧く勢もて爆發し、而かも怯めず屈せずして吶喊し、眞に萬死中に一生を得て、東西の二砲臺を奪取したのである。　大元帥陛下より『一簣其レ九仞ノ功ヲ全フセヨ』との優詔を賜はりたるも偶然ではない。さて我軍の盤龍山二砲臺を奪取するや、露西亞方には致命傷なれば、敵は如何なる代價を拂つても奪還すべしと、數十門の重砲を一齊に放ち、夜に入りては勇敢なる兵を發し、三回までも逆襲しぬ。當時我兵は砲臺奪取の際に精力を注ぎ盡くし、後のことゝて、疲レに疲れ果てたるのみか、糧道絶ちて一日一夜一粒の食だに得ず、こは未だしものことなり、汲路絶えて水全く盡き、重傷の死際に悶え苦み、水よ々々と喊ぶ聲の悲しく、中には十數の水筒を一々傾け、一滴だに得て舌を濡はさんと焦慮しも、いづれもカラ〳〵と音して水氣だに無ければ、然ちば小便を呑ましてよと哀叫せしより、四五の戰友は小便せんとせしに、連日飲料の缺乏せしこと、て如何にするとも出でざるにぞ、果ては死せし戰友の傷に口寄せて血を吸ひ、唐紅なる唇より　陛下萬歳の聲もろともに氣息絶えたる者もありき。然れども生き殘れる百餘名の將卒は、夜叉の如き勇膽を以て、敵の逆襲を一度ならず二度ならず三度までも擊退し、二砲臺の占領を確實にし、茲に全く旅順口陷落の端を啓きたるは、まこと千古の偉功として喧傳するに足る。此の如き千古の偉功を歌ふには一大詩才を要する、予の詩など固より副はるべきものにあらず、唯だ此境此遇を見聞して感興のまゝ惡句を陳べ立てたる次第に過ぎぬ。

やがて揮毫し了はり、盤龍山東砲臺を出づるや、直ちに人を以て此事を渡邊第三軍管理部長に通知した、これは同部長が予の敵前にて揮毫するを危險なりとし、昨夜來痛心し居られたるより、何等の變事なかりしと逸チ早く通知し、其の厚志に酬いたのである。さて大島中將には、詩と書とを幾度か展べ見られつ、實に士氣を鼓舞するに足りますとて大に喜ばれ、足立參謀長をも招き、三人にて午餐し、予に酒を強ひつゝ北陸健兒膽如レ甕、笑視彈丸劇レ於レ雨と二三回口吟じて居られた。

第九師團司令部を辭し去り、午後四時、大孤山の下なる第十一師團司令部に土屋中將を訪れた。土屋中將には、暫くであつたナと叫ばれたるより、予は左樣本軍に到着したる初めに御目に懸つた計リですからモー小百日になりませうとて、今日は第九師團に揮毫に參つた歸途でありますと云ふと、將軍は笑つて君の書は幼少より知つて居るが、ドンナ字を書いたのだと問はれたれば、予は然ればなり、御承知の通リの惡筆でありますから、大島中將より揮毫の依

十月二十三日

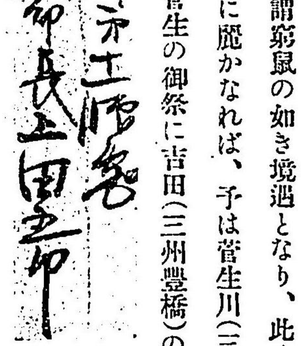
東鶏冠山北砲臺敵壕の占領。



札幌同窓の亡友
原田成貞氏書
（著者が土屋少佐に寄食せし際）

將軍は口を開いて笑はれた。

それより土屋將軍には東鶏冠山北砲臺なる中間の敵壕を占領する故に同行すべしとて案内された。折柄夕陽は白銀山砲臺の上に落ちんとして、眼上、眼前、眼下は一面に黄色に染まり、此の黄金世界の間を破つて時々白色に爆裂するは、我が海軍砲である。正六時、我が陸軍攻城砲は一齊に放ち來り、今までの黄金世界も見る〳〵白化し白化して、銀世界となる。六時四十二分、第二十二聯隊幾中隊の歩兵は、味方の砲火に掩護されつゝ鬨の聲を揚げて突撃する。小銃の聲は、萬斛の豆を熱火に煎るが如くにバチ〳〵〳〵と一時に起る。日は全く暮れ果てたるより、敵は我兵の所在を照明し、これを目懸けて小銃を直射し、又た爆藥を投げ付けんとて五分間を距てゝは火箭を放つ、火箭は半空に飛びて一時に六七十個宛の火の玉を落下する、其間に光彈をも四度放つた、光彈は地に落ちて一面に濃かなる電光狀の光と色とを迸發し、大地は白雪を撒き散らしたる如くになる。敵は又た間斷なく爆藥を投げ付ける、其の綿火藥は炭素が多量なる故に朱よりも赤き光を四射する。更に又た我兵の所在を照明せんと各色の火光を放つ、いづれも硫黄と鹽酸加里とが燃え立つより此くなる色を發するのであるが、青キは硫黄と鹽酸加里とに炭酸銅を調合し、白キは硝石を調合し、赤キはストロンチアムを調合し、緑なるは硝酸苦土を調合し、黄キは炭酸曹達を調合したるものと思はれる。此等各色の點火は、敵が今晩初めて使用したるものと思へるが、彼等は其の運命の愈切迫し來れるより、所謂窮鼠の如き境遇となり、此く必死となつて我兵を防禦するものと見ゆる。各色の火の餘りに麗かなれば、予は菅生川（三州岡崎）の天王樣の御祭を見る樣ですナと云ふと、將軍には、菅生の御祭に吉田（三州豐橋）の花火を雜せた樣なりと答へられた。八時少前、



味方は確實に目的地を占領せりとの通報に接するや、副官の中村中尉は三鞭酒を將軍に侑め、予にも侑められたれば、盃を擧げて戰勝を祝した。祝し了つて獨り山を下り行くと、頻りに名を呼ぶ者があるより、振り返へり見ると、第十一師團經理部長の上田二等主計正（五郎）である、主計正には、貴君に差上げるもの

戰勝月夜の贈り物。

があるとて、一冊の白紙本を出されしかば、折柄さし昇る陰暦十月十六夜の月の光に照らし見ると、男郎花、女郎花、我毛香、野菊、撫子、萩、小巣菜など三十餘種の草花を乾搾し、心盡クシに貼りて一冊の卷とし、卷の末に

武夫の踏み荒したる野末にも時を得顔の秋の七草　五郎

とありたれば、予はこれを受けて、實にも優しき武夫の贈り物かなと謝すると、主計正には、先日來此卷を作くり、誰レにぞ贈らんものと案じ居けるに、ア、此の戰勝の月の夜に君に贈つてこそ、心に殘る隈もなけれと云はれた。

世に知られたる最も名譽の聯隊聯隊旗として旗手の旗

嶋野歩兵中尉（戦死）

▲陸軍歩兵中尉正八位勳六等功五級嶋野多多志君碑銘。

明治三十七年。王師伐ヲ俄羅斯ヲ于旅順口ニ也。第三軍司令官乃木陸軍大將。命ニ各師團ニ一齊進攻。而未レ奏レ功。獨第九師團。陷ヲ盤龍山東西兩砲臺ニ。克制ニ其死命ニ。事聞ニ九重ニ。天皇嘉賞。有ヲ一賞金ニ。九仞之功ニ之詔ニ。大將感泣。錄ニ將士功勞ニ。首授ヲ褒書第九師團陸軍歩兵少尉嶋野多多志ニ曰。明治三十七年八月二十日夜。潛入ヲ盤龍山東砲臺前哨線ニ。命ニ手兵ニ。破壞ヲ電流鐵條ニ。且擲ニ塊石ニ。炸壞ヲ地雷ニ者七。翌日突擊之際。率ヲ歩工聯合隊ニ。擁ニ護ス我軍ニ。破壞ヲ敵備ニ。又二十二日突擊之際。敵兵砲火猛烈。我先鋒躊躇。乃臨レ變制レ宜。躬率ニ軍旗ニ邁進。先登ニ砲臺ニ。其動作勇敢而機警。可レ謂ヲ功蹟甚大ニ矣。大隊長粥川歩兵大尉。亦贈ヲ書少尉父貞孝ニ曰。明治三十七年八月十九日夜。第七聯隊長大内歩兵大佐。特擢ヲ少尉于ヲ大衆中ニ。偵察ヲ盤龍山東砲臺ニ。且命ニ以ニ炸壞ニ地雷ニ及破壞ヲ電流鐵條網ニ之事ヲ。少尉乃冒ニ砲火ニ。入ヲ敵歩哨線ニ。炸壞ヲ其地雷七個ニ。翌二十日。率ニ歩兵十人工兵七人ニ。復入ニ敵中ニ。敵乃傳レ警。發ニ光彈ニ。點ニ探照燈ニ。放ニ大小彈丸ニ。如ニ雨霰ニ。少尉個個潛行。擲ニ炸藥ニ兩次。萬雷轟發。天地搖動。電線柱高飛ニ于天外ニ。且連炸壞ヲ地雷二個ニ。復命。我軍得ニ賴而啓レ行者。少尉之力居レ大。二十一日。少尉復入ニ敵中ニ。炸壞ヲ大地雷及鐵條網ニ。遂忍レ飢欲レ溺。伏ニ地隙ニ徹夜。二十二日。少尉纛ヲ軍旗奉持之命ニ也。告レ衆曰。男兒生荷ニ此榮職ニ。苟不レ樹ヲ旗于敵塞上ニ。多多志不レ復生還ニ。衆爲感奮。少尉乃躬先進前。衝ニ硝煙冒ニ彈雨ニ。遂樹ヲ于盤龍山東砲臺ニ。時敵砲三面競發。部下殆盡。少尉憤然曰。軍旗豈可レ使レ入ニ敵手ニ乎。唯當ヲ裂而呑。呑而後死ニ耳。聞者慷慨。志氣頓振。遂力戰。奪ニ盤龍山砲臺ニ。宜矣其事之逸ニ于旅聽ニ。而我大將之授ニ褒賞ニ也。嗚呼如ニ少尉ニ。可レ謂ニ忠史ニ者也。居四月。君一日。巡邏ヲ盤龍山西砲臺ニ。敵乃狙射。丸貫ニ頭而斃。卽日陞ニ歩兵中尉ニ。叙ニ功五級ニ。賜ヲ金鵄勳章ニ。實明治三十七年十二月三日也。享年僅二十有四。君以ヲ明治十三年十一月ニ生ヲ於石川縣金澤ニ。父曰貞孝君。爲ニ其長子ニ。二十八年。入ヲ陸軍中央幼年學校ニ。三十四年五月。學レ業。爲ヲ士官候補生ニ。三十五年。陸軍士官學校學レ業。三十六年六月。任ニ陸軍歩兵少尉ニ。三十七年。奉レ命渡レ海。與ニ俄兵ニ戰。大小七次。先奪ニ盤龍山ニ。後驅ヲ于盤龍山ニ。可レ謂ヲ與ニ盤龍山ニ有ニ始終ニ者ニ也。俄事平定。遣族价レ人曰。夫冒ニ敵彈ニ。登ニ盤龍山ニ。賦ヲ前盤龍後盤龍二長篇ニ。大書ヲ于盤龍山大隊本部之內ニ者。非ニ先生ニ乎。多多志生死與ニ盤龍山ニ。亦有ニ始終ニ。願其碑銘。待ヲ先生之筆ニ。則多多志當レ瞑ニ于地下ニ矣。因錄如レ此。予豈可ヲ以ニ不文ニ辭ヲ之乎。乃爲レ之銘曰。

彈丸雨下　硝藥雲從　個個潛行　汝如ニ盤龍ニ　軍旗忽飄　第一之峰　挺レ身深入　殄ニ彼頑兒ニ　功錄ニ天府ニ

名聞ニ九重ニ　矜式ニ後昆ニ　其日綿忠。

第九師團長陸軍大將從三位勳一等功三級男爵　大島久直題

正五位　志賀重昂讃

叔父　宮田彌作書

父　島野貞孝述

滿洲及關東半島の開發。

十一月二十九日夜穴暗記。

緒論。

現下日露陣地は相附接し來り、或は我が露語通譯官の新聞紙を卷きて增音器（マグノグラホン）の用に代へ、其內より發音して敵兵に投降を勸めたることあり、或は我が一少尉の英語を以て大音聲に敵に開城を促したることあり、或は弓を造り露語の矢文を射て敵に進退の決を奬めたることあり。此の如く相附接すれば、彼我共に一寸にても頭を出さんか、卽ち狙擊せらるゝを以て、相互に塹壕の內に滯陣して長日月間の無聊に堪えず、偶〻秋天に際し雁の半空に飛び行くを以て、彼此の將士各〻競ひて之れを射、以て僅かに消閑す。前數日、水師營南西に於ける我兵の一雁を射るや、彼我陣地の畧〻中央に落つ、一露兵出でゝ之れを拾はんとして我兵に狙擊せられ止む、我兵卽ち出で拾はんとして露兵に狙擊せられ止む、彼レ復た出で來りて我レ之れを狙擊し、我レ卽ち復た出でゝ彼に狙擊せられ、此の如く相交る〳〵すること數回、偶〻一鷹あり、之れを視、地に下りて雁を攫へ去る、彼我の兵相顧みて爲めに呆然自失す。此境に在りたる一砲兵將校、予を第三軍司令部に見、謂て曰く、特に此の事實を貴君に御話し申し上げて置

結論。

水師營の雁。

迷信。

きますと。

曩に霧島山神火、箱崎八幡宮の鳩群西飛、黃海々上鷹の捕獲等の靈を說く者あるや、予、帝國海事協會に演說して曰く、霧島は固と活火山のみ、其の噴煙に增減あるは常のみ、又た鳩は生長して卵の原產地に一たび歸る特性あるもの、其の一方向を取りて飛ぶは、偶〻原產地方に至りたるに過ぎず。若し夫れ鷹に至ては、黃海の兩側地方に最も多きもの、戰時に當り偶〻船艦の往來頻繁なるを以て、恰かも林梢に止まるが如き觀念を以て船艦の帆檣に止まり、且つ海天百里を飛翔して疲勞し居るを以て、輙ち水兵の之れを攫み得たるのみ、遠洋航行の間、時々各種の禽鳥が帆檣に止まるを水兵が攫み捕へて樂事とせるは、予の十數回も目擊せし所、何ぞ殊に奇瑞となすに足らんや、而かも此の如き事を以て靈と呼び奇瑞と叫びて喜ぶが如きに至ては、國民が頭腦の不健全なるを世界に公示するもの、不健全なる頭腦は、アルコール性を以て時々刺戟すると等しく、此の如き迷信性の事を以て國民を時々刺戟せんとするは、一代の國手を以て任ずの者の治術にあらず、神火、神鳩、靈鷹、我レ遂に之れを解せずと。

所謂靈及び奇瑞に對して予の確信する所以上の如し、是を以て砲兵將校の特に水師營外に鷹の雁を攫へ去りたる事實を通告したるも、唯だ一個の珍話として之れを待ちしのみ。然れども二十七八年の役に鷹の軍艦高千穗に止まるや、之れを以て奇瑞なりと呼び、今回の戰役中、

日本の外交史。

又た鷹の水雷艇白鷹に止まるや、之れを以て靈なりと叫びたる社會は、是れよりも多くの奇瑞、否な一の天警として宜しく水師營外なる鷹の事實に戒心せざるべからず、何となれば歴史は繰り返へすものなり、日本近世の外交史は、實に鷹の雁を撥へ去りたる事實に酷類するもの多ければなり。

豐太閤は、朝鮮を伐ち、朱明を亡ぼして大陸に雄圖を稱へんとし、前後七年の精力を傾注して征韓の二役を起しき、而かも其の結果たる何の得る所ぞ。明の援軍を大に破り、明室をして衰弱爲す無からしめ、愛親覺羅氏（清）の北より起るや、恰かも好し明の衰弱に乘じて之れを亡ぼし、以て清朝を肇（はじ）む、故に豐太閤は偶、以て愛親覺羅氏の爲めに其の祖業を肇むる先鋒に使役せられたる者、豐公蓋世の事業も畢竟水師營外に雁を射たる仕事に過ぎず、獲物は實に鷹に撥ひ去られしのみ。明治二十七八年の戰役も亦た然り、陸に海に百戰百勝し、結果たる何事ぞ。支那をして連敗起つ能はざらしめ、其の衰弱爲す無きを世界に公示し、因て以て獨、露、英、佛四國をして支那の各要點に據在せしめ、列國をして支那を爪分せしむる端緒を啓きたるもの、我が百戰百勝も大局より觀下すれば、畢竟水師營外に雁を射たる仕事に過ぎず、獲物は實に鷹に撥ひ去られしのみ。我が建國以來、外國と交戰せしは、豐公征韓の役と二十七八年の役とに過ぎず（北清の役は列國と共に支那の內亂を靖定せしに過ぎざれば數へす）、而して此の二大外戰共に水師營外に雁を射たる仕事に過ぎず、獲物は實に鷹に撥へられしとすれば、今回なる日露戰役の結果は、斷じて水師營外の雁たらざらんことを期せざる可からず、我既に過を再びす、豈に三度すべけんや。

戰勝地域利源開發調査の方法。

既に然り、過を三たびすべからざる第一著の方法とは如何、曰く日本國民をして戰勝地域の利源を開發せしむべき端緒を疾く啓かしむるにあり。予は戰勝地域の全部を日本の領土たらしむべしと主張する者にあらず、否な其の一部（元露國租借地方）を除きては、土地は之れを清國に返還すべきものなるを知る。然れども戰勝地域の利源を開發するに至ては何をか躊躇すべきぞ、日本國民たる者は疾く之れを開發して、水師營外の雁たらざらんことを期せざるべからず、而かも國民をして疾く利源を開發せしめんことを期せば、先づ之れを開發せしむべき端緒を疾く啓かざるべからず、而して之れが責に任ずる者は固より當局者にあり、當局者抑、如何なる方法を以て之れを行はんとするか。予は曉々たる議論を聞くを欲せず、唯だ言ふべくして直ちに行ひ得べき手段を聽き、先づ着手すべき第一の實際的方法を聽かんと欲するのみ、而して之れを聽くに先ち、參考として卑見を左に開陳せんとす。

著手の第一方法。

滿洲及び關東半嶋の利源を開發せんとするに當り、先づ著手すべき第一の實際的方法は、此

の地方利源の調査を遂行するにあり。利源の調査遂行の急務なるは誰人も之れを知る、然れども予の説かんとする所は、所謂調査を遂行する方法是れなり。在來政府の專門的技術者を各地方に派遣して所謂調査を遂行せしむるや、其の調査の方針及び結果に就ては、予の首肯する能はざる所のもの多し、所謂調査の結果は一個の公然將た秘密の報告書と成りて出づ、而かも此の報告書の公秘いづれなるを問はず、其の行文は見るべく、調査事項も亦た參考とするに足るべきものありと雖も、堂々たる厚サ二寸三寸將た四寸の報告書抑、實際に於て何の用かある、固より多少の用はありと雖も、要するに當局者は「君が實際此の事業を遣るとしたならば如何するか、如何すれば利益が直ぐ擧つて自分で飯が食へる樣になるか、其の手段方法を問ふ」と云ふ方針を以て調査を命せざるが故に、專門技術者の報告も亦た隨て實際の用となるもの殊に少きは理の當然のみ、故に所謂報告書を閲みすや、一個の學問の士として予は大に之れを參考ともし利益ともなすと雖も、實際の用に資せんとする見地よりすれば、殊に遺憾少からざるものあり。是を以て當局者が戰勝地域利源の調査を命ずるに當りては、「此の事業を自己にて實行せんとすれば、如何の手段方法を取るや」との方針に出で、所謂調査の結果を從來よりも殊に實際的ならしめ、以て言ふべく行ひ得べき手段を一般國民に開示し、一日も速かに戰勝地域の利源開發に著手せしめんことを要す。更に具體的に其の方法を

關東半島。ダルニー。

開陳すれば左の如し。

▲關東半嶋。　青泥窪（ダルニー）は露國の見地より觀下すれば、其の極東地方に於ける唯一の不凍的開港場なり、西伯利亞鐵道將た東清鐵道の渤海、黄海に對する唯一の門口なり、故に之れが經營に精力を傾注し巨費を支出せしこと固より其所なり。然れども日本の見地よりせんか、青泥窪たる地點は、細長き關東半嶋の極端に位し、大陸部卽ち滿洲の幹部と大に懸ヶ離れ、而かも此の半嶋は地に岩石多く、草樹乏しく、物産の絶無なる所とて、青泥窪の貿易的背面地域は殊に狹少且つ貧弱なるを如何。固より貿易的背面地域の狹少に且つ貧弱なればとて、此の港灣に依るにあらずんば貿易品を呑吐する門口を他に求むべからずとすれば、善かれ惡しかれ此の港灣に依賴するの外なしと雖も、關東半嶋を挿める滿洲幹部の左右兩腋には、滿洲の富源とも云ふべき肥沃の溪谷連なり、左腋（遼河溪谷）の門口には營口あり、右腋（鴨綠江溪谷）の門口には龍巖浦（港灣を改修するにあらずんば固より好碇泊場とならず、龍巖浦の改修は戰後第一に著手すべきものなりと雖も）あり。滿洲の幹部は既に手近に營口あり龍巖浦あり、此等の二門口よりして船舶に依り直ちに貿易品を呑吐し得る以上は、何を苦みてか運賃の船舶よりも高き鐵道に貿易品を荷積ミし、さて遙々と細長き關東半島の極端まで運搬し來り、かくて以て青泥窪より之れを輸出する必要あらんや、故に青泥窪が前途の發達も亦た測り知

關東半島開發の方法。

り得べきのみ。唯だ『ダルニー、ダルニー』と叫ぶ聲の大なると、且つ其の日本人の人口に膾炙する名なるとの二に因り、且つは戰後に於ける國民が新鋭の氣象と戰後經營の機運とに伴ひ、青泥窪の人口も繁昌も今日の幾倍に至るべきは固より期すべしと雖も、然ればとて多大なる希望を以て青泥窪の將來を待つは誤れり。

戰後、關東半島に於ける元露國租借地を以て我レ亦た租借せんとすれば、關東租借地を果して如何せば可なるか、之れを租借地となすに當りては、旅順口要塞には我が一旅團位の兵を駐在せしむべきを以て、要は唯だ左の數項を實際的に調査せしむるにあり。

一、旅順口駐在兵の飲用水、使用水、新鮮なる野菜、牛乳、鷄、鷄卵、家兎、牛豚肉は租借地域にて供給する事（全部まで供給し得べからずとするも）。

二、飲用水、使用水の分量は、現下の林相にては十分ならず、現下の如き飲乏せる林相にては將來益〻涸渇する傾向あり、且つ野菜を培殖し、家畜家禽を飼養せんとすれば、現下の水分と水量にては全く不足なり、故に十分に植樹を圖るべき事。

三、植樹は速成、中成、晩成の三期に分ち、速成の樹種（明石屋樹可ならん）、中成の樹種（松可ならん）、晩成の樹種（菩提樹、槲屬の如き濶葉樹可ならん）を今日より一度に植え付け置き、速成の樹種が兩三年經て成長する頃には、中成の樹種は漸く長じ、晩成の樹種も追々に伸び、此くて下草の潤澤すると共に、年月を經るに隨て水源は涵養せられ、飲用水、使用水も十分となり、且つ野菜の培殖、牧畜、養鷄等の事業にも十分に水を使用せしめ得べし。又た此の半島には地裂及び溪谷の涸渇せしもの殊に多く、而して白楊、赤楊は地味に適ふを以て、頻りに之れを植ゆれば、疾く成育し且つ水源を涵養するに足るべし。

四、右の如く植林するに就ては何の樹種が此の地方に最も適するや、苗木は何處より輸入するを以て最も廉價とし且つ便宜とするや、植樹の方法、植樹すべき地點等の實際的調査を遂行せしむる事。

五、此の地方に適當する野菜、家畜、家禽等の種類、此等を何處より輸入するを以て最も廉價とし且つ便宜とするや、此等事業の創起、計畫、資本、實行方法等に關する實際的調査（例へば駐在兵の殘飯を利用すれば鷄豚類は廉價に且つ便宜に飼養せられ、且つ容易に肥大となり、生産力も增進する事、鷄豚類の排泄物は直ちに野菜培殖の肥料とすべき事と云ふが如き類）を遂行せしむる事。

六、旅順口に多數の日本兵駐在し、青泥窪（ダルニー）にも人口漸く增加し、關東半島に事業を興起する者も亦た多數となれば、青泥窪の輸入は增加すべく、而かも輸出物とては前に說明する如く皆無同樣なりとすれば、空歸航の船舶が荷足は如何すべきや。幸に關東半島は堅緻恰

好なる石灰岩殊に多きを以て、之れを積荷してバラストとなし、日本內地の築港、鐵道、砲臺築造等の諸工事に使用すべし。果して然らば石の伐採方法、使用の方途、使用の土地先等に關する實際的調査を遂行せしむる事。

牧馬。

▲牧馬。　滿洲は牧畜國なり、其の人民は家畜の飼養及び使用に慣熟すること日本人の比にあらず。比來軍國益〻多事、軍馬の脆弱なると不足なるとに寒心し、政府將さに大に馬匹改良の事を擧げんとす。然れども日本內地に於て之れを擧げんとせんか、牧馬すべき土地の狹少なるを如何せん、偶〻廣寞なる處ありとするも、要するに牧草の發達惡き山嶽地方たるに過ぎず。然れば政府にして內地に費す所の資本と勞力との多分を滿洲の廣寞たる平野に携え來り、歐米の種馬を輸入し、以て家畜の飼養及び使用に慣熟する支那人をして在來の滿洲馬を改良せしめ、大に改良馬を滿洲の野に飼養し置き、一朝有事の日に當りて之れを徵發すれば、事を起すの容易にして實を擧ぐるの利益あるは內地に於てするよりも必ず數倍するものあらん。故に此の事業に關し、滿洲の如き風土にては乘馬用のハックネー種を最も可とするか、サローブレッド種を可とするか、將た又た關東半嶋の如き石灰質に富める磽确の地方にてはアングロ・ノルマン種を試むべきか（內地にては成功せざりしと雖も）、土人の馬に之れを交尾せしむとすれば、其の監督、實行等の方法如何、之れを著手する具體的の順序如何等を實際的に

水產。

伐木事業。

鑛山。

調査せしめんことを要す。

▲水產。　何方面には寒海流が流駛する故に明太魚が多しとか、何邊には對馬海流の餘波か流駛する故に鰤が捕れるとか云へる所謂調査は、必要は必要なれども、今日となりては大概にして可なり。今日調査すべき要項は、如何にして漁民の移住を實際的に促し得るや。一戶五十圓宛の小屋を海岸に建て列ね、每一戶に付一反步宛の野菜畑（魚類のみを食すれば壞血的の疾病を釀すを以て）を附屬せしめ、之れより家賃等の費用として一ヶ月一圓宛徵するが如き方法に出づれば、果して漁民の移住を實際に促すに足るべく、且つ資金を容易に回收するに足らん。偖此の如くして漁獲したる物を如何に處置すべきや、長崎なり博多なり門司なり將た大阪なり上海なりの魚市場、海產物市場と如何にして連絡すべきや、所謂調査すべきは此等實際的のものならんことを要す。

▲伐木事業。　三十年間勢力を扶植し蟠屈し居れる安東縣の支那材木商と如何にせば競爭し得るや、是れ予輩が第一に聽かんとする調査の要項なり。若し夫れ鴨綠江溪谷には何々の樹種に富み、一個年幾千萬尺〆の材木を產出すと云ふが如き調査は、第二第三に置かんことを要す。

▲鑛山。　鑛山の調査も亦た然り、此の鑛塊に黃金が九十プロセント含有するとか、將た又

た痕迹しか含有せずとか云ふ如き事は、固より必要には相違なきも、果して之れを採掘するに當ては、使用水の所在、分量、使用燃料の所在、多少、價格、將來に於ける足不足、道路の難易、勞力の賃銀、衣食を得べき市場との距離、器械類を輸入し將た精製品を輸出する港灣との距離等、最も實際に適切なる事項を調査せしめんことを要す。若し夫れ之れが調査の任に當る人は、一年半年の天幕生活には過分なる大家を要せず、未だ家を成さず而かも名を成さんことに鋭意にして、一年半年しきの衣食住の窮乏には堪え得る年壯の中家（大學院在學の鑛山專攻の理學士などを指す）を派遣すれば、經費を多く要せずして効果を擧ぐることは殊に多かるべしとは、予の嘗て立論したる所なるが、今回政府が滿洲地方の鑛山調査に派遣せし面々を見るに、孰レも年壯氣鋭にして好適任なる博士學士のみなれば、予は此事に就ては復た此所に贅せず。

之れを要するに以上の方針を以て、滿洲の利源を實用的に調査せしむるは今日の急務なり。特に今日の如き我軍が三里、五里、七里の間に兵站部を設け、食料、飲水、苦仂（クーリー）等の供給を得、且つ休憩、宿泊するに最も容易なる際に當りてこそ、調査を遂行するに最も容易にして、且つ其の効果は平時に數倍するものありと信ず。前年予の南嶺（福建江西の境上）に入るや、食事毎に通譯者及び苦仂と共に米、肉菜、薪炭、醤油等を購ひ、火を作くり、湯を沸し、米を炊き、肉菜を調理せしを以て、一回の簡單なる午餐を果たすにも必ず二時間を費したり。此の如く無用なる時間を徒費するは調査を疾く進行する所因の途にあらず、故に今や滿洲の各地に我が兵站部の點綴する間に當りて疾く調査を遂行するを要す。

尚去る二十六日以來大戰鬪連續致し、小生は攻城砲兵の山頂に宿泊致居り候處、今や兩軍龍拏虎擲の眞最中に有之、餘リ長き事とて一先づ第三軍司令部に歸り、未だ此義に關しては御書送可申時機に立ち到らず候折柄、滿洲を實用的に調査するは最早一日も忽せにすべからざる事を悟り、山を下りて直ちに筆を取り此編起草致候、然れば胸裡殊に多忙を極め居り候儘、行文の亂雜なること平常に幾倍するは自から愍笑致候へ共、當局者が愚陳の如き方針を以て滿洲を疾く調査せられんことは偏に希望に不堪候、草し了るや

『功名不レ到書生手、座撫二吳鈎一惜二壯圖一』の古句を想ひ起し候、十一月二十九日夜。